夢幻の国

－ガチャを引ける能力－

うえはらじゅん

「夢幻の国」

―ガチャを引ける能力―

「夢幻の国」　―ガチャを引ける能力―

◎トナカイ娘と聖なる夜（プロローグ）　２０１８年１２月

１２月２５日。

街がクリスマスムードに染まりきっている中、俺が心の中で叫ぶのは、別のワードだ。

「今日は……給料日ッ！」

正確には給料日兼ボーナス支給日。

クリスマスなんて浮かれイベントよりも、現実的でありがたい日だ。

俺が勤めてるのは、従業員３５人の中小企業。

給与はお世辞にも高くないし、ボーナスに至っては給料の半月分という控えめさ。

「半年分じゃないぞ、半月分な！」と自分に言い聞かせながらも、文句はない。

だって、賢くもなく取り柄もない俺を正社員で雇ってくれてるだけで、感謝しかないのだから。

クリスマスソングが流れる街中を足早に抜け、俺は駅前のスーパーへ向かう。

いつもより少しだけいい惣菜を手に取り、値引きシールの貼られたパックを吟味。

以前はすべて外食だった。食べたいものを食べ、飲みたいものを飲んでいた。

でも今は――

料理はからっきしだけど、米は炊くようになった。

酒はビールから発泡酒へ、日本酒から安焼酎へ。

量も減って、むしろ健康的な生活にシフトしている。

「……全部、ガチャのためだ」

飲み会も減らし、合コンには行かなくなった。

友人からは「彼女できた？」なんて聞かれるが、そんなわけはない。

ただ俺は、金を浮かせてその分を全力で――

「ガチャにぶち込むっ！」

今日は特別だ。ボーナス日だ。

浮いた金で、期間限定のクリスマスガチャを引きまくる。

プレゼント？　彼女？　サンタ？　そんなもんよりガチャだ。

安アパートに帰宅した俺は、速攻でノートパソコンを起動。

昔は電源つけっぱなしだったけど、今はマメに電源オフ。節電のつもりだけど、電気代は特に変わらない。意味あったのか……？

いつもの手順で、まずは銀行サイトで振込額を確認。

給料とボーナス、それぞれを表計算にペースト。

差し引き計算して――

「ガチャ予算、合計……１０万７０００円！」

ガチャに使うのはこの『今月のガチャ予算』分だけ。

俺は大人だ。予備費もちゃんと組んであるし、緊急出費に備えた計算もしている。

だから、ボーナスを『丸々』突っ込むことはない……けど、気持ちは丸投げしている。

今回のクリスマスガチャは１２月２２日から２６日までの期間限定。

目玉は、サンタクロース。出現率１パーセント。

理論的には３万円で１枚出る計算だ。

「さあ……回すぞ……っ！」

次々とガチャマシンから出てくるカプセルを確認して、カプセルに張り付いた紙の説明書を読む。

召喚メダル以外は横によける。今日の目的はミニスカサンタだ。それ以外は保留だ。

……で。結果。

白色人族のミニスカサンタは出なかった。

代わりに出たのは、２枚の馴鹿《となかい》人の召喚メダル。

女の子のイラストで、赤いサンタ服風の衣装。

……まあいいさ。楽しむ準備はできてる。

俺は１枚のカプセルを開け、召喚メダルを指先ではじいた。

ポンッ。

小さな破裂音とともに、ふわりと白い煙が立ち上がる。

その中心から現れたのは――

「こ、こんにちは……」

おずおずと現れたのは、ミディアムボブのスリムな女の子。
赤いオフショルダーのミニスカサンタ衣装が、白い肌と大きな胸を見事に引き立てている。
年齢は２０代前半くらいか。あどけなさと艶っぽさを併せ持つ顔立ち。
誰が見ても「可愛い」と言うであろうルックス。

だが、その最大の特徴は――
彼女の頭に、しっかりと生えた2本の大きな角だった。

「……トナカイ、なんだな、やっぱり」

ミニスカサンタ姿の彼女がもじもじと立ち尽くしている。
その姿がまた、妙に色っぽくて、守ってあげたくなる雰囲気だ。

「あ、あの。わたしは……なにを、すればいいですか……？」

おっとりとした口調が、柔らかな印象をさらに強める。
今日はクリスマス。がっつくのはなんか違う気がする。
目の前にいるこのトナカイ娘も、そういうハード路線には向いてなさそうだ。

「なら、聖なる夜は――恋人ごっこ、だな」

俺はそっと彼女の顎を指でクイッと引き、見つめ合った。

「これから2時間、恋人として『聖なる夜』を楽しませてくれ。そして、君も楽しんでくれ」

一瞬きょとんとした彼女の目が、ゆっくりと形を変えて、やがて小さくうなずく。

「なまえは……？」
「好きなように、呼んでください」
「……じゃあ、君の名前は『麻里亜』だ。阿部麻里亜。よろしくな」
「はい、ごしゅじんさま。よろしくおねがいします。麻里亜を、たのしんでください。麻里亜を、たのしませてください」

まるで祈りのように、彼女は静かにそう言った。

――せっかくの聖夜だ。
なら、名前は『マリア』しかない。
俺は笑って、彼女の唇にそっと、キスを落とした。

◎ガチャを引くことができるスキル　２０１８年１０月

俺の会社は、誰もが名前を知っているような大企業――では、ない。
している仕事は大企業のシステム部門なんだけど、「現場が大企業」ってだけだ。
オフィスは品川区の２３階建てビル。その中の３階から１５階が、超大手企業のシステム開発部門だ。

俺が働いてるのはその中の一角、１２階フロア。フロアには４００人。社員は全体でたったの２０人、残りの３８０人は外注――いわゆる『派遣』とか『業務委託』という、存在。

ちなみに、俺の会社は三次請け。
業界じゃそれが普通で、四次請けとか五次請けまでいる。
うちが四次請けを使ってたこともあるし、五次請けの人が働いてた時期もあった。

だからこのフロア、構成はだいたいこんな感じだ。

社員：２０人
一次請け：５人
二次請け：約１００人
三次請け：約１５０人
残り：四次請けやそれ以下

そして、この業界は男だらけ。
９割以上が男だから、ワンフロア４００人中、３６０人はおっさんか若者の男。

にもかかわらず、男子トイレの個室はたったの4つ。
全員が1日1回5分だけ使ったとしても、計１８００分。
４部屋×８時間＝１９２０分。理論的にはフル稼働状態。

実際、常に2～3人、ひどいときは5人並んでる。

張り紙で「長時間のご利用はご遠慮ください」って書いてあるけど、誰も読んじゃいない。
混んでるときは上下の階に遠征するが、そこも似たような混み具合。
余裕のあるときは列が少ない階を狙うが、余裕がないときは一階や二階のショップ横やカフェ裏のトイレに逃げる。
そんな地味で地獄のようなトイレ戦争。
――だが、最近ちょっとだけ便利になった。
「トイレ空室センサー」なるものが導入されたのだ。
トイレのドアにセンサーを設置し、社内ポータルで空室状況が見られるようになった。
さすが大企業。予算と技術だけはある。
以来、俺は常にそのページを開きっぱなしにして、トイレが空いた瞬間を狙って突撃している。
……さて、そんなある日。午後4時過ぎ。
地獄のようなミーティングが終わって、ようやく個室にこもることができた。
そこで、事件？　は起きた。
「ピロン。ソーシャルゲーXXXXXXXXXXいます。このご案内は……お客様の固有スキルは『……ガチャを引くことができるスキル』です」
……どこからか、スマホの音声が漏れている。
どうやら誰かがゲームしてるらしい。
カランカラン、とトイレットペーパーを回す音に、ジャーッと水を流す音。
その合間を縫って、機械音声が断続的に聞こえる。
――ったく、トイレでゲームとか、そりゃ行列もできるわけだ。
しかもこの時間帯、本部長が見回りしてるかもしれないのに。
噂じゃ、本部長に見つかったら社員は減給、外注は即契約解除らしい。
本当かどうかは知らないが、まあ岡部本部長ならやりかねない。
「つきましては送付先をご指定ください」
……ああもう、音ぐらい消せよ。てか、会社じゃなくて家でやれ、家で！
「かしこまりました。ご自宅ですね。操作説明は……召喚XXXXXの国の冒険を……」
ようやく静かになった。
これで集中でき――
あ、出るもん出ないわ。もう無理。気になりすぎて。
一から踏ん張りなおして、外に出ると隣の個室は空。
……岡部本部長に見つからなくて、運がよかったね、隣の人。
俺はため息をつきながら手を洗い、現場に戻った。
――そして、その夜。
俺がアパートに帰宅し、部屋の灯りをつけた瞬間。
「……は？」
ベッドのすぐ横に――見慣れない物体が鎮座していた。
高さ1メートル弱の、プラスチック製の筐体。
回転レバーにダイヤル、上部には透明のカプセルホルダー。
そう、それは――
「ガチャマシン……？」
何故？　誰が？　どうやって部屋に入れた？
鍵を持ってるのは、半年前に別れた彼女と、大学時代の友人の半田くらい。
ノゾミちゃんは絶対に来ないから、犯人は半田か？
とりあえずメッセージを送っておく。
「お前、俺んちにガチャ置いたか？」
それにしても、妙なマシンだった。

3面にそれぞれ「デイリーガチャ」「常設ガチャ」「イベントガチャ」と書かれたダイヤルがついている。
排出口は共通で、どこを回しても出てくる物は一緒っぽい。
見た目は普通のガチャガチャ。でも、明らかに『普通じゃない』。
「……もしかして、昼間のトイレで聞こえてきたスキルって……？」
俺は、得体の知れない不安とわくわくを抱きながら、ガチャマシンを見つめ続けていた――。
◎初めてのデイリーガチャ　２０１８年１０月
翌朝、目覚めてすぐ、俺はスマホのメッセージアプリをチェックした。
半田からの返信が来ていた。
「何それ？　昨日は行ってないよ。つーか出張で名古屋だし」
写真まで添えられている。
映っているのは豪華な朝食バイキング……なるほど、いいホテルに泊まってるな。
さすが上場企業の正社員様って感じ。
「じゃあ……誰が置いたんだよ、このガチャ」
ベッドの横には、昨日のままのガチャマシンが堂々と鎮座している。
いっそ捨てちまうかとも思ったけど、粗大ごみ扱いになるかどうかも分からんし……面倒だ。
そう思いながら、ふとマシンの側面に目が留まった。
「……カウンター？」
「デイリーガチャ」と書かれた面にだけ、小さなカウンターが付いていた。表示は『１』。
昨晩も『１』だった気がする。
なら、深夜０時で更新されるわけじゃないのか。
あるいは――未使用分は持ち越せない仕様か？
以前ハマってたソシャゲも、ログボ取り忘れたら翌日は消滅してたし。
同じパターンかもな。
「だったら……使うか」
俺は決意を込めてレバーを回した。
ガチャッ、ガチャッ――コトン。
落ちてきたのは、全面透明のカプセル。
サイズは普通より二回り小さい。中には缶コーヒーのようなミニチュアと、説明書らしき紙。
……しかも、紙はカプセルの内側にぴったり張り付いていて、開けずとも読めるようになっていた。
『初級ＭＰポーション。ＭＰを１０％回復する。コーヒー味・無糖』
「……は？」
俺は思わずカプセルをひっくり返して見直す。
どう見ても、精巧に作られた１９０ミリリットル缶コーヒーのフィギュア。
しかもブラック無糖。よく見ると「上嶋珈琲」と書いてある。
……ん？　上嶋？　こんな字だったっけ？
それはさておき、なぜこれがＭＰポーションを名乗っているのか。
いや、名乗ったところで、どう見ても飲める代物じゃない――よな。
俺は両手でカプセルを包むように持ち、左手をやや下にして、反時計回りにひねった。
ポンッ！
という小さな音と共に、うっすらと煙が立ち上った気がした。
次の瞬間、俺の左手に残っていたのは――
「本物の……缶コーヒー？」
ズシリとした重み。缶の中で揺れる液体の感触。
これは……フィギュアじゃない。明らかに飲めるコーヒーだ。
驚いて足元を見ると、カプセルはどこにも見当たらない。
完全に消えている。
手元には、「初級ＭＰポーション」と書かれた紙と、ブラック無糖のコーヒー缶だけが残された。
昨日、隣のトイレ個室から聞こえた『ガチャを引けるスキル』って、もしかして……
「……あれって俺のスキルだったのか……？」
混乱する思考を押しのけるように、壁掛け時計を見た。
「ヤバ……もう出社の時間だ！」

冷蔵庫にコーヒーを突っ込み、急いで顔を洗って、ワイシャツとスラックスに着替える。
今日は10月とは思えないほど暑いから、上着は不要。
現場はカジュアルOKだけど、俺はいつも無難な白シャツで通している。
2、3日なら着回しもバレないし、朝の準備がラクなのだ。
財布とスマホとティッシュだけを詰めたカバンを手に玄関へ。
「この時間なら……コンビニ寄っても余裕だな」
そう、朝ごはんはいつも通り。
コンビニおにぎりとコーヒー、いつもの組み合わせで、一日が始まる――
……不思議なスキルと、謎のガチャマシンを部屋に残したまま。

◎三百円課金してみる　2018年10月

「ほらよ、お土産」
仕事帰り、俺の現場の近くにまで寄ってくれた半田が、紙袋をドンと渡してきた。
名古屋出張の帰りだそうだ。袋の中にはいろうと、なぜかキャバ嬢の名刺が数枚――
……わざとだな。絶対わざとだ。
それはさておき――
アパートに戻った俺の視線は、部屋の中央に鎮座するガチャマシンに自然と吸い寄せられていた。
ということがあってから2週間。
毎朝のデイリーガチャはすっかり習慣化していた。
更新タイミングは深夜0時きっかり。
カウンターが『0』のときに0時を迎えると『1』になるけど、すでに『1』だった場合、『2』になることはなかった。
――つまり、一回取り逃すともう二度と戻ってこない。
そして、俺は確認で取り逃した1回と先週の社員旅行で回せなかった1回、計2回分の損失を出した。
もったいなかった……。
この2週間で出たガチャの成果はというと――
五百円玉みたいな謎コイン×2
缶コーヒー（190ミリリットル）×4
ボトルコーヒー（280ミリリットル）×2
栄養ドリンク剤×2
犬耳の女の子が描かれた重厚な銀色メダル×1
安っぽいナイフ×1
それぞれ、コーヒー類はMPポーション、栄養ドリンクはHPポーション扱いらしい。
缶コーヒーが初級、ボトルが中級。味は普通においしい。
ポーションと言われれば気分的に元気になる気が……しないでもない。
「……で、問題はこの銀のメダル」
説明書によると「召喚メダル」なるものらしい。
どうやら、コイントスの要領で投げるとキャラクターが召喚される仕組みらしい。
召喚……ゲーム用語ではあるけど、現実で言われてもピンと来ない。
けど、気になるのはその一点だ。
――『召喚』って、何だ？
とまあ、そんな思考を巡らせながら、俺はガチャマシンの案内プレートを見直した。
どうやら更新されているようだ。
〈デイリーガチャ〉
1日1回、無料。翌日に繰り越し不可。更新は0時0分。
排出率：200YEM：12％／召喚メダル：4％／その他（ポーション類等）：70％
〈イベントガチャ〉
1回300円。期間限定。今回のテーマは『紅葉の森』
目玉アイテムは、伝説級っぽい「世界樹」装備やレア召喚メダル
「……引きたい……！」
正直な気持ちだ。
今まで出た缶コーヒーや栄養ドリンクだけでも十分に300円の価値がある。
それに、世界樹の木刀とか言われたら、ゲーマーとしては血が騒ぐ。

――引かない理由、ある？

俺は迷いながら、財布から１００円玉を取り出し、投入口に入れる。
カチャンという音とともに、デジタルカウンターが『１』に。
さらに２枚、投入して合計３００円。
カウンターに『３００円』、そして『ガチャ回数：１』の表示。
だが、ここで俺は一旦返却ボタンを押した。
すると――ガチャマシンからは、３枚の１００円玉が『カランカラン』と取り出し口へ戻ってきた。

「……おぉ……返金できるのか。すげぇな。てか、返却ボタンがあるから当然か」

試しに、次は千円札を入れてみる。
投入口に差し込んだ瞬間、スッと吸い込まれて、表示は『１０００円』に変わった。
……パチンコ屋かよ。

「いや……でも、ここまできたら……引くしかないだろ……！」

ガチャッ、ガチャッ……ゴトン！
落ちてきたのは、少し大きめのカプセル。
中に入っていたのは――金色の箱のような容器。

「……あ、これ……！」

あの有名な『皇帝液』。
体育会系の課長が風邪気味の部下に「これ飲んで早く治せよ！」って渡す、あれだ。
ドラッグストアだと７００円くらいするやつ。

「……３００円でこれは、普通にアタリじゃん」
そう思った瞬間、ふと疑問が浮かぶ。
「あれ、でも『皇帝』って……漢字、これで合ってたっけ……？」
答えは出ないまま、俺はカプセルの中身を手に取り、少し誇らしげに眺めていた。

イベントガチャ――いいかもしれない。

◎召喚メダル　２０１８年１０月

朝起きて、顔も洗わずまずやること――それが「デイリーガチャ」。
あれ以来、毎朝のルーティンになってしまった。
夢か現実かはさておき、このところ出張も旅行もないので、デイリーガチャを欠かさず引けている。
この１０日間で、俺はすでに３３００円をイベントガチャに突っ込んだ。
初回のお試し１回と、後日回した千円札×３枚。
計１１回だ。

戦利品の中身はというと――

ＨＰポーションは「皇帝液」が３本。
そのうち２本は例の風邪に効くとかいう金色のやつ。
もう１本は、友人の岡崎が「これ飲めば３発イケる」と豪語する最高級版。
お値段なんと３０００円相当。これが「フルＨＰポーション」ってことだ。

ＭＰポーションは「高級」が２本。
見た目はどこかで見たようなロゴ入りの紙カップコーヒー。
しかも、カップに「ありがとう！」とか「元気出して」って手書き風のメッセージ付き。
いや、でもスペルはＢＡＣＫＳだっけ……？

注意点はひとつ。
この紙カップ、カプセルから出した瞬間から『普通のホットドリンク』になる。
つまり、すぐに冷める。
カプセル内はどうやら時間停止でもしてるっぽい。
――なんて、ゲームみたいな仕様だな、ほんと。

ポーション系以外では、「キュアポーション」という謎のガラス瓶も出た。
アンプル型で、ハート形の石やすりと極細ストロー付き。
病院で医者が注射針を刺すような形だけど、昔は内服液として普通に飲まれてたらしい。
昭和、すごいな。
さて、真打ちはここからだ。
出た召喚メダルは３枚。

猫耳の男の子（銀）
弓を構えた女性（金）
そして、以前のデイリーガチャで手に入れた犬耳少女（銀）

ついでに、緑色のロングブーツもひとつ出た。
その名も『世界樹蔦の編込ブーツ』。
名前は強そう。説明書によれば「防御力＋２５％、俊敏性＋２５％」というレアアイテム。
だが――見た目が、壊滅的にダサい。
真緑。蔦そのままの編み込み。
これを履いて外を歩ける人は、ある意味で本物の勇者だ。
サイズだけは完璧に合っていたが、着用は断念。押し入れ行き、決定。

それにしても、召喚メダルの重量感や存在感は群を抜いていた。
ずっしり重くて、手に持つと妙に緊張する。
「……本当に、召喚できるのか？」
説明書には「メダルを投げてください」とだけ書いてある。
おそるおそる、俺は犬耳の女の子が描かれた銀の召喚メダルを指ではじいた。

――ポンッ。

音がしたような、しなかったような。
薄い煙が立ち上がったようにも見えた。
そして次の瞬間。
「こんにちは、何をすればいいですか？」
俺の足元に、体育座りの女の子がいた。
「……は？」
状況が飲み込めず、完全にフリーズする俺。
高校生くらいの、かわいい女の子。
犬耳がぴょこんとついていて、尻尾まである。
まるでアニメから飛び出してきたようなビジュアル。

彼女は立ち上がって、ニコッと微笑むと、
「えっと、状況が理解できてないみたいですね？　じゃあ、チュートリアルモードに入ります。チェッ、面倒」
……舌打ちすな。
けど、あざとく首をかしげて笑う姿が、逆に可愛いから困る。
「だ、誰？」
「私は『リア』です。犬人属、職業はモンク。召喚時間は２時間４分。本名じゃないけど、とりあえず『リア』って呼んでください」
そう言って、手渡されたのは、あのカプセルに入っていた説明書だった。
確かに、そこには「犬人属（ミックス）、女性、モンク、ＨＰ１０５、ＭＰ７２、召喚時間２：０４」と書かれている。
「……本当に、召喚されたのか……？」
「はい、ご主人様。命令をどうぞ」
両手を胸の前で合わせて、おじぎするリア。
可愛い。無防備。ちょっと小悪魔。
「ご、ご主人様って……」
「違いました？　では、なんてお呼びすればよいですか？」
「あ、いや、ちょっと色々教えて欲しいんだけど……」
「もちろん。チュートリアルモード中ですので何でもどうぞ。チェッ。でも、その前にご主人様の『目的』を先に教えてください。時間制限がありますからね」
「目的？」
「ええ。召喚されたってことは、何かご用があるんでしょう？　この状況から察するに……エッチ系ですね？」
「っ！！」
不意打ちの直球に、言葉を失う俺。
「私、エッチ系の召喚は大歓迎ですよ」

リアはそう言いながら、俺の頬に手を添えて、顔を近づけてきた。
――あかん。これは、あかんやつや。
数時間後。
現実に引き戻されたときには、リアの姿は消えていた。
召喚時間、2時間4分。
夢のような、でも確かにそこにあった時間。
俺は、ベッドに倒れ込みながら、ひとりごちた。
「……リア、チュートリアル逃げたな……」
でも、後悔はなかった。
久々の『全力』だったし、終了後に高級HPポーションを飲んでしまったくらい、体力もMPも使い果たしていた。
リアにもHPポーションを渡したら、すごく嬉しそうに飲んでたっけ。
……また、会えるのかな。

ガチャマシンは、部屋の片隅でいつも通りに、黙っていた。
◎チュートリアルモード　2018年10月
昨夜は、まさに夢のような時間だった。
信じられないかもしれないが、召喚メダルをコイントスしただけで、美少女がこの部屋に現れたのだ。犬耳をつけた小柄な少女――リア。彼女は俺の呼びかけに応じ、チュートリアルモードと称していろいろなことを説明してくれ……るはずだったのに、すぐにご奉仕モードに入ってしまった。いや、あれはあれで素晴らしかったけど。

だが、召喚という謎の力が本当にあるのなら、もっと深くこの仕組みを理解しておいた方がいい。リアは2時間4分で時間切れだったが、今回は理性を優先しよう。心を鬼にして。
「というわけで……ノーム、召喚！」
俺が今朝手に入れた銀色の召喚メダルを指先で弾くと、ふわりと煙のような光が現れ、小柄な老人が部屋に現れた。身長はせいぜい子供くらい、白くふさふさの髭を蓄えたその姿は、まさに絵本に出てくる小人そのもの。
「ほい、何の用じゃ？」
「すみません、チュートリアルモードでお願いします！」
「チッ……面倒な依頼じゃのう……」
彼は舌打ちしながらも、どこか達観したような顔でうなずいた。
「儂のことは好きなように呼んでくれ。ノームでもノムでも、何でもよい」
「じゃあ……ノムさんで」
「ほい、それで十分じゃ」

チュートリアルモードに入ったノムさんは、俺の質問に次々と答えてくれた……と言いたいところだが、いちいち嫌そうな顔をする。
「面倒くさいのか……？」
「そりゃあそうじゃ。普通の召喚なら、敵を倒せとか、性交の相手をせいとか、そういう単純な命令で済む。だが、チュートリアルは違う。主《あるじ》が何を聞くかわからんし、説明せにゃならん。頭を使う分、手間がかかるんじゃよ」
なるほど。だが、こっちは命を預けるような気分でこのガチャの力を使っている。こんな怪しげな出来事、わからないままでは、危なっかしくて仕方がない。
「……お願いです。ちゃんと教えてください」
そう言うと、ノムさんは渋々ではあるが、頷いた。
「仕方がない。主がそれほど知りたいというのなら、全部話そう」
――というわけで、ここからが本番だ。

まず、俺が最初に聞いたのは、「召喚される者たちとは何者なのか？」ということ。
「召喚されるのは、普通の奴らじゃ。儂はノーム――土の妖精じゃ。ほかにも、獣人や死者、モンスターなど、様々な種属がおる」
「じゃあ、召喚されたキャラはどこから来るんです？」
「それは儂らが住む世界からじゃ。主が召喚したから、儂らはこっちに来たんじゃよ」
「え……じゃあ、この現実世界に、別の世界の住人が来てるってことですか？」

「そのようじゃな。ただ、儂らからすれば自分の世界のほうが本来の現実じゃ。こっちこそ夢の世界のようなものに感じるのう」

ややこしいことを言うが、要は、召喚されたキャラは異世界から来ている。しかも、彼らにとってはこっちが夢であり、向こうが現実――という構造なのだ。

さらに興味深かったのは、彼らには召喚時間という制限があり、時間が過ぎると元の世界へ戻ってしまうこと。そして、驚くべきことに「死んでも戻る」とのことだった。

「え、死んだら終わりじゃないんですか？」

「いや、こっちで死んでも、向こうの世界では死んでおらん。召喚が解かれて戻るだけじゃ」

……とまあ、そこまで聞いて、俺はだんだんと混乱してきた。

「……つまり、召喚って魔法なんですよね？」

「そのとおり。召喚主がメダルを使って召喚魔法を発動したら、儂らがやってくるんじゃ」

魔法。そう、ノムさんは断言した。俺はいつの間にか魔法使いになっていたらしい。レベル1、スキルはガチャ引きオンリーの、超初心者だが。

次に見せたのは、ガチャから出てきた銀と金の召喚メダル。

「これは何ですか？」

「召喚メダルじゃ。そこに描かれたキャラクターが召喚される。銀はアンコモン、金はレア。希に聖金とか白金なんてのもあるらしいが、儂は見たことがないのう」

さらにノムさんは、メダルがどうやって生まれるのかについても話してくれた。

「召喚された者が死ぬと、メダルになることもある。あるいは、敵を倒したときにドロップすることもある。ガチャマシンからも出る」

どうやらガチャマシンは、ただの機械じゃなく、異世界と現実世界を繋ぐ何らかの『インターフェース』なのかもしれない。

次に、デイリーガチャからよく出てくる五百円玉のようなメダルを見せると、ノムさんは「ああ、それは100YEM硬貨じゃな」と答えた。

YEMとは、夢幻の国の通貨単位らしい。

「この世界の通貨は円なんですが……」

「ふむ。ならば、円のようなものだと考えてくれ」

YEM硬貨には10、100、1000、10000、100000といった単位があるらしく、しかも10枚集めれば自動で両替される仕組みがあるという。どうやらアイテムボックス――『インベントリ』に入れれば、自動的に変換されるらしい。

「でも、俺にはそのインベントリってやつが見当たりません」

「夢幻の国の住人ならインベントリがあるじゃろ」

「ここは日本ですよ」

その言葉を皮切りに、ノムさんの態度がガラリと変わった。

「主よ、すまんかった。どうやら儂が来たのは……夢幻の国ではなく、『日本国』とやらだったようじゃ」

そこから彼は、まるで何かが切り替わったように、丁寧に説明を始めてくれた。

魔法、召喚、ステータス、YEM通貨、召喚時間の仕組みさ――全てを、彼は俺に教えてくれた。

なかでも印象深かったのは、召喚された者たちは『命令には絶対に逆らえない』ということ。

「命令という形をとれば、感情や意思に関係なく、実行してしまうのじゃ。主の命令に逆らうことは絶対にできぬ。これが、召喚の絶対条件なのじゃ」

ノムさんはそう言って、どこか寂しげに笑った。

最後に彼は、「日本に召喚されたのは初めてだ」とつぶやきながら、感謝のしるしとしてチュートリアルを全うしてくれた。

そして、時間ぴったりに、ノムさんは消えた。
本当に、煙のように、ふわりと。
俺は一人、押し入れの前に座りながら、夢のような現実をかみしめる。
この世界は夢幻の国ではない。
だけど、俺の部屋には、異世界への扉がある。
俺だけが引ける――ガチャという扉が。
「……よし、次は誰を召喚するか、考えないとな」
不思議な扉の先に、どんな物語が待っているのか。
俺はまだ、ほんの入り口に立ったばかりだった。
◎システムメンテナンス　２０１８年１１月
リアを楽しんでから、俺は余裕分の金を全額ガチャにつぎ込んだ。
リアみたいな娘と楽しめるならいくらかかっても構わない。
そして、１１月６日、有給を取って俺は朝から気合いを入れていた。
目的はたった一つ。
そう、新イベントの幕開けだ。
それだけ聞けば、ただのゲームオタクのように思えるかもしれないが、違う。
俺は本当に『異世界と繋がっている』としか思えないガチャマシンを持っている。
そのガチャの中で、今日、メンテナンスが行われる。
――１３時から１７時まで。
このメンテ明けのタイミングで案内文が変わるのではないか、と俺は読んでいた。だから、有給を使ってまでこの瞬間に立ち会おうとしているのだ。
朝はゆっくり起きて、駅から少し離れたファミレスへと足を運んだ。入店時間は１０時。モーニングメニューのギリギリで、ドリンクバー付きで４００円。なんて良心的なんだ。
ランチタイムより２時間早く動けば、ガチャ２回分の出費が浮く。それなら……早起きする価値はある。
食後、早めにアパートに戻り、俺はガチャの前に陣取る。左に初級ＨＰポーション、右に女ケットシーのカプセル。
この子は拳闘士でＨＰ１２６。ショートカットの猫耳娘だ。可愛い。
でも、召喚時間は１時間５８分。カプセルを開けるタイミングを間違えると、メンテ明けのチャンスを逃してしまう。だから、時間管理は厳密にしなければならない。
スマホの時計を睨みながら、ついに１３：００。
その瞬間、ガチャマシンの案内紙がするりと差し変わった。
「定期メンテナンス中。１３：００から１７：００」
よし、読み通り！
デイリーガチャのレバーは動かない。カウントが０だからか？　それとも完全にロックがかかっているのか……。
投入口には蓋がされ、イベントガチャも常設ガチャも、案内紙はメンテナンス表示に切り替わっていた。
もちろん、このマシンは電気で動いている様子はない。コンセントもなければ、ランプもない。
それでもレバーを回せば動き、アイテムが出てくる。
ガチャマシンはそういうものだけど、普通のマシンは自動で案内紙が切り替わったりしない。
そういう『常識外』が通用するのが、このガチャだ。
時間が止まったような部屋で、俺はため息をついた。
「……暇だな」
そう思って猫娘のカプセルに手を伸ばすが……
「メンテナンス中」の透かし文字がカプセルの表面に浮かんでいる！？
さらに、開けようとしてもビクともしない。
くっ、メンテ中は召喚もできないのか。
仕方ないので、冷蔵庫から事前に実体化させておいた缶コーヒーを取り出す。こいつは普通に飲めた。つまり、実体化済みのアイテムは使用可能。逆にカプセルに封じられたままでは、何もできないらしい。
――つまり、メンテ中に遊びたいなら、事前にカプセルを開けておけってことか。
学んだ。次回は必ず準備しておこう。

暇を持て余しながらも、17時まであと数分というところでアラームが鳴る。
そして、時報がピッタリ鳴った瞬間、案内紙がスッと切り替わり、ロックが外れた。
「よし、きた……！」
すぐにイベントガチャをチェックすると、案内は新しくなっていた。
『紅葉の森イベント　第二弾　開催中』の文字が躍る。
内容はエルフ、ハーフエルフ、兎人、魔法士、剣士の召喚キャラ。
装備も自然をテーマにしたものばかりで、前回の『世界樹』装備と通じるものがある。
エルフ……俺の性癖に直球で刺さるやつじゃないか。
「これは……引くしかねえ……！」
そう決意していたその夜、俺は猫娘との二回戦を楽しんだ。
召喚時間の残りギリギリまで甘いひとときを過ごし、部屋にはしばし余韻が残る。
腹が減ったけど外出は面倒くさい。
買い置きのカップ麺で済ませて、スマホ片手に家計を見直す。
――月末までに、あといくらガチャに使えるか？
浮いた飲み会代、キャンセルされた合コン代、そして通勤のバス代まで節約。
その小銭をかき集めて、俺は再びガチャを回す。
結果、女弓士1、女ハーフエルフ1、男エルフ1。
……女エルフは出なかった。
だが、ここで諦める訳にはいかない。
エルフのために、俺は節約する！　バスの区間は歩いて通勤し、米を炊いて食費を削り、イベントガチャを引く！
――俺は、絶対に、エルフと甘いひとときを過ごしてみせる。
そして数日後、その努力が報われた。
女エルフの召喚メダルが、ついにガチャから飛び出してきたのだった――！
◎召喚キャラの性格　２０１８年１１月
「――これは、俺の望んだエルフじゃなかった……」
召喚の瞬間、期待に胸を膨らませていた俺の目の前に現れたのは、完璧な美貌を持つ銀髪の女エルフ。
スラリとした長身に透き通るような白い肌、そして冷たい輝きを放つ琥珀色の瞳。まさに理想のエルフ像だった。
……ただし、性格を除いては。
「フン、人間ごときが私を呼び出すとは愚かにも程があるわね」
この言葉で、俺の心はポキッと折れた。
召喚主を見下すような態度。プライドの塊のような発言。完全にエルフ至上主義者だ。
俺の理想は、クールビューティな外見でも、内心は優しくてちょっと甘えん坊……みたいな、ツンデレ系だったのに！
「……うるさいっ。『ご主人様大好き』以外の発言は禁止だ」
苛立ちのあまり、俺はそう命令してしまった。
命令を受けた瞬間、女エルフは一瞬口をもぐもぐさせたものの、何も言葉にできず、やがて素直に「ご主人様大好き」と呟いた。
……それ以降、タイムアップで帰るまでずっと、それしか言わなくなった。
命令には逆らえない。ノムさんの言っていたことはやはり本当だった。
けれど……
「……何やってんだ、俺」
時間が過ぎ、女エルフが光となって消えた後、部屋には虚しい静けさだけが残った。
確かに肉体的には楽しかった。だけど、心はちっとも満たされない。

相手の意思や気持ちを封じてまで得る快楽は、ただの自己満足でしかない。

――これは、違う。

あのエルフのビジュアルは最高だったけど、性格が合わなければ意味がない。

俺が求めているのは、一緒に笑い合える相手。気持ちが通じ合う相手だ。

「もう、エルフは呼ばない……」

いや、もしかしたらエルフでも性格が違う個体がいるかもしれない。

でも、今すぐに確かめる気にはなれなかった。

それよりも、もっと根本的なことを知りたい。――召喚キャラの性格に、傾向はあるのか？

俺はスマホにメモ帳を開き、聞きたいことを整理した。

そして、再び男ノームを召喚する。

「ほい、何の用じゃ？」

「申し訳ないけど、チュートリアルをお願いしたい」

「ほい、チュートリアルじゃな。よいぞ」

「名前は何て呼べば……」

「好きに呼んでくれ」

「じゃあ、ノムさんで」

――うん、今回もノムさんってことで。

まずは核心から。

「ノムさん。召喚キャラの性格って、種属や職業によって傾向ってあるんですか？」

「おう、あるぞ。そりゃあ個人差もあるが、住んでる場所や育った環境、周囲の連中の影響で似た傾向にはなるわな」

やっぱり、現実と同じってことか。

「ちなみに種属によって、どんな傾向があります？」

「ふむ……妖精系と人間種は他の種を見下す傾向にあるのう。獣人種は基本的に友好的。死者種は他人に無関心、モンスター種は人間種を嫌っておる。そんな感じじゃな」

「つまり、俺に向いてるのは人間種と獣人種、ってことか」

「まあ、そうじゃな。あ、そうそう。職業の話もしておくかの。いろいろあるように見えるが、実は戦闘系６種と賢者系７種、全部で１３種しかないぞ」

「え、そんなに少ないの？」

「うむ。剣士、弓士、槍士、槌士、ナイフ使い、ナックル使いが戦闘系６種。賢者系は聖魔法士、闇魔法士、時空魔法士、火、水、土、風魔法士の７種じゃ」

「なるほど……でも、今まで呼んだキャラはいろんな職業があったような……」

「そりゃあ、本人が勝手に名乗っとるだけじゃ。侍も武士もグラディエーターも、システム的には『剣士』じゃ」

――つまり、職業の呼称は自由ってことか。

「あと、種属も見た目だけで判断してはいかんぞ」

「え？」

「例えば、ノーム、ドワーフ、コロポックル、レプラコーン……ぜんぶ土妖精で、基本性能は同じ。違うのはレンダリング――つまり外見の演出だけじゃ」

「レンダリングって――それって……召喚キャラは実在しない、データだけの存在ってことですか？」

「違うわ、こら。ワシらはちゃんと実在しておるぞ。ただ、元の世界とこっちの世界じゃ見た目が違うだけじゃ」

ノムさんは自慢げに胸を張り、さらに例えを加えた。

「わかりやすく言えば、そうじゃな……日本の中華料理と本場中国が違うようなもんじゃ」

「なるほど、現地仕様ってことですね」

さらに、ノムさんは『獣人・人獣』についての興味深い話をしてくれた。

「いわゆる人獣、獣人には４つの形態がある。獣、二足歩行の獣、ケモ耳付きの人型、そして完全に人間型じゃな。獣人はそのうち、獣、二足歩行の獣、ケモ耳付きの人型になれるのじゃ」

「人獣ってのは？」

「そっちはすべての形態が可能じゃ。だが、知性の高さでは人獣が上。パワーでは獣人のほうが強い。似たようなのに獣と二足歩行の獣にしかなれないビーストもいる。じゃが、ビースト種は知能が低くて召喚対象にならん」

うん、全身毛むくじゃらの獣と何かするつもりはないから、ビースト種が対象外でも残念には思わない。

「ワシらは妖精種だから変身できん。変身シーンを見たいなら……別の機会に猫人か犬人でも召喚するのじゃな」

「今度お願いしてみます」

召喚キャラの性格や特性。それらを学んだことで、俺のガチャ戦略は大きく進化した。

エルフはもう呼ばない。

これからは、人間種と獣人種をメインにして、快適で楽しい夢幻の国ライフを送っていこう。

――そして、いつかは『最高の相棒』を見つけ出すのだ。

そのときこそ、本当の意味での『異世界生活』が始まる――そう、信じている。

◎不要メダルの使い道　２０１９年１月

俺の住んでるアパートは、狭いし、古いし、なんか色々と雑だ。

だからこそ、なるべく物を置かないようにはしていた。していたはずなのに――

「なんでこんなにカプセルが増えてんの……？」

ガチャマシンから日々生み出されるアイテムたち。

特にあの透明のカプセルが、押し入れの隅からどんどん侵食してきている。

見ないふりしてたけど、さすがに限界だ。

「年末に大掃除、してなかったよなあ……」

今さらながらに、年末サボったツケがずっしり肩にのしかかってきた。

整理整頓、しなきゃ。でも、めんどい。ものすごくめんどい。

「……ベッド、動かさなきゃダメだよな。ひとりじゃ無理……」

その瞬間、脳内に電流走る。

「いるじゃん、手伝い要員」

――そう、召喚キャラたちだ。

ここ最近、男キャラは全然呼んでなかった。ノムさん以降、ずっと女の子ばっかり召喚していた。

だから、使い道がなくて余ってる男たち、いる。たくさん。

これから使う予定も特にない。だったら――

「働いてもらおうか！」

というわけで、俺はガサゴソと未使用メダルの箱を漁って、３枚を選び出した。

選ばれたのは――水魔法士、土魔法士、槌士。

そう、大掃除にはこの三職がベストだと判断したのだ。……たぶん。

水は掃除の基本。窓拭き、風呂、流し、全部こなせる。

土魔法士は、アパートが古い土壁だから補修に向いてそう。

そして槌士。大工は金鎚を使うよな。槌士だったら、大工工事ぐらいできるよな。

召喚してみたら、槌士の人はなんと治水工事の職人だった。

護岸工事やら水道管やらの整備が本業とのこと。ちょっと方向性ズレてる……かと思いきや、

「棚ぐらいなら作れますよ」

という神発言が飛び出した。

さらに土魔法士が「材料、用意できますよ」と名乗りを上げた。

「……最高かよ」

ただ、３人そろって言われたのがひとつ。

「２時間じゃ終わりませんよ」

……ですよねー。
というわけで、俺は手持ちの「二時間延長石」を3人にそれぞれ2個使用し、作業時間を6時間に延長。
そして――

「じゃ、あとはよろしく。俺、ちょっとブランチ行ってくるから」

召喚主、まさかの外出。

日曜午前中のファミレスは案の定混んでいた。
家族連れが列を作っていたが、カウンター席だけは空いていたので待たずに座れた。

「……すまん、お父さん……先に行くぜ」

カウンターに座って、ギリギリ間に合ったモーニングセットを注文。
10時20分。モーニングのラストオーダーは10時30分。勝利の一杯。

このファミレス、WiFiも電源も完備で神。
今日は古いスマホと充電器も持ってきていた。
俺はここでのんびり朝食を取り、充電を済ませ、ニュースを読みながら時間を潰す。

――と、言いたいところだったが、昼近くになって客の密度が増し、ファミレス特有の空気がピリついてきた。

「そろそろ……退こうか」

混雑の中で粘るほどの図太さはない。
とはいえ帰っても部屋は片づいてないだろうし、することもない。

「……図書館、行くか」

徒歩15分の図書館で技術書をパラ読み。
気がつけば時間はもう12時30分。

そして、アパートに戻った俺を待っていたのは――

「……え、どこ？」

玄関を開けた瞬間、一瞬、自宅のドアを間違えたかと思った。
部屋が、輝いていた。
壁は明るい珪藻土仕上げの塗り壁に。
古びたアルミサッシは、ぬくもりのある木製フレームに置き換えられている。
窓ガラスは見事に透明。曇りガラスなのに外の景色が鮮やかに映る。
水回りはピカピカ。
トイレ、風呂、キッチン、どれも新品のよう。水垢ひとつなし。
押し入れの収納構造も刷新されていた。
上段・天袋に分かれた棚は、完璧なレイアウトで仕切られている。
空きスペースもたっぷり。物の出し入れがスムーズにできるようになっていた。

「……なんだこのハイクオリティ」

さすがにベッドやカーテンは変わってなかったが、掃除は完璧。
話を聞くと、水道管や下水管の老朽化パーツまで取り替えてくれたらしい。

「召喚キャラ……おそるべし……」

俺は土魔法士の手を取って、心からの感謝を伝えた。
すると彼は申し訳なさそうにこう言った。

「布関係のスキルを持っていないので、カーテンは掃除が不十分です……すみません」

いやいや、全然問題ない。むしろ、期待の100倍は上を行ってる。
怒るどころか、もはや崇めたい気分だった。

……とはいえ、このリフォーム後の状態。
大家さんにどう説明しようか、少し頭を抱えるのだった。

今まで男キャラは、正直なところ使い道がなかった。
召喚しても会話が地味だったり、硬派すぎて距離感があったり。
ああいうのは戦闘とか建築系には向いてるけど、普段の癒やしにはちょっと不向きなんだよな。

でも、似たようなポジションで使い道がない存在が、もう一群いた。
――そう、鼠人《そじん》、ゾンビ、スライム。

「……女キャラとはいえ、ゾンビを抱くのって、抵抗あるよな……」

召喚メダルに描かれているイラストを見る限り、ゾンビはぱっと見は美少女だ。

スライムはというと、ダイナマイトボディの艶やかな美女風。

俺はノーフォアボールだから、絵の通りならギリ許容範囲……かもしれない。

「よし、試してみよう」

俺は、大掃除で気分も部屋もすっきりした数日後、順番に3種属の召喚を行ってみた。

まずは――鼠人（女）。

見た目は人型だけど、顔立ちはややネズミ男寄り。

鼻が尖っていて、口元も小動物っぽい。

それに――

「……ちょっと、ドブくさい」

鼻の横からぴょこっと飛び出してるネズミヒゲも、リアルすぎて逆に興ざめ。

ぎりぎり『許容』ってラインだった。

悪くはないけど、積極的に呼びたい感じでもない。

次、ゾンビ（女）。

「……うん、美少女だな」

動作はゆっくりで、おっとり系。目つきはどこかぼんやりしていて、焦点が合っていない。

表情も儚げで、まるで幽霊系ヒロインって感じだ。

ただ――

「……においが、キツいな……」

何日も風呂に入っていないような、酸っぱくすえた匂いが漂ってくる。

なんというか、『現実的な死臭』というか。香水では絶対ごまかせない系のやつ。

しかも性格は暗め。召喚した個体が闇魔法士だったからかもしれないけど、

「私なんか……」「どうせ無理……」とネガティブ発言のオンパレード。

そのくせ、いきなり言った唯一の冗談が――

「私、BLが好きなの……ゾンビだけに、腐女子なの」

……俺は反応に困った。

いや、面白い……のか？

笑っていいのか？　むしろ、どこまでボケなのか判別できない。

でも正直、メンヘラ美少女ってジャンルは嫌いじゃない。

次にまた呼んじゃうかもな、なんて思ったのは内緒だ。

そして――最後に、女スライム。

「……うおっ！？」

召喚したその瞬間、俺は直感的に「危険だ」と感じた。

全身がローションのようなヌメヌメボディ。

見た目は妖艶な美女で、柔らかくて弾力があって、でも身体の形が一定じゃない。

触れた瞬間――

「……あ、やば……っ……ッ！」

ぬめぬめの体が全身を包み込み、くねくねとうねるように動く。

それだけで全ての性感帯を同時に撫でまわされているような錯覚。

ほんの数十秒で、俺は頂点に達してしまった。

そして――

「……ん、あれ？」

意識が、一瞬飛んだ。

ヤバい。スライムは、マジでヤバい。
あんなの、何度も召喚してたら絶対にダメになる。
廃人まっしぐら。
あれは依存性が高すぎる。リスキーすぎる。
「……スライム、完全封印だな。二度と呼ばない。決して呼ばない。ぜったいに」
心の中で『召喚禁止リスト』の最上位に、スライムの名が刻まれたのだった。
◎目指せ魔法使い　２０１９年２月
――これは、バレンタインデーという名の戦場で完膚なきまでに敗北した男の、ささやかな反撃の物語である。
その日、俺は何も期待していなかった……と言えば嘘になる。
現場には女性も少ないながら存在する。せめて、義理でもいいから、チョコの１つや２つ――そう思っていた。
結果？　ゼロ。完全敗北。
俺の心は黒く沈んでいた。まるで高級ポーションをこぼしたときのように。
「……あーあ。現実は甘くない」
やけ酒ならぬやけガチャ。俺は黙って３０００円をガチャに投入する。
狙うは、夢幻の国からのバレンタイン特別召喚。
キン、と音を立ててカプセルが転がり出る。
――女天使、女吸血鬼、男蝙蝠。
――装備品、十字架のネックレスと魔導書。
――アイテム、義理チョコ３、チョコドリンク１。
――そして、少々のＹＥＭ。
「ふふ……リアルで駄目でも、俺にはガチャがあるさ……！」
チョコドリンクの説明は『魅力＋５０％（２時間）』。義理チョコは『魅力＋１（永年）』らしい。
つまり、食えばイケメンに近づける……ということか？
「よし。今日から俺は『魅力ある男』だ！」
自信を取り戻した俺は、義理チョコを食べて、天使のカプセルを開け、銀色のメダルをトスする。
ふわりと羽ばたくように光が舞い、そこに現れたのは――
「こんばんは、主よ。ご用は何でございましょう？」
――純白の翼をたたえた、まさに『天使』と呼ぶにふさわしい女性だった。
「名前、決めてもいいか？」
「はい。好きなようにお呼びください」
「じゃあ……萌《もえ》って呼ばせてもらうよ」
「はい。萌、参りました」
その夜、俺は天使の萌と、穏やかで甘美な時間を過ごした。
――ただ、背中の羽が少し邪魔だった。
翌朝。目が覚めた俺は、昨夜得た義理チョコの効果に期待を抱き、会社へと向かう。
「イケメン補正、来てるだろ俺！」と内心ウキウキだった。
結果。
「何か良いことでもあった？」と一人に聞かれただけだった。
「……やっぱり＋１じゃ効果ないか」
いや、信じる心が大事だ。俺は義理チョコを信じる。無駄なはずがない。
それより――魔導書と杖だ。
出てきた魔導書には「愛衷の魔導書」と刻まれていた。
革装丁のそれは重厚で、開くと分厚い羊皮紙のページが６枚。だが、全て真っ白だった。
「おお、これは……何も起きない……！」
魔導書を握りしめても頭の中に呪文が浮かんでくることもないし、体が光るわけでもなかった。

「なら、杖だ！」
引っ張り出したのは前に入手したアクアマリンの初級杖。全長５０センチほどで、手元には小さな水色の宝石――おそらくアクアマリン――が埋め込まれている。
狭い風呂場で、俺は気合を込めて叫んだ。
「ウォーター！　……ウォーターカッター！」
しかし、ただの虚空に響くだけだった。
「……やっぱり、そう簡単にはいかないよな」
魔導書も杖も、魔法効果を『強化』するだけで、『使えるようになる』わけじゃない。
つまり、魔法を覚えるための『何か』が別に必要なんだろう。
――それでも、俺はあきらめない。
「だって、ここは『夢幻の国』なんだからな」
俺のアパートに現れたガチャマシン。それが非現実の幕を開けた合図だった。
その日から俺は、夢の中の冒険者――いや、召喚主としての人生を歩み始めたのだ。
そしていつか、魔法を使いこなせる本物の『魔法使い』になってやる。
「目指せ、魔法使い――！」
叫んだ声が壁にこだまする。……防音リフォームのおかげで、ご近所トラブルは回避できそうだ。
そしてその夜。俺は再び魔導書を開いた。
何も書かれていないその白紙に、いつか俺の魔法が刻まれる日が来ることを夢見て――。
◎バースディプレゼント　２０１９年２月
２月２６日――今日は親友・半田の誕生日だ。
学生時代からの腐れ縁。だけど、俺がガチャにハマってからというもの、合コンにも顔を出さなくなったので、気づけば半年以上会っていなかった。
「たまには、会うか」
そんな気まぐれから、俺は岡崎と野田に連絡して、久々の誕生日会を企画した。
野田は「仕事が忙しい」ときっぱり断り、岡崎も「最初の一時間だけなら」と渋い返事。――社会人になって数年たてば学生時代の友達なんてこんなものか。
予約したのは、半田の住むマンション最寄りの駅前にある居酒屋。１９時３０分に集合した俺たちは、ビールを片手に久々の馬鹿話に花を咲かせた。
岡崎は1時間きっちりで帰っていった。
「おい半田、彼女できたか？」
「できるかよ、今はココア一筋だ」
半田が目を細めて口にしたその『ココア』とは――そう、彼の家で飼っているマンチカンの雌猫のことだ。
実は、数日前。２月２２日の『ニャンニャンニャンの日』に開催された猫限定のガチャイベントで、俺はその『ココア』そっくりの猫人メダルを引き当てていたのだ。
――これは、運命か？
そう思ったときには、半田への『プレゼント計画』はすでに頭の中で完成していた。
「なあ、ココア見せてくれよ」
「おう、うち来るか？　前に借りたゲームも返したいし」
ほろ酔いの会話のまま、俺と半田は彼のマンションへと向かった。
部屋に入ると、リビングの隅にはゲージが置かれ、その中で気品高く座る茶トラの猫がいた。

「お前がココアか……守谷だ、よろしくな」
ゲージ越しに指を差し出すと、ココアは警戒することなく舐めてきた。――うん、可愛い。だが、それよりも今日の『本命』はこれからだ。
一通りココア自慢を聞き終わった俺は、カバンの中から例の猫人メダルを取り出す。
廊下に出て、玄関の前で小さく深呼吸する。
――いける、絶対に喜ぶ。
メダルをトスすると、もやの中から現れたのは、茶色い髪に猫耳を生やした小麦色の肌のギャル系美女。
「ご主人様、何？」
「ちょっと待ってな」
カバンからもう一つ、イベントで出た『制服風衣装（茶）』のカプセルを取り出し、実体化させる。
「これを着てくれ」
「オッケー」
一瞬でコギャル制服姿に早変わりした猫耳少女を見て、俺は満足げに頷いた。
「君の名前は『ココア』。今日は、俺の親友・半田を癒やしてやってくれ。クライマックスは『だいしゅきホールド』で頼む」
「ラジャー、任せといて！」
「プレイ終了後はその制服、半田にあげてな」
「了解〜っ」
すべての準備は整った。俺は半田のドアをノックした。
「おーい、半田。プレゼント渡すの忘れてた。開けてくれ」
ドアが開くと同時に、制服姿の猫耳ギャルを勢いよく押し込む。
「は？　誰だよコレ……」
「童貞のまま30になると魔法使いになれるって話、知ってるか？　俺、なったんだよ。これは俺の魔法の成果。『ココア』を人間に変えてみた。――誕生日プレゼント、受け取れよ」
「はああ！？　まだお前、30なってねぇし！　ていうか、童貞でもないだろっ！」
「ハッピーバースデー、半田。召喚時間は2時間、延長なし。急げよ？」
そう言い残して、俺は玄関のドアを閉めた。
――数時間後。
起きた俺のスマホには、通知の嵐。
メッセージの大半は半田からだった。
『お前マジで何者だよ！』『夢かと思った』『最高すぎて涙出た』
その中でも特に笑ったのは、あの貸してたゲームの主人公のセリフをもじった一文。
『お前ら最高だぜ。やっぱ俺、お前らのこと好きだ』
――喜んでくれて何よりだ。
大事なケモミミマニアの親友への、最高のバースデープレゼント。
これが俺なりの『ガチャの使い方』だ。
◎ハーフエルフ降臨　2019年3月
あれ以来、俺は一度もエルフを呼んでいない。
……いや、外見はどストライクだった。銀髪、琥珀の瞳、冷たい美貌。理想のビジュアルだったのは間違いない。
けれど――性格が致命的だった。
プライドの塊。人間を見下し、命令しなければ言葉すら交わせない高飛車エルフ。
「ご主人様大好き」縛りの強制命令でどうにか成立させたとはいえ、あれはどこか虚しかった。
けど、思うんだ。

ビジュアルがあれだけ好みなんだ。中には性格がマイルドな子もいるかもしれない……って。
そんな淡い希望を胸に、俺は召喚メダルの整理を始めた。

――そこで見つけたんだ。
ハーフエルフの召喚メダル、5枚。

もちろん、女性メダルのみのカウント。男なんて数に入らん。
そういえば、以前「紅葉の森イベント」でエルフ狙いでガチャ回してた時に、『残念賞』として何枚か手に入ったんだったっけ。
エルフを求めていた、そのときは刻印が似てて、「やった！エルフだ！」って飛び上がった直後に「ハーフエルフ」と書かれてて、ぺちゃんこに凹んだ。あれはトラウマ。

でもエルフのトラウマも、そろそろ克服する頃合いかもしれない。
俺は5枚の女ハーフエルフのメダルを確認した。弓使い、風魔法士、聖魔法士、時空魔法士×2。

……エルフ系って、基本的に魔法か弓しかないのか？
男ハーフエルフ（7枚）も確認したけど、やっぱり全部魔法か弓系だった。
とはいえ、今回はビジュアル重視。戦闘職なんてどうでもいい。
一枚きりのレアっ子より、念のため予備のある時空魔法士を選んで、トス。

――ポンッ

現れたのは、スラリとした長身の美女。濃い茶髪のストレートが肩にかかり、ややつり目。耳は尖ってはいないけど横に張り出していて、なるほどこれが『ハーフエルフ』ってわけか。

――うん、好み。
文句なしに、俺のど真ん中。

「こんにちは、ご主人様。何をすればよろしいですか？」

声も優しげで、柔らかい。

……やったか？

俺は彼女に一歩近づき、右手でそっと顎をクイッと上げてみた。

視線が交差する。戸惑いながらも、視線を外さない彼女。その瞳が、じんわり潤み始める。

……キタ。

「名前は？」
「え、あ……リサ、です。いえ、好きなように呼んでください」
「じゃあ、『璃紗《りさ》』って呼ぶよ」
「はい、ご主人様」

その返事を聞いた瞬間、俺はそっと唇を重ねた。
それからは、言葉もいらない。

「璃紗、キレイだよ」
「ありがとうございます、ご主人様」
「かわいいよ、璃紗」
「うれしいです……」

耳に心地よい、囁きのような返事が何度も返ってくる。

――最高だ。エルフとは違う。ハーフエルフ、いや、璃紗はまったく違う。

もしかしたら、全部『演技』かもしれない。それでも構わない。俺にとっては、今日だけの関係だからこそ、こうして心を満たしてくれることが何より大事なのだ。

その後、シャワーを浴び、まどろみの時間を過ごしていると――

「ねえ、璃紗って料理できる？」
「はい。得意とは言えませんが、家庭料理なら」
「じゃあ……夕飯、作ってくれない？」
「かしこまりました」

残り時間が少なかったので、二時間延長石を使用。

寒い3月、ワンピース姿じゃ外に出せない。俺のトレーナーとロングコートを璃紗に着せた。靴がないのは悩んだけど、押し入れの中で眠っていた緑のロングブーツを見た璃紗が目を輝かせて言った。

「これは……世界樹蔦のブーツ、でしょうか！？」
……よくわからんが、嬉しそうだからOKだ。
スニーカーと緑ブーツという謎の組み合わせで、二人して近所のスーパーへ。
「ご主様、これは安いのに栄養バランスも……」
真剣に食材を選ぶ璃紗は、まるで新婚の妻のようだった。周りから見たら、きっと俺たちは同棲カップルに見えていただろう。
夕飯は、野菜炒めと炒飯、インスタントの味噌汁に漬物。
豪華じゃない。特別うまいわけでもない。でも、楽しかった。
璃紗と食べる夕飯、それだけで心が満たされる。
その夜、もう一度延長して、二人で目いっぱい楽しんだ。
そして別れの時間が迫ったとき――俺は言った。
「気に入ったなら、そのブーツ持って帰っていいよ」
璃紗は少し微笑んで、首を横に振った。
「この世界の物は、あちらの世界には持ち帰れません……でも、そう言ってくださるだけで嬉しいです。ありがとうございました」
そう言って見せた、涙を浮かべた笑顔は――今でも脳裏に焼き付いている。
ひな祭りの日、
俺は人生で最高のハーフエルフと出会った。
璃紗――君は、本当に最高だ。
◎S級ポーションエリクサー　２０１９年３月
日々の暮らしに異世界の影が差し込むようになって、俺のバッグの中身も様変わりしていた。
――MPポーション。これは以前からマイボトルに常備していた。だが今はそれだけじゃない。
非常時用の切り札として、俺は、フルHPポーション――通称『最高級皇帝液』を実体化させて持ち歩いている。そしてもうひとつ、絶対に割れないようにと、カプセルのままで忍ばせているのが『復活ポーション』。見た目はアンプルタイプの脆いガラス容器で、下手に持ち歩けばすぐに割れそうな代物だ。
このアイテムについて、以前ノムさんが教えてくれた。
「HPポーションやMPポーションは回復薬じゃが、状態異常解除ポーションや復活ポーションは『時空魔法アイテム』じゃ。概念が異なるのじゃよ」
たとえば『キュアポーション』は体内の毒素や異常物質を空間魔法で吸い出す。復活ポーションは、死の1分前へと身体を『巻き戻す』時間魔法。
でも、それには大きな制限がある。1分を過ぎれば、何をしても戻せない――それがこのポーションの限界であり、命の重さの境界線だった。
俺はポケットに『犬人の拳闘士』のメダルを常備している。街中でトラブルに巻き込まれたときの護身用だ。スマホカバーの裏には2枚のメダル。
聖魔法士のメダルは健康系トラブル用で、それと――ハーフエルフ。
……外でしたくなったとき用だ。うん、まあ、そういう時もある。
璃紗と出会って以降、ハーフエルフは一度だけ召喚した。現れたのは明るく元気な弓士で、スタイルは抜群だったが……俺の好みのど真ん中ではなかった。
やっぱり、璃紗と比べてしまう。あの優しくも控えめな微笑み。あの穏やかな声色。璃紗以上の存在は、そう簡単に現れないのかもしれない。
そんなある日、有給休暇の残り1日を消化するため、俺は平日に休みを取った。ファミレスでのんびりモーニングでも……そう思って外へ出た。
だが、目に映るのは年配の人や子連れの母親ばかり。そうか、春休みなんだ。ファミレスはきっと混んでる。ならばと、俺はまだ知らぬ『穴場』を求め、商店街を外れて国道沿いの道を歩いていた。

古びた町並みにぽつぽつとある店。だが、どこも開店は11時からと書いてある。ちょっと早かったか……。

歩道の向こう側には、小学校低学年くらいの女の子が一人、信号待ちをしていた。俺も立ち止まって、信号が青になるのを待つ。

――青信号。少女が一歩踏み出した、その瞬間だった。

「……危ないっ！」

突如として、トラックが猛スピードで突っ込んでくる。減速してない！？　間に合わない――！

反射的に、俺の手が動いた。ズボンのポケットに忍ばせていたメダルを、まるで命を預けるかのように――放り投げた。

「行け、犬人！　あの子を守れ！」

煙の中から現れた黒い影が、少女へと走る。犬人は少女を庇うように覆い、その背をトラックに晒した。

――ドンッ。

衝撃と同時に、俺の頭に鋭い痛みが走り、犬人の姿が消える。

少女は吹き飛び、少女の身体は俺の足元へと転がってきた。……信じたくなかった。

首が、ありえない方向に曲がっている。目は虚空を見開いたままだ。

「……嘘、だろ……？」

背筋が凍った。救急車を呼ぼうとして、震える手でスマホを取り出し、ケースを開ける。

２枚のメダルがそこにあった。聖魔法士とハーフエルフ――

「お願いだ、助けてくれ……！」

俺は2枚のメダルを同時にトスする。

煙の中から現れたのは、小太りの青年と、そしてあの――璃紗。

「ご主人様……彼女を、助けたいのですね？」

「頼む……助けてくれ……！」

聖魔法士が女の子のそばにしゃがみ込み、一目見て璃紗と共に首を横に振った。

「主様、僕の聖魔法では無理です」

「ご主人様、他にアイテムはありませんか？」

「復活ポーションが……！」

カバンの中から取り出したカプセル。俺は震える手で開き、アンプルを取り出した。

周囲には人が集まり、スマホを構えて動画を撮り始める者までいる。

「救急車を呼んでください！　警察にも通報を！　トラックのナンバーを映してください！」

璃紗の凛とした声が人々の注意を惹き、彼らのスマホのレンズが少女からトラックへと向き直る。

「ご主人様、時間がありません！　アンプルを地面にこすりつけてください！」

ガシッ。

アンプルの先をアスファルトに押しつける。パキン、という音とともに、先端が割れる。口元に垂らした液体が少女に染み込んだ――その瞬間。

世界が歪んだ。

ビクン。

少女の身体が跳ね、次の瞬間――ありえない方向に曲がっていた首が、正常に戻っていた。

見開かれていた目が、ゆっくりと閉じていく。

そして……少女の胸が、ふわり、と動いた。

「……息、してる……」

肩から力が抜ける。俺はその場に膝をつきそうになる。

「主様、ここから離れてください。事情を説明できないでしょう？　あとは、私が処理します」

聖魔法士がそっと告げる。璃紗もまた、俺の腕を取りながら頷いた。

「承りました。ご主人様、こちらへ」

俺は、璃紗に導かれるまま、その場を離れた。

「ＡＥＤはありませんか！」璃紗が叫ぶ。

細い路地に入り込んだところで、聖魔法士の声が響く。

「目を覚ましました！　ＡＥＤは大丈夫です！」

どうやって帰ったのか覚えていない。ただ、気が付けばアパートの部屋にいた。
左手も、服も――血だらけだった。
璃紗がそれに気付き、俺を風呂へと連れていく。服を脱がせ、優しくシャワーをかける。俺は放心状態で、なすがままだった。
けれど、熱い湯に包まれても、震えは止まらない。
身体ではなく、心が――震えていた。
そのとき。
「大丈夫です、ご主人様……私は、ここにいます」
璃紗が、俺を強く抱きしめてくれた。
あたたかい。
あたたかさが、心にまで染み渡っていく。
今日、俺は――人の命を、救ったのかもしれない。
そして、璃紗は俺のそばで、静かに寄り添ってくれていた。
異世界と現実。その交差点で、俺は確かに今――『生きている』という実感を、強く抱いていた。
◎永年延長石　２０１９年４月
――週末の夜。明日の予定はなし。
となれば、当然やることはひとつしかない。
俺はベッドの上に並べた召喚メダルを前に、静かに手を伸ばした。
「今夜の相手は……お前に決めた、人狼！」
ひらりと宙を舞ったメダルが、淡く光りながら俺のアパートに一陣の靄を呼ぶ。
煙の中から現れたのは――ちょっと中性的な、ふわりとした空気をまとう子だった。
銀灰色の耳と、柔らかそうな尻尾が特徴的な人狼属（ウェアウルフ）。
服装は白シャツにニットベスト、ショートパンツにハイソックスと、まるで学園アニメから抜け出してきたかのような姿。
「僕は何をすればいいですか、主様」
……初の『僕っ子』来たわ、これ。
思わず頬が緩みそうになるのを抑えて、俺はいつもの台詞を口にした。
「今晩、俺を楽しませてくれ。そして、お前も俺で楽しんでくれ」
すると人狼は少し顔を赤らめて、戸惑いがちに聞き返してきた。
「あ、あの、それって……僕と、えっちするってことですか？」
「もちろん」
この即答がまずかったのかもしれない。
「え、えっと……僕、男なんですけど……」
「えっ」
固まる俺に差し出された召喚データカード。
そこには確かに――「人狼属、性別：男性」と記されていた。
「まじか……！」
でも、それ以上に衝撃だったのは、彼――馨《かおる》の反応だった。
「ごめんなさい、僕なんかで……気持ち悪いですよね……」
「いやいやいや、謝るなって！」
なんという自己肯定感の低さ。だが、それがまた彼の可愛らしさに拍車をかけていて……。
――もう、なんだっていいか。カワイイは正義だ。
「馨、お前が嫌じゃないなら、俺と一緒に夜を過ごしてくれ。無理なら、ちゃんと断ってくれ」
俺の言葉に、馨の目に大粒の涙が浮かぶ。
「はい……僕、主様みたいな人、好きなんです……僕でよければ、お願いします……」

涙声でそう言って、俺の胸に飛び込んできた馨。
まるで子犬のように、ぎゅっと俺を抱きしめてきた。
――この夜が、永遠に続けばいいのに。
そんな感情が、ふと胸をよぎった。
馨は、終始小さな声で「ウォンウォン」と可愛く鳴いていた。
そしてその夜だけでなく、俺は思わず一日延長石を使ってしまった。
翌朝。
俺の胸元で寝息を立てる馨の姿に、俺は静かに微笑む。
朝チュンとはこういう情景のことを言うんだろう。
まあ、鳥の鳴き声は「カーカー」だし、腕の中にいるのは『男の子』だけど。
……それでも、馨は『最高にカワイイ』。
その後も馨は素直で、控えめで、優しくて――
だが、少しずつわかってきた。
馨は、自分自身に対する自信がなさすぎる。
些細なことにも「ごめんなさい」と謝り、必要以上に遠慮する。
外に出るのを怖がり、人の目を極度に気にする。
――自己肯定感が低い。
それでも、俺はこう言った。
「馨。お前は可愛いし、優しいし、俺にとっては最高の相手だよ。だから自信持てって」
そう告げると、馨は目を潤ませながらも、微笑んでこう言ってきた。
「主様、好きです……」
ああ、馨。本当にお前ってヤツは――。
……だが。
その次の言葉で、俺は完全に固まることになる。
「主様……永年延長石、持っていませんか？　僕に使ってください。僕、ずっと主様と一緒にいたいです……！」
は？
何言ってるんだ、お前。
永年延長石を使ってしまえば、二度と消えないんだぞ……？
けど――そのカワイイ顔で、潤んだ瞳で、涙を滲ませながらお願いされたら、断れる男なんていない。
結局、俺は言葉を発する代わりに、馨の頭をそっと胸に押し当てていた。
――馨との永年生活が、ここに始まった。
◎女性専用衣装　２０１９年４月
馨が俺の部屋に住み始めて３日が過ぎた。
永年延長石での召喚――つまり永住決定。正直、勢いだった。でも、後悔はしていない。
だって、馨は本当にカワイイから。
召喚キャラは食事をしない。食べることは可能だけど生きる上で食事は不要。
だから食費はかからないし、トイレもほとんど使わない。生活音が静かすぎて時々存在を忘れそうになるくらいだ。
とはいえ、生活していれば服は汚れるし、体も汗をかく。そこは人間と変わらない。
初日に履いていたブリーフが汚れてしまってから、馨には俺のトランクスを貸していた。
でも……あの可愛い顔にダボダボのトランクスって、あまりにもミスマッチじゃないか？
「……やっぱ、馨には可愛い下着を着てもらいたいよな」
女性用の下着なんか似合いそうだ。
とはいえ、男が一人でレディースの下着を買うのはハードルが高い。
じゃあ、女装させた馨に買いに行ってもらえばいいんじゃないか？
ということで俺は押し入れから『制服風衣装女（灰）』のカプセルを取り出した。
ニャンニャンニャンイベントで手に入れたアレの色違いだ。

カプセルを開けると、淡い灰色のチェック柄で揃えられたアイドル風の制服が靄の中からふわりと出現した。
「馨、ちょっと着てみてくれないか？」
「えっ……これ、女性用ですよね？」
顔を真っ赤にしてうつむく馨。だが、拒絶ではなさそうだ。
ためらいがちに服を受け取り、胸に当ててみせた。
……反応、なし。
「着替えできない、ですね。やっぱり女性専用アイテムだから……」
「普通に着てみたらどう？」
「え、普通に……？」
そう言いながら馨は恥ずかしそうにセーターを脱ぎ、シャツのボタンを外し始めた。
華奢な上半身があらわになり、俺は思わず息を飲んだ。
まるで発育途上の少女のような、その細く白い身体。
馨は目をそらしながら、制服に袖を通していく。
ブラウス、スカート、ジャケット。すべてを着終えたその姿は――
まさに、アイドル級の美少女だった。
「……めちゃくちゃ似合ってるよ、馨」
「は、はい……ありがとうございます」
俺は思わずスマホを取り出し、何枚も写真を撮った。
馨は恥ずかしがりながらも、それを嫌がることはなかった。
「……主様、こんな可愛い服を着させてくれてありがとうございます。僕……すごく嬉しいです。大好きです！」
嬉しそうに頬を染め、俺にぎゅっと抱きついてくる馨。
この愛しさをどう表現すればいいのか。言葉が見つからない。
だが、ひとつだけ確かなことがある。
――この子に、この世界で少しでも笑ってもらいたい。
その一心で俺は訊ねた。
「ねぇ馨、なんで最初は着られなかったんだ？」
「それは……この世界だから、です」
馨は一歩下がり、表情を引き締める。
「夢幻の国では、ガチャアイテムはその世界の特性に従います。でも、この世界に実体化されたアイテムは『こちらのルール』にも従う。つまり、夢幻の国では男が女性専用衣装を着ることはできませんが、こちらの世界では普通の服として扱える……だから、胸に当てただけでは着ることができずに、袖を通すことで普通に着ることができたんです」
「なるほど、世界の『仕様』の違いってことか……サンキュー、馨」
「いえ、どういたしまして」
元の照れた表情に戻った馨が、制服姿のまま微笑んだ。
……ああ、もう、やっぱり可愛すぎる！
「さて、そろそろ下着を買いに行こうか」
「は、はい！」
と答えた馨だったが――
その前に、もう一つ事件が起きた。
俺が優しく触ったら、貸したトランクスを……また汚してしまったのだ。
「……馨の下着、たくさん買っておいたほうがよさそうだな」
馨は顔を真っ赤にして俯く。
俺は思わず笑いながら、再びカメラのシャッターを切った。
「カワイイは、正義だ――」
俺は、今日もそう実感していた。
◎璃紗永年召喚と小遣い　２０１９年5月
――黄金週間。それは夢のような2週間……だった、はずなのに。
「キツかった……ほんと、地獄の2週間だった……」
俺はアパートの床に倒れ込むように横になり、溜息をついた。

ガチャに資金を注ぎ込むために、4月から節制し、連休に備えてきた。なのに、連日の日替わりイベント攻勢！　それも召喚系と装備系が交互に来るもんだから、財布がどんどん軽くなっていく。まるでガチャに魂ごと吸い取られるようだった。

特に、ハーフエルフ召喚確率１０％の日――あの日だけは、絶対に譲れなかった。

狙うは、もちろん「璃紗」だ。

そして、ようやくイベントも仕事も落ち着いた5月１８日。俺はついに決断した。

「今日こそ……璃紗を永年召喚する……！」

押し入れの中、バレンタインイベントで手に入れた『魅力＋５０％』のチョコレートドリンクを手に取り、傍らに永年延長石をセット。部屋の空気がピンと張りつめる。

そして、トスされた召喚メダル。

「来い……璃紗！」

ポンッ。

立ち上る靄の中から、すらりとしたシルエットが現れた。あの透き通るような笑顔、美しい黒髪、気品ある佇まい――間違いない。俺が求め続けた、あの「璃紗」だ。

「お帰り、璃紗」

「……ただいま、ご主人様」

優しく微笑む璃紗の瞳に、俺は2時間目一杯の愛情を注いだ。全力で――全力で、俺の想いを伝えた。そして、最後の最後に――。

「璃紗……俺と、ずっと一緒にいてくれないか？　俺を支えてくれないか？」

「……はい」

璃紗は微笑んで、静かに頷いてくれた。

――こうして、璃紗は俺の現実世界での『永年パートナー』になった。

押し入れの下段には馨がいる。だから、璃紗にはベッドを使ってもらい、俺は床に寝る。ときどき、一緒のベッドで眠るのも……まあ、悪くない。

しかも、璃紗は基本的に食費がかからない。服や生活費も、まあ少しくらいなら何とかなる。璃紗がずっと隣にいてくれる――それだけで、俺の心は満たされていた。

……と思っていた、2週間後のある日。

「ご主人様、お願いがございます」

「ん？　なにか困ったことでも？」

「いえ、私と馨の二人に、小遣いを頂けないでしょうか」

「えっ……こ、小遣い？」

俺が召喚キャラと楽しんでいるとき、璃紗と馨には外に出てもらっている。今までは商店街のベンチで時間を潰していたらしいのだが――。

「最近、通行人の視線が気になるようになりまして……」

ああ……それは確かに、カワイイ二人がずっとベンチに座っていたら、目立つわな。ナンパ師の格好の獲物になるのも無理はない。

「喫茶店などで過ごせれば、周囲の視線も和らぎます。ですので、そのための資金を……」

――至極もっともな要望である。

「よし……じゃあ、一人あたり月1万円でどうだ？」

「ありがとうございます。でも、日本円でなくても構いません。できれば、今後手に入れたＹＥＭを頂けませんか？」

……ＹＥＭ。ガチャの副産物で、現実世界では使い道のない謎通貨。正直、俺の部屋では『タンスの肥やし』と化している。

「それに、できれば高級ＭＰポーションやフルＭＰポーションも……」

……ふむ。ＭＰポーションは俺が仕事に持っていってるやつだな。ちょっと痛いが、コーヒーで代用すればなんとかなる。

「……分かった。いいよ、全部渡す。ＹＥＭは押し入れの中だし、ポーションは毎朝用意するよ。忘れてたら、指摘してくれ」

「はい、承知しました。ありがとうございます」
その晩、俺は財布からなけなしの1万円札を取り出して、璃紗に手渡した。
「これ……馨と分けて使ってくれ」
「よろしいのですか？」
「少なくて申し訳ないけどな」
「とんでもございません。感謝いたします」
俺がニコッと笑うと、璃紗も恭しく頭を下げた。
そして、3人でスーパーに出かけたときのことだった。
俺が激安のインスタントコーヒーをカゴに入れようとした、その瞬間――。
「少々お待ちください。検討させてください」
「え、検討？」
璃紗と馨はコーヒー売り場の前で真剣な顔になり、商品を一つひとつ吟味し始めた。あまりにも真剣な様子に、他の買い物客が思わず足を止めるほどだ。
5分後――。
「これに決めました」
彼女たちが選んだのは、14パック入りで一杯約50円のプレミアムドリップパックだった。思わず財布の中身を確認しそうになったが、璃紗の口から意外な言葉が。
「調理方法によって、恒久的にステータスが上昇する食品があるのです」
「え、それって……マジ？」
「はい。このコーヒーを30杯飲めば、MPが+1される可能性があります」
……まあ、俺には魔法は使えないけど、なんかワクワクする。
その翌日から、朝食の定番は「漬物、おにぎり、そして璃紗の淹れたコーヒー」となった。検証は続くが――。
「どうでしょう、ご主様。昨日より、頭が冴えていませんか？」
「うーん……いや、でも璃紗が淹れてくれたコーヒーってだけで、なんかすっげー幸せだよ」
「ふふ……ありがとうございます」
つい、俺はその場で璃紗の頬に手を添えて、キスをした。璃紗は頬を染め、恥ずかしそうに視線を逸らす。
そんな様子を、少し離れたところで羨ましそうに見ている馨。
「……馨も、こっち来な」
「はい！」
もちろん、馨にもキスを。俺たち三人だけの、あたたかな朝の儀式だ。
こうして――俺と璃紗、馨の三人暮らしは、少しずつ『本物の家族』のようになっていく。
どこか不思議で、だけど確かな幸福に包まれて。
――これは、俺にとっての『夢幻の国』という現実だった。

■璃紗　2019年6月

夢幻の国――その名のとおり、夢の中でしか辿り着けない世界。
目が覚めれば、指のあいだから砂がこぼれ落ちるように、記憶は儚く散っていく。
それでも私は確信している。
あの場所に、何度も足を踏み入れたことがあると。
なぜなら、夢の中で見た風景が、別の夢に繰り返し現れるからだ。
繋がりのないはずの夜が、ひとつの糸で結ばれていく。
夢幻の国にはさまざまな色がある。
胸を締めつけるほど恐ろしい夢。
心臓が跳ねるほど楽しい夢。
そして、ただの穏やかな日常の夢。
普段の夢は目覚めと同時に消えてしまうけれど、極端な夢だけはほんの欠片を心に残す。
あの日、私が見たのは――驚くほど「平凡」な夢だった。
休日の午後、狭いアパートメントで、ひとりの男の人と寄り添う。

買い物に出かけ、料理を作り、ただ愛を確かめ合う。
それだけの夢。
それなのに目が覚めたとき、頬を涙が濡らしていた。
「また、あの夢幻の国へ連れて行って」
心から願わずにはいられなかった。
――強く願えば、夢幻の国はその希望を叶えてくれる。
そんな噂を、幼いころに耳にしたことがある。
男の人の顔は、もう思い出せない。
けれど、私に向けられた微笑みの温度だけは、心に残っている。
誰かに恋人のように扱われた、その幸福だけは、決して忘れられない。

私の村には、多くの種属が暮らしていた。
表向きは平和を謳うけれど、そこには冷たい階層が存在していた。
エルフが頂点に立ち、その影にハーフエルフ、人間、そしてその他の種属が従う。
だが、実際にもっとも虐げられるのは――私のような「ハーフエルフから生まれたハーフエルフ」だった。
私は父を知らない。母はハーフエルフ。祖母は、母を産んだ直後に村から消えたという。
必然的に私は「最も弱い立場」に生まれた。
村の学校では、子供たちは大人の差別を真似る。
エルフの子は他の種属を下に見て、他の種属の子は、その憎しみをハーフエルフにぶつける。
私の居場所はどこにもなかった。
だからこそ――夢幻の国は、私にとって光だった。
「璃紗」――そう呼ばれたのは、夢幻の国の中でだけだった。
母以外の誰かに名前を呼ばれること。
それが、どれほど胸を震わせる出来事だったか。
あの人が私を呼んでくれた瞬間、私は「存在していい」と初めて思えた。
やがて再び、私は夢幻の国へと呼ばれた。
そこでは幼い子供が怪物に襲われ、命を落としていた。
彼――召喚主――私を呼んだ人は、その子を助けろと命じた。
夢幻の国で、召喚主の命令は絶対。逆らうことはできない。
流れ込んでくる知識を頼りに、私は必死に動いた。
幸い、彼が持っていたエリクサーで子供は息を吹き返した。
結末を見届ける前に、私と彼は立ち去ったけれど――
あの子が生き延びたことを、私は信じている。
そして気づけば、彼の部屋で私はただ黙って抱き合っていた。
次に目を開いたときは、もう自分のベッドの上だった。
夢の詳細は少しずつ霞んでいく。
けれど、あの人が確かに私の名を呼んでくれたことだけは忘れない。
それが、私を夢幻の国に惹きつけてやまない理由。
そして１００日あまりの後――
私は再び彼に召喚された。
その時、流れ込んできた知識の中に「召喚時間永年延長石」の存在を知った。
死ぬまでこの世界に留まれるアイテム。
私の村に戻るくらいなら、この世界で彼と共にありたい。
私を呼んでくれる人がいる、この世界で。
だが、それを願う間もなく――
「璃紗。死ぬまでこの世界で俺と一緒にいてくれませんか」
彼の言葉が先に私の願いを奪っていった。
私はただ、静かにうなずいた。
その瞬間から、この世界は私の「夢」ではなく「現実」になったのだ。

◎社内運動会　２０１９年６月
６月のある日曜日――空は晴れ渡り、抜けるような青さがどこまでも広がっていた。
今週末は、俺の会社が主催する年に一度の社内イベント、「運動会」の日だ。
社員の９割近くが参加し、そのうちの３割は家族を連れてくる。つまり、運動会はまさに「社を挙げた大イベント」なのだ。体育会系課長の執念とも言える力の入れようで、健康保険組合の補助金を得るための出席率には、毎年異様な熱気が漂っていた。
そして――そんな運動会の４日前。

「守谷、今日の弁当も愛妻弁当か？」
「ええ、まあ……そんな感じですかね」
「うおっマジか。で、彼女カワイイの？　今度会わせてよ！」
「……なんでそうなるんですか」

そう、俺は今、謎の圧力を受けている。発端は、昼食時に毎回声をかけてくれる律儀な体育会系課長。そしてその勢いに乗った東野の追撃。
「じゃあ日曜の運動会に連れてきて！　総務には俺から話しとくから！」
「勝手に話を進めるなよ！」

そんなわけで、今日の運動会には俺の『家族』――璃紗と馨を連れてくることになってしまったのだった。
もちろん彼女たちは、異世界から召喚したキャラクターで、俺の召喚能力によってこの世界に存在している。

……そんな事実は、誰にも言えないけどな。

運動会当日。会場の門をくぐった瞬間、空気が一変した。
「すごい……」

隣で目を輝かせるのは璃紗。控えめながらも優雅な佇まいの彼女は、まさに「どこぞのご令嬢」といった風情。

その後ろには、少し不安そうに俺の袖を握る馨。スリムな体に柔らかい表情――こちらは「璃紗の弟」ということにしてある。

俺が二人を連れている姿を見つけた瞬間、課長と俺の同期の吉田さんが突撃してきた。
「守谷ーっ、マジで彼女連れてきたのかよ！　うっわ、めっちゃキレイじゃん！」
「弟くんもカワイイーッ！　ねぇ名前は？　好きな食べ物は？　彼女いるの？」
「ちょ、ちょっと……」

あまりの勢いに璃紗は戸惑い、馨にいたっては俺の後ろに隠れるほどだった。仕方なく「社長に挨拶してきます」と言い訳してその場を逃れたが、今度は社長と奥さんの圭子さんという強敵が待っていた。
「おう、守谷。おはよう」
「おはようございます、社長」
「まぁまぁ、彼女さんかしら？　うふふ、奇麗な方ね」

圭子さんは本社で『掃除のおばさん』として働いているが――その正体は社長の奥さんだ。
「はじめまして、櫻井璃紗と申します。こちらは弟の馨です」
「まぁ、日本の方だったの？　外国の方かと思ったわ。とてもお綺麗で……」

彼女の柔らかい微笑みに、璃紗も少しほっとしたようだった。

さて、うちの運動会は、運動経験の有無に関係なく基本『全員参加』がルール。
その中でも徒競走は、赤ん坊や高齢者を除き、１００メートル走が基本だ。
俺は足が速い方なので、若手組の中でも最後から２番目の組。璃紗はその前、馨は最終組となった。
「璃紗、馨の組、大丈夫かな？　人見知りするし、浮かないかな……」
「多少、心配です。うまくやるよう声をかけておきます」
「あまりプレッシャーをかけないようにな」

だが――。

その懸念は、いい意味で裏切られた。

馨は、狼のごとき前傾姿勢で地を這うように疾走し、スタートから一気に飛び出す。まるで影が走っているかのような錯覚すら覚えるその走りに、周囲は息を飲んだ。
「ゴール！　タイム、１１秒１２！」

会場は騒然となり、２位の選手とは１０メートル以上の差。……いや、それもう高校男子の全国レベルだって。

「やば……あの子何者……？」
「人間じゃねぇ……！」
ただ、騒然としたのは一瞬だけで、すぐに馨は歓声に囲まれて、まるでヒーローのように引っ張りだこになっていた。
「璃紗に言われて、ちょっと調整したんです。高校生の日本記録を超えないくらいに」
後で馨にそう耳打ちされて、俺は額に汗をにじませた。
――ガチでやったら世界記録を越えてしまうとか、どこのチート種属だよ人狼。
でもまぁ、こうして馨が注目を浴び、少しずつ人見知りが解消されるなら、それも悪くない。
昼食は体育館に移動して、3人で手作りの弁当を囲んでいた。
「こっち、ちらし寿司あるから食べて！」
タッパーを持って現れたのは、同期の吉田さん。彼女は当たり前のように璃紗と馨の間に座り、弁当をシェアし始めた。
「守谷君、ついに同期で最初の結婚か～！」
「いや、まだしてないし。てか、そもそも――」
「でも、するんでしょ？　璃紗ちゃんもその気満々だよね？」
「はい……私は一生、攻矢さんのそばにいます。攻矢さんからも『死ぬまで一緒にいてくれ』って……」
「かーっ！　聞いたかコレ、少女漫画かよ！」
「俺のことより、吉田さんこそどうなんだよ。結婚とか」
「私はねぇ……タッくん推し一筋だから！　でも……馨くん、ちょっとタッくんに似てるし……乗り換えちゃおうかな」
「やめてあげて、馨がパニクってる」
「まだ大丈夫です……！」
といいつつ、耳まで真っ赤になってたけどな。
午後からの競技では、璃紗は圭子さんに、馨は吉田さんに捕まっていた。どうやら本格的に「社内人気者」になってしまったらしい。
まぁ――いいか。
いつの間にか、彼女たちが俺の『日常』に、しっかり溶け込んでいることが、ちょっと誇らしかった。
俺の家族として。俺の世界として。
そして――。
この先も、ずっと一緒に歩いていけたら、どれだけ幸せだろう。
◎ガチャアイテム　２０１９年７月
社内運動会が終わって間もなく、璃紗が新品のスマホを手に帰ってきた。
「……おい、それどうしたんだ？」
俺が問いかけると、璃紗はにこりと微笑んで言った。
「小遣いとＹＥＭを合わせて購入しました。回線も契約済みです」
「え、ＹＥＭって……それ、日本円として使えるのか？」
ガチャで手に入る謎通貨・ＹＥＭ、現実世界ではてっきり『無用の長物』かと思っていたが、実は案外汎用性が高いらしい。璃紗はそのスマホを使って、なんと社長の奥さんの圭子さんと連絡を取り合っているという。
……それはそれで、なんかヤバい展開の予感しかしないんだけど。
その一方で、スマホを手にした璃紗を見ていた馨がどこか寂しそうにしていたのが気になったので、以前使っていた古いスマホを馨に渡すことにした。ただし、こちらは回線契約なし。ＷｉＦｉだけで運用させる条件付きだ。
とはいえ馨は基本的にアパートにいることが多いから、これで十分だろう。
そんなふうに、2人の召喚キャラがこの世界に馴染んでいく中。
押し入れの上段から――ガチャカプセルの山が雪崩を起こしたのだ。
「うおおっ！　こ、このタイミングでかよ！」
崩れたカプセルの山を眺めながら、俺は決意した。

「よし、ここらで一度、ガチャアイテムを棚卸ししてみよう！」

土曜日、俺は璃紗と馨に手伝ってもらって、押し入れに眠るガチャアイテムの大整理大会を開催した。

まずはＭＰポーションとＹＥＭ。これは既に璃紗の管理下にある。中でもＭＰポーションは日々使っているため、在庫に関しては彼女の領分だ。

召喚メダルは――男が８０枚、女が２７枚。女スライムが６枚混ざっているから、実質、あと２１回は『楽しめる』ということになる。

召喚時間延長石は、二時間が３５個、一日が２３個、そして永年延長石が４つ……ただし、もう永年は使わない。今ですらこの狭いアパートに３人住んでるってのに、これ以上はさすがにキャパオーバーだ。

状態異常解除ポーションが４６個。復活ポーションが９個。まあ、これらも使い道は限られる。だが、風邪や腹痛のときに状態異常解除ポーションが効くかもしれない。今度試してみよう。

ＨＰポーションは初級と中級が合わせて５本。高級とフルが４８本。完全に使い切れていないので、今後は普段使いするべきだな。

そして最大の問題、それが「装備品」だった。

これが実に厄介な代物だった。剣や槍、弓なんて開けられるわけがない。銃刀法違反、即アウト。

唯一、実用的な武器はナイフ。実際、果物ナイフや包丁代わりに使っていたりもするけど、そんなに何本も要らない。

防具は金属鎧や兜は完全にＮＧだが、Ｔシャツやキャップ、スニーカーといったカジュアルな装備は使えそうだ。

……今思えば、璃紗が来たときに、あの真緑のブーツじゃなくて、スニーカーを与えるべきだったな。

そこで俺たちは一気に、普段使いできそうな装備品のカプセルを開けていった。開けたのは――

Ｔシャツ、ワンピース、ビジネススーツ（女）、ストリートファッションセットアップ（男・青）、スニーカー、省エネスーツセット（男）。

ところが、この「省エネスーツ」がトンデモだった。

開けた瞬間、俺は叫んだ。

「なんだよコレ！？　半袖のスーツ！？　……誰が着るんだよ！！」

結局、セット内の半袖Ｙシャツと薄手のスラックスは普通に使えたからよかったものの、ズボンまで半ズボンだったら発狂してた。

だが、失望の中にひとつ、きらりと光るアイテムがあった。

それは――小さな肩掛けのポシェットだった。

「カバンか……？」

案内によると、これは「４×２ブロックのバッグ」らしい。

すると、その説明を見た璃紗と馨の目が一気に輝いた。

「ご主人様、これは――とても貴重なアイテムです！」

「な、なんだ急に！？」

「これは、マジックバッグです。つまり、アイテム収納が可能な特殊なカバンです」

マジックバッグ……それはゲームやファンタジーではおなじみの、容量無限、重量軽減、時間停止などの特性を持つ『夢の道具』。

璃紗の説明によると、これはそこまで特別製ではないが、容量がブロック制になっていて、１ブロック＝約５０センチ立方。そこに同種アイテムなら複数収納可能、さらに重さは千分の一に軽減されるという。

「それって……つまり、この高級ＨＰポーション全部、この中に入るってこと？」

「はい。さらに重量もほとんど感じません」

試しに高級ＨＰポーションを１本ポシェットに入れてみた。すると目の前に半透明のウィンドウが浮かび上がり、直感的な操作で『ポン』と収納された。

以降、同じアイテムを入れると、ウィンドウの右上に「２」「３」と数字が増えていく。

「うおお……すげぇ、本当にゲームみたいだ……！」

高級ＨＰポーション、フルＨＰポーション、延長石（二時間と一日）を収納し、最後に冬用の掛け布団も試しに入れてみた。こちらは一ブロックに収まらず、２ブロック消費。

合計で７ブロック使用――それでも、押し入れはすっきり片付いた。

璃紗の話では、この世にはもっと高性能なマジックバッグもあるらしい。たとえば時間停止、使用者登録式、さらには全体容量式など。

「冷蔵庫代わりにも……なるってことか？」

「はい。夢幻の国では高級調理士はこうしたバッグで食材を管理します」

まさか、カバンひとつでここまで生活が便利になるとは……。

「今後はカバン系のガチャがあったら全力で回すか……！」

俺はポシェットを肩にかけながら、そう強く誓ったのだった。

◎選民思想のハーフエルフ　２０１９年７月

「……マジで、最悪な週末だ」

俺は、金曜の朝からすでに憂鬱だった。

出張の話が舞い込んできたのだ。

しかも、日曜前泊で月曜から仙台出張。代役を頼まれたのは、いつもお世話になっている現場の渡辺部長さんからだった。予定していた手塚課長が急に体調を崩したらしく、どうしても代わりが必要だと言われれば、断れないのが俺の立場。

ただ、こっちにも都合ってもんがある。何より――

「月曜のデイリーガチャ、引けないじゃんか……」

これが一番の問題だった。

ガチャは俺のライフワーク。休日出勤扱いにもならない日曜の移動もキツイが、それ以上に、ガチャが引けない現実が重くのしかかる。

しかも、出張先のホテルはダブルルームしか空いていないという。

「……守谷君なら現地調達で２人で泊まるだろ？」

そう笑顔で言い放った渡辺部長さんの顔が、今も脳裏に焼き付いて離れない。ええ、予約しましたよ、ダブルルーム２泊分。

だったら、せめてガチャキャラと一緒に仙台の夜を楽しんでやろうじゃないか。ということで、ホテルに着くや否や俺はハーフエルフの風魔法士のメダルをトスした。

現れたのは、鋭い目元と美しい金髪を持つ、まさに絵に描いたようなエルフの血を引く美女――だった。

「……最高じゃん……って、思った俺がバカだった」

その瞬間、あの忌まわしき記憶が蘇る。エルフ召喚で出てきた高飛車な女。そのトラウマをまさかまた味わうことになろうとは。

「私のお父様はエルフなのよ？　人間ごときが私を相手にできると思って？」

ホテルの一室で、耳を疑うような発言が飛び出した。俺は苛立ちを隠せず、即座に命令した。

「黙れ。以後、小声で話せ」

命令には逆らえない仕様。彼女は小声で愚痴を垂れ流し続けた。

俺の中に溜まりに溜まった不満と苛立ち――急な出張、ガチャが引けないストレス、そして見下してくる女の態度。すべてが臨界点を突破した瞬間、口をついて出た言葉は――

「お前の名前は『醜い牝ブタ』だ」

そして俺は命令した。２０時間以内に２０人の男に罵倒されること。達成できなければ、自分の指を一本噛みちぎれと。

そしてホテルから追い出した。

さすがに言いすぎたとは思う。だけど、見下すような態度に対して俺は耐えられない。俺はバカだ。でも、バカなりに努力している。だからこそ、見下されることに我慢ならないのだ。

翌日、部屋に戻った彼女の姿に、俺は言葉を失った。

バスタブの中で、彼女の手は血に染まったティッシュに包まれていた。左手の薬指の先が、無かった。

それを見て、さすがに後悔した。俺は冷蔵庫から初級ＨＰポーションを取り出して彼女に渡す。

「飲め。血が止まったら、部屋に来い」

ほどなくして現れた彼女は、言葉少なに昨日の出来事を語った。ののしってもらったのは酔っ払い、小学生――抜け道ばかり使いやがって。だが、俺の命令にも不備はあった。

反省している様子が見えるなら許してやろう――そう思っていた。

だが。

「人間ごときが、醜い牝ブタに命令するなんて……」

心底、失望した。

まるで変わっていなかった。俺は、もう一度命令を出した。今度はさらに厳しい内容で、延長石を使って一日延長。

そしてホテルから追い出した。

出張が終わる2日目の夜。仙台駅近くのネットカフェ前で彼女を回収し、ペア個室に押し込んだ。左手の指は3本、右手も2本――無かった。

「泣くな」

俺は命令を出し、制限をかけたまま彼女を解放した。

新幹線の中で、心のどこかで、自分自身に嫌気がさした。

これはただの八つ当たりだ。自分の力じゃないもの――ガチャを引けるユニークスキルを盾にして、他人を見下していたのは、結局俺も同じだった。

――次に、もし、もう一度、あの女に出会ったら。

そのときは、謝ろう。

きちんと、「ごめん」と。

そしてその日は意外にも、すぐに訪れた。

◎ネトラレＭのハーフエルフ　２０１９年８月

８月。世間は海と花火と、バカンス、イベントガチャも海と――

「……クラーケンって、誰得なんだよ」

俺はスマホを握りしめながら、思わず天を仰いだ。

ガチャイベントの季節、夏真っ盛り。

８月６日から始まった海イベント。なのに、召喚ラインナップがクラーケンとかシーサーペントって、どうなってるんだ。ま、人魚がアタリ枠なんだろうけど……下半身魚の時点で、なんかロマンない。

装備も麦わら帽子に水着、日焼け除けアームカバーとかいうネタ枠オンリー。スクール水着が出ても、正直困る。ということで、今回は１０回だけ引いて撤退だ。ガチャ資金は温存して、お盆イベントに備えるのが得策。

それに――

「出張の赤字が痛かったな……」

先日の仙台出張。交通費と宿泊費は出たけど、出張手当は無し。しかも、見栄張って買ったあのカスタードカステラ包み。チームメンバーと渡辺部長の分を入れたら、ガチャ１０回分が吹っ飛んだ。

「チームの評価とガチャ……天秤にかけるのが間違いだったな」

まあ、帰ってきた翌週、渡辺部長とうちの体育会系課長が『出張お疲れ会』と称してキャバクラに連れていってくれたから、収支はギリギリセーフ……かな。

とはいえ、出張中に召喚した『あの高ピー女』の記憶が、まだ脳裏をよぎる。

あの言葉が忘れられない。

「私のお父様はエルフなのよ？　人間ごときが――」

思い出すたびに胃が痛む。が、その一方で、あれだけ見下していた彼女を、俺は酷く扱いすぎたとも思っている。指を食わせたなんて、さすがにやりすぎた。

罪悪感と反省。そして――

「ねえ、璃紗」

「はい、何でしょう？」

「チュートリアルモードで、ちょっと教えてくれ」

「どうぞ。攻矢さんのご質問なら、なんでもお答えします」

「同じ種属、同じ職業のメダルをトスしたら……出てくるのは同じ人なのか？」

「いいえ。基本はランダムです。同一人物が出るとは限りません」

「でも、璃紗は2回連続で璃紗だったよな」

「それは……私が攻矢さんに会いたかったから、です」

ドキン、と心臓が跳ねた。

なにそれ可愛すぎる。璃紗、やっぱお前は最高だ。

となれば、もうあの高ピー女と再会することはない。どう考えても、向こうは俺のことを二度と見たくないだろうから。

……そう、思っていた。

ところが――イベントガチャの代わりに回した常設ガチャからハーフエルフが出たその夜、事件は起きる。

仕事が終わり、9時半の五反田。俺は目黒川沿いの人目の少ない路地へと向かい、誰もいないことを確認してから、そっとメダルを手にする。

――風魔法士・ハーフエルフのメダル。

トス。

光と風が舞い上がり、そこに現れたのは――

「やっと、会えましたブヒ。ご主人様、醜い牝ブタですブヒ」

……え？

目をキラキラさせて俺に抱きついてきたのは、まさかの、あの女だった。

「ちょ、ちょっと待て。お前……あの仙台の、高ピー……」

「はいブヒ。仙台のネットカフェで5年前にお別れした、醜い牝ブタですブヒ。覚えていてくださったのですねブヒ」

「5年前じゃなくて先週の火曜日だろ……ってか、お前、なんでそんなに嬉しそうなんだよ……」

「お礼を言いたかったのですブヒ。ご主人様に、感謝の気持ちを伝えたくてブヒ」

周囲の通行人が、こっちを見てニヤニヤ笑っている。恥ずかしさと混乱を誤魔化すように、俺は提案した。

「……場所を変えよう。ラブホ行こうか」

「はいブヒ！」

――で、川向こうのラブホテルに直行。

そこで語られた真実は、俺の想像をはるかに超えていた。

あの後、元の世界に戻った彼女は、自分の過去を見つめ直したという。

人間である母のこと。エルフの父親のこと。将来産まれるかもしれない子どものこと。そして、今まで自分がしてきた言動の数々。

その結果、自分がどれほど傲慢だったかをようやく理解したのだという。

「私は、自分がいかにちっぽけだったかを知りましたブヒ。そして、初めて気づいたのです。今まで蔑んでいた男ハーフエルフが、どれだけ素敵だったかをブヒ」

そして彼女は変わった。彼と付き合い、4年前に結婚。2年前には子供も生まれた。今は、毎日彼に罵られながら幸せに暮らしているという。

「夫は毎日、醜い牝ブタを罵ってくれるのですブヒ。とても優しい人ですブヒ」

「……まさか、あんな性格からそんなドMになるとはな……」

「すべては、ご主人様のおかげですブヒ。お礼がしたいです。どうか、この醜い牝ブタを、抱いてくださいブヒ」

「いや、でも旦那さんが……」

「夫は、醜い牝ブタが他人に抱かれるのを見るのが好きなのですブヒ。私は、それを見て喜ぶ夫の顔が大好きなのですブヒ」

……もう、ツッコミきれない。

変わりすぎだろ、お前。

でも、見た目は最高級なんだよな……。

「じゃあ……遠慮なく、いただこうか」

「はいブヒっ！」

こうして、俺は五反田の夜に身を沈めた。

――人生、何が起きるか分からない。

あのときの『罰』が、彼女にとっての『救い』になったのなら。

多少なりとも、俺が彼女を変えることができたのなら――

少しだけ、自分を許してやってもいいかもしれない。

◎帰省　２０１９年８月

お盆の少し前だった。

スマホの着信音が鳴ったとき、俺はガチャの結果に肩を落としていた。

――兄貴からだった。

「今年は帰ってこい。話がある」

電話口の兄貴はそれだけ言うと、何を聞いてもそれ以上は口を割らなかった。話の内容は「帰ってから話す」の一点張り。

親父の体調のことか……？　介護費用がかかるから、俺にも金出せってパターンか……？

予感は外れない気がした。親父は連休明けから調子を崩していたと聞いていたし、今も寝たきりに近いという。

――仕送りなんて言われたら、ますますガチャが回せなくなる。

璃紗と馨の小遣いだけでも精一杯なのに……。

でもまあ、そろそろ璃紗を家族に紹介するべきタイミングではある。

いずれにせよ避けて通れないことだ。

俺は意を決して、１４日から３日間の夏休みを申請した。

現場もうちの会社も夏休みの日程は自由取得制。実家に帰るために３日取ったって文句は言われない。兄貴には「２人連れてく」と伝えておいた。

それと、ガチャの件。

旅行中でもガチャを回す方法……ん？

ポシェットにあのガチャマシンを押し込んでみた。

……すっぽり入った。

おおお！？　入ったぞ、これ……！

仙台出張のときも、こうすればよかった……。

実家のある東伊豆へ、俺たちは電車を乗り継いで向かった。アパートから片道３時間。特急を使えば短縮できるが、特急料金がもったいない。

璃紗と馨にとっては、はじめての長距離外出だった。最寄り駅ではきょろきょろと辺りを見渡し、人混みに圧倒されていた馨も、電車の旅に次第に慣れていく。

鴨宮で海が見えたときには、テンションが最高潮に達したらしく、窓に張り付いて大はしゃぎしていた。

実家の門をくぐったとき、出迎えてくれたのは懐かしい顔ぶれだった。姪の藍奈、甥の舜矢、そして二軒隣に住む幼なじみの音羽。

「おじちゃんっ！」

舜矢の抱きつき突撃をギリギリでかわす。続いてくる藍奈の攻撃に備えるが、もう中学生になっていた藍奈は照れ臭そうに立ち止まり、璃紗のほうを見ながら小さく挨拶するだけだった。

「こんにちは……」

そんな彼女の視線の先にいた璃紗は、柔らかく頭を下げて笑った。

親父の部屋に入ると、やはりベッドで寝ていた。体を起こすのもしんどそうだ。

「よう、親父。調子どうだ？」

「ん、攻矢か……。後ろにいるのは、嫁さんか？」
「まあ、そんなとこ。一緒に暮らしてる璃紗と、その弟の馨だ」
「初めまして。璃紗です」
ベッドから身を起こそうとする親父。動きは鈍いが、気遣ってくれる璃紗の一礼に応えようとしていた。
「無理すんなよ、親父。調子わりいだら、寝てなよ」
「いやいや、ちょっとかったるいだけだら。攻矢の父親として、ちゃんと挨拶くらいしねえとよ」
璃紗の手を軽く握りながら親父はにこやかに言う。
「それにしても……ばかかわいい嫁さんら」
「おう、ばかかわいいだら」
「ばあさんの若い頃に、そっくりら」
そんな親父の言葉に照れる璃紗を見て、馨がそっと近づいた。
「こんにちは、馨です。よろしくお願いします」
そう言いながら、親父に向けて手を差し出す。普段は人見知りな馨の意外な行動だった。
「おお、こっちもばかかわいいなあ」
頬を赤らめて目をそらす馨。だけど、手はしっかりと親父の手を握りしめたままだ。
どうしたんだ、馨……？
と思った次の瞬間、馨が枕元の栄養ドリンクを見つけて、こちらを振り返った。
「攻矢お兄ちゃん、あの高いやつ持ってたよね。お父さんにあげれば？」
ああ、なるほど。
ポシェットに手を入れて取り出したのは、金色に輝くフルMPポーション。俺はそれを親父に手渡す。
「これ飲めば、一発で効くぞ。高級品だ」
「おお、悪いな……」
そう言って親父はそれを枕元に置いて、また横になった。

「じゃあ、線香あげてくるら」
「おお……ありがとな」
仏間に入ると、兄貴の家族とお袋、そして音羽がいた。しれっと混ざっている音羽の存在が、田舎らしさを感じさせる。俺はこういう雰囲気が嫌いじゃない。
音羽は祖父の介護で大変そうだ。俺の実家に息抜きに来たい気持ちもわかる。
線香をあげ、手を合わせる俺の後ろで璃紗と馨も自然に動く。教えたわけでもないのに、完璧な所作だった。
システムに問い合わせたのかもしれない。
「で、話って何？」
「姉ちゃんが来たら話す」
姉貴は車で15分ほどのところに住んでいて、すぐにやってきた。
全員が揃うと、兄が口を開いた。
「攻矢、離れをバリアフリーにして親父とお袋に住んでもらおうと思ってる。母屋は段差ばっかで危ねえからな」
「おう……」
姉貴もお袋も親父も、すでに話は通っていたようで、皆がうんうんと頷いている。
「で、俺はいくら出せばいいだ。……金、ねえけど」
「何言ってんだよ」
「いや、出さなきゃいけねえのはわかってるけどさ。本当に金がねえんだってば」
「金ないって、攻ちゃん、それで結婚するつもり？」
姉貴のあきれた顔と視線が突き刺さる。
そんな俺たちのやりとりを見て、お袋と兄貴が笑い出した。
「安心しな。攻矢に金出してもらおうなんて思っちゃいねえから。おめえがいつも金欠なのはみんな知ってるら。金のことは裏山売ってどうにかするだ。攻矢には納屋の荷物整理を頼みてえ」
「……マジで？」
「ああ。で、納屋の攻矢の部屋を一時的に荷物置き場にするだ」
「そっか……よかった。金は出さなくていいんだな」
「おう。裏山の一部を東京の会社に売る。保養所にするらしい。ちょうどいいタイミングだ」
「わかった。夜、部屋の整理するよ。残ったんはほかしていいからさ」

「おお、わりいな。そいじゃ、攻矢は今日は納屋でいいな。璃紗さん姉弟は母屋で寝るか」
「俺の部屋、狭いけどいいよな？」
「構いません」
「さすがに攻ちゃんの部屋は狭すぎるでしょ」
「狭いのは慣れています」
「え、まさかあなたたち、攻ちゃんのあのアパートに住んでるの？」
「はい」

璃紗は真面目な顔でうなずいた。
その表情がなんとも言えず、俺はちょっと照れくさくなった。
田舎の夜は、蝉の声とともに、ゆっくりと過ぎていった。

■璃紗2　2019年8月

夏の盛り。
蝉の声が降り注ぐ季節、私は主《あるじ》の生まれ故郷へ向かうことになった。

アパートメントから100キロメートル以上離れたその地へ行くには、この世界の交通手段を用いても半日以上を要する。
移動にかかる時間と費用を、主はとても気にしていた。
私は時空魔法士。けれど今のレベルでは、まだそこまでの距離を飛ぶことはできない。
――もっと強くならなければ。
今以上に努力を重ね、主の望みを叶える力を得なければ。

私の見るところ、主の望みは三つ。
多くの女性と交わりたい。裕福になりたい。賢くなりたい。
欲深いように見えるその願いを、私は否定しない。
それは――それを叶えてこそ、私の存在価値が証明されるから。

私は時空魔法士。未来を垣間見ることができる。
不確かでも、30分先の数字を読むことができれば、この世界では「宝」と呼ばれる籤で金銭を得られる。
今はまだ不安定だが、当たりを掴むことができたときには、それなりの額を得ている。
今はまだ小遣い稼ぎ程度かもしれない。けれど――レベルが上がれば、もっと大きな未来を掴める。
もっと裕福に、もっと確実に。
その先に、主の笑顔があるなら、私は何度でも努力しよう。

出発前、主に注意を受けた。
「言葉遣いと呼称を徹底するように」
以前、社内運動会の前にも同じ注意をされた。
命令は二度繰り返されるものではない。私の対応が不十分だったのだろう。
人とのやり取りは、やはり難しい。私には荷が重い。

電車――。
それはシステムから知識としては知っていたが、実際に乗るのは初めてだった。
走り出した瞬間、私の胸は高鳴り、抑えきれず声を上げてしまった。
隣では人狼の馨が子供のようにはしゃぎ、窓にかじりついている。
そんな私たちを見て、主は笑ってくれた。
……その笑顔を見られただけで、胸がいっぱいになる。

主の生まれ故郷は、驚くほど素朴な場所だった。
どこか、私の村に似ている。
主の家族の前で、私は命令どおりに振る舞った。ぎこちなくも、破綻はなかったと思う。

そして夜。
古びた狭い部屋で、電車の余韻に浮かされたまま、私は馨と共に主に抱かれた。
主はいつもよりも優しかった。
その温もりに、私はこの世界に永く留まりたいと改めて思った。

翌日、二軒隣に住む稲葉音羽と共に温泉へ行った。
湯けむりの中で、彼女は主への想いを隠そうとしなかった。
過去に二度告白し、二度拒まれたこと。
それでも諦められないこと。
「私から攻矢さんに伝えましょうか。音羽さんも相手してほしいと」
そう口にしたとき、彼女の目から大粒の涙がこぼれた。
それは決して喜びの涙ではなかった。
……彼女の痛みを、私ははっきりと理解してしまった。

主は優しい。
私はこの世界に来て、主と出会い、人と話すことができるようになった。
主は優しい。こんな私を必要としてくれるほどに。
主は優しい。欠点はあるけれど、それすらも許せるほどに。

だから私は主の望みを叶え続ける。
多くの女性と交わりたいという欲望も。
裕福になりたいという野心も。
賢くなりたいという願いも。

それは――私への命令であり、私の願いだから。
私は死ぬまで、主を支え続ける。

◎お子様ランチ　２０１９年９月

実家から戻ってきて以降、璃紗の様子がちょっと変わった。

というのも、あの伊豆の海鮮に心を奪われたらしい。魚の脂の乗り具合とか、身の締まり方とか、うまいとかそういうレベルを超えて「食文化への覚醒」みたいな勢いだ。

「攻矢さん、やっぱり鮮度というのは料理の生命ですね」

などと真剣に語りながら、台所に立つことが増えた璃紗。料理という新たな趣味に目覚めたようで、俺は食材費として１万円を渡したんだが――

２週間たっても追加を要求してこない。
どうやらやりくり上手らしい。

一人で外食にも出かけているようで、「食べなくても生きていける」と言っていた以前の発言が、もはや嘘だったかのような食への探究心。
俺としてはもったいない気もするが、自分の小遣いでやってる限り、口出しするつもりはない。
だって俺だって、自分の小遣いでガチャを回すのを止められたらキレるしな。

だから、俺はむしろ応援する側だ。
最近じゃ、安い牛丼屋やファミレスに璃紗を連れていくのも日常の一部になっていた。もちろん、代金は俺持ち。
馨も誘ってはいるけど、あいつはあまり外に出たがらない。どうしても部屋の中で静かに過ごすほうが好きみたいだ。

で、先週の話になるんだが――

ファミレスのモーニングに璃紗を連れて行ったら、隣のテーブルのお子様ランチをじーっとガン見しはじめてさ……。

それ、注文してるのが小学一年生ぐらいの女の子なんだよ？
当然、璃紗のあまりの凝視に、その子の親も気まずそうに笑ってた。
……ほんとにやめてくれ。恥ずかしいから。

そして、今日。
昨晩から吹き荒れていた台風の影響で、俺は夜中ずっと寝つけなかった。
まあ、そのおかげで朝早くに起きたわけだが――一番の理由は別にある。
今日は、午前中サボれるかをいち早く確認したかったのだ。

数日前からニュースは「台風が関東直撃」と報じていた。交通麻痺が予想されていたから、うまくすれば堂々とサボれる。
テレビをつけ、スマホで運行情報をチェックすると――

〈ＪＲ線、始発から全線運転見合わせ〉

……っしゃあ！

これで「堂々と遅刻」できる。しかも、会社の就業規則的には交通機関由来の遅刻はノーペナルティ。
うちの会社、残業代の計算もいろいろと面倒くさいが、定時外に働いた分で遅刻がチャラになる仕組みがある。
さっそく、体育会系の松浦課長と現場の手塚課長にショートメールを送った。

『電車止まってるので、動いたら出勤します』

これで堂々と昼出勤だ。

前もって璃紗には「明日は弁当いらない」と伝えてあったし、朝食もスキップ。昼は通勤途中でコンビニおにぎりでも買えばいい。
テレビをぼんやり眺めていた俺のもとに、璃紗がやってきた。

「スーパーに行ってきます。馨も連れていきますね」

そう言い残してアパートを出ていった。
――よし、チャンス到来。
今こそ、あの気になっている召喚キャラを呼ぶときだ。

俺はメダルを手に取る。デイリーガチャで当てたフェアリー。童顔系の美少女、ちょっとキツめな顔立ちがそそる。
期待を込めて召喚すると――
「ご主人様、ご用事はなあに？」
出てきたのは、透明な羽根を背負った子供。しかも、見た目はどう見ても小学五、六年生ぐらい。
……あ、これ駄目だわ……
たしかに顔は整ってるし、上目遣いもあざとい。でも、俺の好みはもう少し年上なんだよ。せめて高校生ぐらいの見た目じゃないと。
「その……今日はやめとこうか」
「どうして？　私じゃダメなんですか？」
「えーと……キミ、名前は？」
「お好きに呼んでくださいっ！」
「じゃあ、ハネ……ネネって呼ぶわ。ネネはまだ子供だろ。俺はもうちょっと大人っぽい子が好きなんだよ」
「ネネは２０歳ですっ！　法律的にも大丈夫です！」
「じゃあマイナンバーカード見せてくれ」
即座に渡されたカードを見ると――
生年月日：２００８年１０月１０日
「……１０歳じゃねえか！」
ネネはカードをまじまじと見つめ、口をぱくぱく動かした。
「なんで……？」
「嘘つくなっての」
「本当に２０歳なんだってば。だからエッチもＯＫなんだってば」
「ま、２０歳でもその容姿の子を相手にすることはないけどね」
「……そうね、さすがに親子でエッチはまずいもんね。パパ」
「……は？」
「私の名前、守谷ネネ。生年月日的にも、状況的にも、親子だよね？」
カードの苗字も住所も俺と一致。つまり、ネネは『俺の娘』を自称してきたわけで――
「パパじゃなくて『お父さん』にしろ。パパとか言うな、パパ活みたいで紛らわしい！」
「はいはい、お父さん」
俺にべったり抱きついてくるネネ。その感触が……いろいろ密着してるのも、絶対わざとだな。
……まったく、こういうのに弱いと思うなよ……
俺は冷静に、ネネの頭を撫でてやった。
「おこちゃまには興味ないんでね」
「むぐぅっ……！」
ネネは悔しそうに唇をかみ、睨みつけてきた。
――が、俺はさらなる仕打ちを準備していた。
「ネネ、その羽根、どうにか畳めないか？」
「え？　ああ、畳むだけならできるよ」
ネネは背中の羽根を器用に重ねて隠すと、俺に振り返った。
「ね？　これなら目立たないでしょ？」
「おお……まるで、ゴキブリの羽根だな」
「ぎゃああ！　失礼すぎるっ！　せめて薄翅蜉蝣って言って！」
「うすらバカ野郎？」
「うすばかげろう！　もうっ！　お父さんのバカー！」
ネネの慌てっぷりが面白くて、俺はつい笑ってしまった。
俺はネネにデイリーガチャで出たＴシャツを渡した。
それを着たネネは、見た目ワンピース状態。サイズ自動調整機能が付いてるからぴったりフィットするはずなんだが、ネネのサイズが小さすぎて、だぼだぼになってる。
羽根は隠れたし、いいだろう。
「行くぞ、ネネ」
「うう……お父さんの意地悪……」
文句を言いつつも、ネネは俺の手を握ってきた。

向かった先のファミレスの店先に、すでに璃紗と馨がいた。馨は「ちょっと調べたいことがある」と言って一人で商店街に戻っていった。

店内に入ると「3人ですか？」と店員に案内され、四人席へ。

「モーニング2つと……お子様ランチ、ひとつ」

「キッズプレートですね。対象は小学生までですが……？」

「大丈夫。五年生ですから。れっきとした小学生です」

「……承知いたしました」

ネネは下を向いて顔を赤らめていた。たぶんシステムから「高学年は普通お子様ランチを頼まない」と教えられたんだろう。

運ばれてきたお子様ランチは――璃紗が食べた。

じっくりと眺め、写真を撮るような目つきで確認し、ゆっくりと口に運ぶ。大満足、といった顔をしていた。

璃紗が喜んでくれたなら、それでいい。

――璃紗が幸せなら、俺も幸せだ。

一方でネネは……。

「暑い～」

そう言いながら、Tシャツの襟元を引っ張って胸をちらちら。さらには俺の太ももに手を置いてきたり。

……ふふん、その程度で動じる俺じゃねえよ……

ネネの『無駄な挑発』は、アパートに戻ってからも続いた。

……だが、俺は最後まで手を出さなかった。

まあ、多少ムラッとはきたけど。

で、ネネが消えたあと、呼び出したのは馨だった。

馨は優しくて、柔らかくて、すごく気持ちよかった。

二回戦にいきたかったが、電車の運転再開で出勤せざるを得なくなったのがちょっとだけ、惜しかった。

◎行けなかった社員旅行　２０１９年１０月

9月に続き、またもや台風が日本列島に牙をむいた。しかも今度の相手はなかなかの強敵で、関東直撃コース。土曜日の朝から交通網はグダグダで、都内は騒然としていた。

……が、よりによって、今回の運休は土曜日。平日ならまたサボれたのに。

台風の被害は大きくて、ニュースでは熱海のホテルが被害を受けた話が流れていた。窓ガラスが粉々になって、けが人も出たらしい。俺の実家はどうやら無事だったようで、ほっと胸をなでおろした。

音羽からは「攻矢兄ちゃん、台風コワイヨ」というメッセージが来たので、「安心しろ、俺が守ってやる」と適当に返してやった。

――まあ、メッセージだけは勇ましい。でも実際には、部屋でポシェット抱えてガチャ回す男である。

さて、本題。10月18日からは会社の社員旅行が予定されていた。行き先は石和温泉、いかにも中小企業のセレクトだが、旅費は会社持ち。これはもう、行くしかない。温泉でタダ酒を……なんて、勝手な妄想をしていたのだが。

「はいはい、そううまくは問屋が卸しません」

現場でトラブルが発生した。システム障害、それも現場のチームが担当している部分で。直接の原因は俺じゃない。俺じゃないが、当事者扱いされるのはお約束。

現場の手塚課長に「明後日から社員旅行なんで」と伝えたが、即座に「どうにかならないか」と返ってきた。まあ、わかってた。

追い打ちをかけるように、例の体育会系課長が俺の席までやって来て、満面の笑みでこう言った。

「今回は協力してやってくれよ、なっ！」

……はい、詰んだ。

とはいえ、いつも助けられてるし、ここは義理を返す場面でもある。

俺は苦笑しながら言った。

「じゃあ、今回は貸しってことでお願いします」

だが、皮肉なことに、人間万事塞翁が馬――とはよく言ったものだ。

旅行初日の朝、社員旅行バスが中央道で事故に巻き込まれた。後ろから追突されて、横転しかけたバスに、さらにトラックが追突。後部座席

で酒盛りしていた重役連中がドミノのように吹っ飛ばされ、社長が足首を捻挫、専務が腰をやり、他数名が軽いむち打ち。

「あぶねえ……まじで行かなくてよかった……」

俺は祈るような気持ちで、ニュース速報をチェックしたが、テレビも新聞も千葉の台風被害一色。社員旅行バス事故なんて記事にはならなかったらしい。山梨の地方紙にちょっと載ったらしいけど。

翌日、現場に状況報告をしに来た体育会系課長からその話を聞いたとき、さすがに表情がひきつった。

「お前、マジで命拾いしたな……」

そういうあんたも現地にいたくせに……なんて思いながら、俺はそっと目をそらした。

ちなみに、現場の障害対応は木曜夜にはどうにか収束。損害額は俺の年収の4年分で済んだそうだ。うん、それで済んだって感覚が恐ろしい。渡辺部長と手塚課長は、監督省庁に謝罪しに行くことになり、蒼白な顔をしていた。気の毒に。

ところが、災難はまだ終わらなかった。

週末、俺は圭子さんに呼び出され、なぜか社長と専務が入院している病院へ向かった。そして、なぜか璃紗も一緒だ。「璃紗さんも連れてきて」と指定されたからだ。

病室に入ってみれば、社長も専務も元気そのもの。ベッドの上でテレビ見ながら談笑してるじゃねぇか。

「保険金狙いの仮病だろ、これ……」

そうつぶやいたら、社長が苦笑いしていた。

そんな中で本題が始まる。圭子さんが真剣な表情で口を開いた。

「守谷君、分社化の話、知ってるわよね？」

「なんですか、それ？」

「璃紗さんは知ってるわよね？」

「はい」

「……え、なんで俺が知らなくて璃紗が知ってるの？」

突っ込まずにはいられない。「怪我をした社長の代理」として、俺にその分社化プロジェクトを手伝って欲しいらしい。意味がわからない。

「いやいや、俺、社長の代理とか無理ですよ！？　レベル1の村人に、いきなりラスボス倒してこいって言ってるようなもんでしょ！？」

「璃紗さんがサポートするから大丈夫よ。ね？」

「……はい、攻矢さんがやるなら、私も全力で支えます」

うん、璃紗の目は本気だ。これは逃げられないやつだ。

結局、俺は「社長代理」として月2万円の手当て付きで分社化業務を担当することになった。璃紗と一緒なら、まあ悪くない。

いままでの業務も行うけどそっちは半工数、分社化も半工数。半分ぐらいならどうにかなる……かな？

だが、圭子さんの暴走はそこで止まらなかった。

「ところで二人はいつ結婚するの？　保証人なら私がなるわよ」

「いや、えっと、近いうちに、とは思ってるんですけどね」

「近いうちって、いつ？　男って、ほんと煮え切らないんだから！」

そう言って圭子さんはスケジュール帳を広げた。

「次の金曜日が大安だからその日に結婚しなさい。月曜に婚姻届、持ってくるのよ。ランチしながら話すわよ」

「いや、ちょ、ちょっと待ってくださいよ。結婚はそんな風に勢いでするもんじゃないでしょ！」

「結婚なんて勢いよ、勢い！」

こうして、俺たちは――特に俺は、圭子さんの勢いに押される形で、ついに結婚することになった。

翌日、璃紗はどこから手に入れたのか婚姻届を手渡してきた。妻欄には、もうしっかりと名前が書かれていた。

金曜日。櫻井璃紗は守谷璃紗になった。

ちなみにこの日、俺は給料日だったが――課金ガチャは回さなかった。

デリカシーって、たまには大事だからね。

ちなみにガチャの当たりは邪系キャラばかりだった。それも回さなかった理由のひとつ……かもしれない。

◎馨の就職　２０１９年１１月

１１月１日――ガチャ的には「ワンワンワンの日」らしい。

犬にちなんだイベントということで、ガチャの召喚キャラは犬人種が中心。残念ながらコンプはならなかったけれど、制服風衣装（茶）と（灰）の男女セットを入手できたのは収穫だった。

さっそく今度、璃紗に着てもらおうと思ってる。きっと似合うだろうな……ふふ。

さて、ここ最近、馨との距離もいい感じだ。

月に３、４回は……うん、まぁ、そういう関係だ。誘うのは基本、俺のほう。でもたまに、馨の方から甘えてくると、どうしても心がふわっとなる。馨はかわいい。

そんな馨が、今日は珍しく真面目な顔で俺の正面に立っていた。

いつもは璃紗がいない隙を見計らって隣にちょこんと座ってくるくせに、今日は璃紗がいるのに、ずっと立ったまま。妙にかしこまってる。嫌な予感しかしない。

「……どうした？」

「えっと、あの……攻矢お兄ちゃんに、お願いがあって」

その言い回し……これは、もしや……金の話か？

馨も璃紗も、基本的に俺に負担をかけないようにしてくれている。小遣も月１万円、二人合わせて、だ。

まさか、馨の分がちゃんと渡ってなかったとか……？　璃紗がガメてるとは思わないけど。

「えっと……僕、学校に行きたくて」

「が、学、校？　……って、高校か？　いや、馨の歳なら大学……なのか？」

「はい、大学です。医学部に行きたいんです」

「医学部！？」

思わずコケそうになった。いや、待て待て、無理だ。それはさすがに無理だ。

社長代理手当が月に２万円入る予定ではあるけど、それで医学部の学費を出せるはずがない。出したら生活が破綻する。

「い、いくらぐらいするんだ、学費……って、ごめん、馨。医学部の学費は、俺には出せない。マジで、無理だ」

そのぐらい、今までの生活見てりゃ分かるだろ。俺は庶民中の庶民、むしろ貧乏寄りだぞ。

「そうじゃなくて。学費は僕が働いて貯めます。攻矢お兄ちゃんにお願いしたいのは、働くことと、学校に行くことの許可です」

「えっ……お、お前、自分で学費を？」

「国立なら、卒業までに５００万円くらいで済むって、システムに教えてもらいました」

しれっと言ってのけたが、普通の人間が５００万貯めるには何年かかると思ってんだ。

……っていうか、「国立の医学部に入る気か？」って、ああ、そっか。あいつら、システムにアクセスできるんだった。システム補正があれば、入試なんて満点か。

「馨はなぜ医学部に行きたいのですか？」

ここで、璃紗が静かに会話に割って入ってくる。

「この世界では、医師じゃないと治療行為ができないからです」

「なぜ治療したいのですか？」

「僕は聖魔法士だから。この世界にはモンスターはいないけど、治療行為を通じて、スキルのレベルを上げられるって、システムが言ってたから」

「馨の今の聖魔法レベルは？」

「２です」

会話が終わると同時に、璃紗が顎に手を当てて小さく考え込む。

きっと今、システムから情報を引き出してるんだろう。

そして数秒後、璃紗はゆっくりと口を開いた。

「つまり、馨の本当の望みは『医学部進学』ではなく、『聖魔法レベルの向上』なのですね？」

「はい」

「では、介護施設での勤務を勧めます。高齢者ケアを行いながら、こっそりと聖魔法を使って修練すればいいでしょう」

「……それって、違法じゃない？」

「いいえ。利用者の回復を目的としたケアは、職員の職責の一環です」
うーん……やっぱり璃紗、賢い。いや、賢すぎる。優秀すぎて、最近ちょっと劣等感すら湧いてくるよ、ほんと。
「わかりました。じゃあ、僕、介護施設で働きます」
「適切な年齢になれば、医師免許もシステム経由で何とかなるかもしれません。ですが、今は介護職員初任者研修の取得を最優先に。私が手伝っている攻矢さんの業務は人材派遣。介護職の案件も豊富です。資格を取ったら、いい就職先を紹介します」
「……じゃあ、お願いします。攻矢お兄ちゃん、いい？」
「もちろん。大歓迎だ」
よかった。本当に、馨は良い子だ。
そうして馨は、翌週から近所のマッサージ店で週２回のアルバイトを始めた。
それは介護施設への就職までの『つなぎ』だ。そして、すぐに介護職員初任者研修の講習にも申し込んだ。
しかも、ハローワークを利用して、講習費はゼロ。さらには失業保険までしっかり申請している。
まさにシステムの恩恵、ここに極まれり。俺もそのアクセス権が欲しい……切実に。
数日後、俺はアパートで「制服（灰）」を着た璃紗と、「ビジネススーツ」を着た璃紗をそれぞれ堪能した。
制服の璃紗は、ものすごくかわいかった。
スーツの璃紗は、めちゃくちゃ美しかった。
……やっぱり、璃紗、最高だ。
◎工房イベント　２０１９年１１月
勤労感謝の日を挟んだ今週は、工房イベントが開催中。
イベントガチャの目玉は、ついに実装された新職「技士」――アイテム作成に特化した職種で、鍛冶や裁縫、調合や調理などの生産活動が中心だ。
そして今回のガチャ、どうやら小人種との相性が良いらしい。
召喚キャラのラインナップには、ノーム、ドワーフ、ブラウニー、レプラコーン、インプといった小人キャラが勢ぞろいしていた。
なるほど。童話に出てくる『七人の小人』や『靴屋の妖精』が職人系だったのは、伊達じゃなかったらしい。
そういえば、俺もシステム屋――職人っちゃ職人だ。ちょっとだけ技士にシンパシーを感じてしまうのは、まぁ、しょうがないよな。
それに、小人キャラって見た目が子供っぽいことが多い。
つまり、璃紗お気に入りの「お子様ランチ」を注文するには、実に都合がいい。
……というのも、だ。
ファミレスのお子様ランチ以来、璃紗の『お子様ランチ熱』は上昇の一途をたどっている。
今では俺たち三人の朝食が、もっぱら『自作お子様ランチ』になっている始末だ。
ハンバーグ、ナポリタン、旗つきチキンライスにタコさんウィンナー……。朝からそのラインナップはどうなんだ、と思いつつ、璃紗の嬉しそうな顔を見ると、まあ、それも悪くないかと思ってしまう自分がいる。
――そんな訳で、今回はガチャも大盤振る舞い。
給料日前だったが、今月から支給されるはずの「社長代理手当」もあるし、思いきってガチャを１００回まわしてみた。
結果は――大当たりだ。
召喚キャラだけで女性が４０人以上出た。これだけいれば、しばらくは困らない。
中には人間女性も１２人いて、性格的にも扱いやすそうなキャラが何人か。これだけいれば数か月は持つ。
さらに、召喚キャラ以外にも面白いアイテムがいくつか手に入った。
延長石に加え、鍛冶・裁縫・調合・調理用の中級と高級道具が一式。
そして「工房セット」なるカプセルアイテムがひとつ。それと染色剤が１２個。
この「染色剤」ってやつがなかなか便利で、試しに俺のパステルイエローのマジックバッグ（ポシェット）を濃い茶色に染めてみたら……
おお、意外と悪くない。ようやく『女子向けポーチ』感が薄れて、俺が持っても違和感のない見た目になった。

……まあ、それでも直接肩にかける気にはなれないから、今まで通りカバンに放り込んで使うけど。

一方、気になる「工房セット」の中身はというと……

どうやら亜空間に繋がる『工房専用の扉』らしい。

開けばそこに鍛冶炉や調理釜、大きな作業台などが一通り揃っているというシロモノだ。

扉だけど、それでも今このアパートで開けたら置き場所に困る。確実に。

だから、今のところ『未開封』。

道具類も同様。開けたら片付けが面倒そうだし、なんかこう、色々怖い。

……ということで、詳しい仕様を確認するために、チュートリアルキャラにでも聞こうと思って、ノームのメダルを選んだんだけど――

つい、「可愛い顔に惹かれて人間種のメダルをトスしてしまった。

で、召喚されたのが……

金髪ショートカットのガチヤンキー系女子、だった。

ニッカボッカにヘルメット、肩には金槌を担ぎ、こっちを睨みつけてくるその姿――いや、これはこれでアリかもしれない。

見た目だけなら、むしろ好みかも。なにより、すごく『気合い』を感じる。

結果？　当然、チュートリアルの話は最初の数分だけで、それ以降は『実技指導』に移行した。

でも、ちゃんと話はした。最初の数分は。

彼女曰く、アイテムを作るには最低限、次の三要素が必要とのこと。

素材（インゴット、布、薬草など）

設備（鍛冶炉、調理釜など）

道具（金槌、針、すり鉢など）

工房は、これらの設備や初級道具が最初から揃った亜空間工房だという。道具のランクによって完成品の品質が変わるらしく、当然、高級道具ほど良いものが作れる確率が高い。

品質は「伝説級、高級、中級、低級、失敗」の五段階。

「初級道具だと高級以上はほぼ出ない」と彼女は断言した。

なるほど……って、でも素材が手元にないんだよな。

「素材ならモンスターを倒せばドロップするだろ？」

「モンスターって、どこにいるんだ？」

「……え？　えぇ？　ご主人様、まさかモンスターを倒してないの？　嘘でしょ？　世の中、戦ってなんぼなんだよ！　モンスター狩って！　素材集めて！　アイテム作って！　強くなって！　それが人生じゃん！」

いや、人生じゃないし、そもそもここ、夢幻の国じゃないから。

「この世界にはモンスターいないぞ」

「……は？　いないの？　まじで？」

彼女はしばらく固まってから、ブツブツ呟きながら情報をシステムから再取得していた。

その結果――どうやら素材は、現実世界の手芸店や薬局、アウトドアショップなどでも購入可能とのこと。つまり、アイテム生成自体は『現実素材』でもいけるらしい。

「ご主人様、何作りたいの？」

「うーん……モテモテになる魔法のアイテムとか？　あと、大容量のマジックバッグとか」

「欲望に忠実すぎんだろ！」

そう言いながらも、彼女はメニューを開いて素材を調べてくれた。

曰く、

・大容量マジックバッグは空間魔法を持つモンスターの革と、空間魔法士の召喚メダルが必要。

・モテアイテムとしては、魅力値の高いキャラの召喚メダルと、質のいい金属素材を使って『魅力ステータス付きアクセサリ』を作るのが効果的らしい。

「ま、アタイの魅力値程度じゃあ期待薄だけど？」

「何を言ってるんだよ。今まで呼んだ中で一番キレイで可愛いよ、お前」

「な、ななっ……な、なに言ってんの、ば、ばか……ご主人様のくせに……ッ！」

……あれ？　もしかしてこのヤンキー、チョロいかもしれない。

◎チュートリアルフィールド　２０１９年１２月

最近実装された「技士」職――その導入が、ただのマイナーチェンジじゃなかったことは、チュートリアルモードの璃紗からの説明でよく分かった。

アイテムクラフト。

それは鍛冶・裁縫・調合・調理、四つの系統に分かれた『モノづくり』の技だ。

技士でなくてもクラフトは可能だが、当然、成功率や完成品の品質には職業補正がかかるらしい。

でもまあ、「剣士だからモノが作れない」とか「魔法士だから料理できない」なんて制限はない。

職業は『適正』であって『制限』じゃないってことだな。

で、クラフトに必要なのは――素材、道具、そして作業場。

これはヤンキーからも聞いていた内容だ。

ただし、璃紗曰く、『工房セット』や『ガチャの道具』が必須なわけじゃない。

現実世界の設備や道具でも、ある程度の条件を満たしていればクラフト可能。

もちろんガチャの道具や工房の方が品質面では圧倒的に有利だけど、「ガチャじゃないと何もできません」って縛りじゃないのはありがたい。

たとえば――

銀の指輪を作るなら、本来は銀のインゴットと鍛冶道具、炉が必要になる。

だけど、現実世界にある『銀粘土』とガスコンロを使えば、形を作って火にかけるだけでシルバーリングが完成する。

実に合理的というか、地に足のついたシステムだ。

クラフトって、思っていたより自由度が高いのかもしれない。

……ただし、それを『極めたい』と思ったら、話は別だ。

高性能なアイテムを作りたいなら、必要素材や道具の選定はもちろん、アイテムの構成パターン、いわゆる『レシピ』を自力で開拓していく必要がある。

璃紗が言うには、「公式レシピ」以外にも、類似素材や組み合わせによる『アレンジレシピ』が無数に存在しているらしい。

それを成功させると、アイテムに特殊効果が付いたり、基礎ステータスが強化されたりするんだとか。

――とはいえ、問題もある。

アイテム作成に失敗すれば、素材はすべて失われる。

成功したところで、性能アップはたった数％程度の微強化にとどまる。

つまり、めちゃくちゃリスクが高いくせに、リターンは地味。

だから、普通に考えたらそんなギャンブルは誰もやらない。

高性能アイテムを作る人ほど、安全確実な『定番レシピ』に固執していく――

……そんな閉塞感を打破するために、運営が用意したのが――

「チュートリアルフィールド」

これが、今回のアップデートのもう一つの目玉だった。

チュートリアルフィールドは、訓練所にいるＮＰＣやチュートリアルモードのキャラに依頼すれば展開してもらえる。

そこでは、現実世界では到底揃えられないような設備や素材、道具を使い放題でクラフトの練習ができるのだ。

具体的には――

・全素材、全設備、全道具が揃っている

・道具の等級も初級～高級まで自由に選べる

・完成アイテムの持ち出しは不可

つまり、練習用の仮想空間ってわけだ。

……ちなみに、『持ち出せない』って点を除けば、まさに夢の工房だ。

素材コストがかからないから、いくらでもレシピを試せるし、組み合わせの検証にももってこい。

で、チュートリアルフィールドの活用方法は、クラフトだけに留まらない。

そこでは全武器・全魔法が使え、全敵との模擬戦が可能だ。
いわば、トレーニングルームと研究所を兼ねた万能な場所。
モンスターとの戦いでも、負傷や死亡リスクはゼロ。
つまり、負けてもノーリスクで再挑戦できる。チート級の訓練環境ってわけだ。
ただし、当然ながら現実の世界に戻れば、未修得の魔法は使えない、アイテムも持ち出せない。経験値も得られない――経験値って何だ？
あくまで『練習用』の空間であり、戦力強化の近道という訳ではない。地道な努力が前提だ。

……でも、俺にはちょっとした狙いがある。
チュートリアルフィールドでなら、魔法が自由に使える。

――とりあえず最初は雑魚キャラで有名なスライムと対戦してみた。
でも忘れてた。
スライムは精神崩壊キャラだ。人間やめるレベルの存在だった。

次はエルフとのバトル。前回の屈辱を晴らそうと思ったが、返り討ちにされた。
「わたくしのほうが上」とでも言いたげなあの見下し顔。あー、腹立つ。
それでも、試しに『伝説級の魔法杖』と『伝説魔法』を使ったら……
さすがに勝てた。
でも、それって俺の実力じゃないよな。借り物の火力で勝っても、達成感は薄い。

今のお気に入りは虫系モンスターだ。罪悪感が一番少ない。人型を攻撃するのってちょっと――
今のところ、働き蟻ぐらいにしか安定して勝てない俺だけど、いつかはエルフ相手に、己の魔力で一矢報いたい。

そう強く思いながら、今日もまた――
「璃紗、チュートリアルフィールドの展開、お願いできる？」
「かしこまりました、攻矢さん」
そんなやりとりを交わして、俺は『仮想の世界』に潜る。

本気で強くなりたい――たとえ理由が、ちょっと意地っ張りで、ちょっと情けなくても。

翌週の日曜日。俺は池袋に足を運んでいた。
目的は明確――クラフトセットの購入だ。
シルバーとイエローゴールドのクラフトキット。
そこそこ高かったけど、悩む暇なんてなかった。なぜなら……。
「作成アイテムリストに、ペアリングとマリッジリングがあるんだよ」
ペアリングは、ペアで装備すれば相手のステータスの1％が加算されるというアイテム。
マリッジリングはさらに上位で、3％加算。
エンゲージリングも存在していて、そっちは2％加算。

ただし、それら3つを同時装備することはできない。
「ペア＋マリッジ」または「ペア＋エンゲージ」、どちらかのパターンのみ装備可。
最大で5％アップ、というわけだ。
結婚相手は一人だけ。恋人も一人だけ――不倫も可。ってことなのか？

――で、俺はさっそくクラフトに挑戦してみた。
最初のペアリング制作は……失敗。
銀粘土も時間も、煙のように消えた。これがクラフトの洗礼ってやつだ。

でも、めげずに再挑戦。
二度目は成功。おまけに「聖魔法＋1」というボーナス付きの効果がついていた。やったね。

マリッジリングは一発成功。
こちらは「知力＋3」のボーナスがついていて、なかなかの高性能。

ペアリングは馨とペアで。右手薬指に、さりげなく着けている。
そっと視線を合わせた馨が、少し照れたように微笑んだ。
そしてマリッジリングは――当然、璃紗とおそろい。
左の薬指に、お互いの指輪が静かに光っている。

見た目は普通のリングだけど、確かに『絆』ってやつが形になった気がした。

……俺自身は自分のステータスを確認できない。
でも、あれだけの効果があるなら、多少は強くなっているはずだ。たぶん。いや、きっと。
ちょっとだけでも強くなれたなら――
次に挑む時には、もう少しマシな戦いができるかもしれない。
エルフ相手でも、堂々と胸を張っていられるように。
たとえ未熟でも、不器用でも、少しずつ前に進んでいこう。
魔法も、クラフトも、そして人との絆も――
この世界で、俺にできるすべてを積み重ねていきたい。

◎正月帰省　２０２０年１月

年末年始くらい、家でのんびりしたかった――正直なところ、それが俺の本音だった。
お盆に帰省したばかりだし、今は新会社の立ち上げ準備で、なにかと忙しい時期でもある。
だから、今年の正月はパスしようと思っていたのだが……。
「攻矢お兄ちゃん、おじいちゃんのとこに行きたい」
馨がぽつりと呟いた、そのひと言で計画は一変した。
理由は聞かなかった。というか、馨のあの目で見つめられたら断れなかった。
まあ、たまには家族の顔を見るのも悪くない。そう思い直して、帰省を決意したわけだが――
うん、電車代が地味に痛い。
そしてお年玉の出費も……藍奈と舜矢の分、忘れてはいけない。
やれやれ、財布の中は一気に寒波が到来する。
年末の伊豆は相変わらずののどかさで、のんびりした空気が心地よい。
離れのリフォームは既に終わっており、親父とお袋はそちらに移っていた。
ちらりと中を見せてもらったが、バリアフリーで広々とした造りになっており、まさに「年寄り仕様」。
これなら老後も安心だろう。
……馨はその離れに入り浸りだった。
親父とお袋の話をニコニコしながら聞いている姿は、正直、微笑ましいというより、ちょっと不思議なくらいだった。
年寄りの話って、普通の若者は退屈がって聞かないもんだけどな。
璃紗はと言えば、姉さんと一緒に台所にこもり、おせち作りに夢中になっていた。
彼女は何か新しいものに触れるのが本当に好きだ。
お袋も、「璃紗も守谷の嫁になったんだから、うちの味を覚えてもらわないとね」などと、時代錯誤なセリフを平然と口にしていたが――
「……あら、この田作り、美味しいわ。次からうちもこうしようかしら」
言ってることがコロコロ変わるあたり、まあ、お袋らしいというべきか。
俺はというと、仏間にノートパソコンを持ち込み、いわゆる「在宅勤務」中。
もちろん本当は休みたい。でも、今は本社での業務が佳境で、サボると後が怖い。
それに、年末年始の勤務は残業代が地味に美味しい。帰省費用の足しにもなる。
ちなみに、俺の「社長代理」の肩書きはまだ続いている。
社長は怪我の後処理だの、引き継ぎだの――とか言ってるが、要は面倒ごとを俺に押しつけてるだけだ。
でもまあ、月２万円の手当て付きだし、最近はなんだかんだで楽しくなってきた。
新会社の創立は４月１日。それまでは、もう少しだけお付き合いしてやろう。
ところで、去年のクリスマスにリベンジを誓ったミニスカサンタだが――
今年はなんと、１回目で出た。運気が上がっている気がする。
いや、璃紗の「運＋３％」と馨の「運＋１％」が加算されているおかげかもしれないな。
召喚キャラだけでなく衣装のミニスカサンタもすぐに出た。
イブの夜、璃紗にそのミニスカサンタを着てもらったのだが……
――正直、昇天するかと思った。
あれはもう武器だ。可愛さという名の凶器だ。
年末にかけては、ガチャは控えめ。仕事が忙しかったし、在宅でこなすべきタスクも多かった。

でも、以前の俺なら投げ出していた事務作業も、今は面白く感じる。
やればやるほど、知識や技術が身につくという実感があるのだ。
思えば、璃紗と結婚してから、俺はずいぶん変わった。
彼女は、まさに俺にとっての「幸福の女神」なのかもしれない。
そして大晦日――
家族全員で年越し蕎麦を食べ、歌合戦を見て、年が明けた。
……と、思ったら元旦の朝6時前。
布団の中でぬくぬくしていた俺を、音羽が容赦なく叩き起こした。
「攻矢兄ちゃん、初日の出見に行こうよ！　璃紗さんも行こー！」
「……なあ、お前、２０代後半で男の寝室に突入とか、常識的にどうかと思うぞ」
「いーじゃん。昔はよく起こしに来たじゃん。それと一緒だって」
……いや、全然違うだろう。
今の俺は既婚者だぞ。新婚なんだぞ。新妻に対する配慮はないのか。
「璃紗さんにもちゃんと声かけたし、馨ちゃんにも確認したもん」
と、開き直る音羽。……お前ってやつは。
結局、音羽の車に乗せられて初詣に向かうことに。
助手席に璃紗、後部座席に俺と馨。
軽自動車に4人は、正直ちょっと窮屈だ。
海に向かう途中、地元の小さな神社・音無神社に立ち寄る。
朝6時。参拝客は皆無だった。
けど、それが逆に厳かで良い雰囲気だった。
璃紗と馨も、俺と音羽の見よう見まねで参拝をこなしていた。
西洋系の美貌を持つ璃紗が、静かに手を合わせている姿は――まるで森の精霊のようで、見惚れてしまった。
「和服着せたら映えそうだな……」
俺は小声でそう呟いた。
海岸に着いた頃、空は曇天で、肝心の日の出は拝めなかった。
車に戻ってエンジンをかけたそのとき、雲の切れ間から一瞬だけ光が差し込んだ。
「……まあ、あれで『見た』ってことでいいか」
璃紗と馨が嬉しそうにしていた。それで十分だった。
元旦の朝は、仏間に家族全員集合。
嫁に出た姉貴は不在だったが、代わりに璃紗と馨、そしてなぜか音羽も加わって、にぎやかな正月になった。
お屠蘇を飲んで、雑煮を食べ、藍奈と舜矢にお年玉を渡す。
目を輝かせる姪っ子と甥っ子を見るたび、心の中で「そんなに入ってねぇぞ」とつぶやく俺。
一方で、音羽が「私にもお年玉くれよ～」とぬかしたので――
「お前にはこれだ」と、遠慮なくゲンコツをくれてやった。
そして、俺が密かに夢見ていた璃紗の和装姿は――意外な形で叶った。
お袋が自分の着物を持ち出して、「ちょっと璃紗さんに着せてみようか」と言い出したのだ。
結果、璃紗は――
それはもう、言葉を失うほどの美しさだった。
鶴の小紋に包まれた彼女は、まるで新年の女神。幻想の存在のように映っていた。
……ただし、その直後に姉貴一家が到着したため、残念ながら「ああれええ」は封印された。
その夜、イベントガチャを開いた俺は、思わず目を見開いた。
「……おお、マジか。巫女服と和服、期間限定で出てるじゃん！」
ガチャに課金する理由が、また一つ増えた。
◎小人召喚　２０２０年２月
世の中が新型肺炎でピリピリしている中、外出すらも気を遣う日々が続いていた。

休日なのにどこかに出かける気にもなれず、自然と俺はアパートに閉じこもる。とはいえ、やることが限られている。こうなれば、久々の「召喚祭り」でも開催するしかないじゃないか。

年末年始のドタバタが終わったかと思えば、新会社の準備と新人教育で、ここしばらくはガチャも控え気味だった。その間に、和服衣装もゲットしたってのに――忙しくて、肝心の「ああれええ」すらできていない始末だ。

そう、年が明けてから、実のところ一度も召喚していなかったのだ。璃紗や馨とは相変わらず仲良くやってるが、それでもメダルはどんどん溜まっていく。使わなきゃもったいない。

「さて、まずはノームからいくか」

ノームは、背が低いが見た目は成人女性そのもの。メダルに描かれた妖艶な雰囲気から、勝手に「ノノさん」と名付けて召喚してみたら、予想以上に大人なオーラを放つ美人お姉さんが現れた。

朝からノノさんとたっぷり濃密な時間を過ごし、ふと気づけば腹の虫が主張を始めていた。

「飯、食うか……」

というわけで、アイテム作成の素材調達も兼ねて池袋へ出ることに。馨はバイトだったので、同行者は璃紗ひとり。

そして当然、昼食を外で取るなら――召喚するのは『お子様ランチ要員』

つまり、外見年少キャラに限る。デパートのトイレでそれらしいメダルを一枚、慎重に選んでトス。

出てきたのは、座敷童子風の男の子。ブラウニー種。見た目はどう見ても幼稚園の年長組で、ちょっとキョトンとした顔が妙にツボだった。

池袋のデパートのお子様ランチ制限は9歳まで。これがフェアリーのネネだったら年齢オーバーでお子様ランチが頼めなかったけど、ブラウニーなら問題なし。うん、ナイス選択。

とはいえ――

「高いな……」

オーダーしたお子様ランチ、璃紗が頼んだプリンアラモード、俺のアイスカフェオレ。合計金額を見た瞬間、さすがに目が泳いだ。

食べたのも、俺とブラウニーは端っこでちょこっと味見した程度。あとは璃紗がぜんぶペロリ。

まあ、璃紗が楽しそうだったからよしとしよう。

ブラウニーは、素材入手で訪れたクラフトショップの階段を降りている途中でふっと姿を消した。誰かに見られたかもしれないな……今後、召喚時間はもう少し意識した方がいいかもしれない。

帰宅後、素材の整理を終えて次に呼び出したのは女ドワーフ。

ラノベやゲームでは、ドワーフの女性には2パターンが存在する――髭ありのガチ職人型か、ロリっぽい美少女型か。メダル絵の雰囲気から予想していた通り、現れたのは後者。

身長は小柄だけど、幼さはあまりない。どちらかというと、小柄な年上のお姉さんという感じだ。

念のためマイナンバーカードを確認すると、年齢は堂々の22歳。これは問題なしだな。

一通り堪能したあと、アクセサリー制作を頼んだところ――さすが本職、あっという間にクオリティの高いシルバーネックレスを2本仕上げてくれた。

一つは「幸運＋10、魅力＋15」。もう一つは「幸運＋20、魅力＋5」

魅力値15なんて、俺がつけたらますますイケメンになってしまうじゃないか（気のせい）。

「魅力＋5のほうは……まあ、半田にでもやるか。あいつイケメンだし、そんなに魅力要らんだろ」

そんなことを口にしながら、気分が乗った俺は二時間延長石を使って、二回戦を満喫した。満足。

翌朝のターンはレプラコーン。

そばかす&赤巻き毛の彼女は、小柄な体に真緑の服・帽子・靴と、見事なまでに統一されたセンス（？）を披露していた。

「アクセサリーならミサンガが作れるよ」
レプラコーン曰く、裁縫士として布系の扱いが得意らしい。
まだ押し入れに馨がいたので、材料の刺繍糸を買ってきてもらうことに。２０００円を渡すと、帰ってきた馨は百均の袋を山ほど抱えていた。１２色入りの糸が一束１００円らしい。やっす。
レプラコーンが消えるまでの時間で、彼女に教わりながら俺と馨でミサンガ作りに挑戦。
俺は途中で失敗し、馨はレプラコーン消失から１５分後に完成。差がついてるな……。
レプラコーンのミサンガは「防御＋１、器用＋１０」、馨のは「防御＋２」。自然に切れると、その１０％が恒久的にステータスに加算されるらしい。
「ってことは、馨の防御＋２は……０？　それとも１？」
「それはシステムの制限でお答えできません」
……そんなとこまで秘密なのか。
午後は女の子と遊ぶのはお休み。代わりに男性裁縫士を呼び出して、チュートリアルフィールドでみっちりとミサンガ作りの指導を受けた。
現実世界と同じ条件――つまり「工房なし」「道具なし」「百均糸」でチャレンジしたが、成功したのは１本だけ。２回失敗して、３回目にようやく完成。
簡単な作り方だったけど、こんなにも難しいとは……。
まあ、今日は初日。焦らず、地道に上達していこうじゃないか。
◎新会社と璃紗の魔法　２０２０年３月
ここ最近――俺の趣味に「ミサンガ作り」が加わった。
え？　ミサンガ？　あの願いが叶うとかなんとか言われる、あの？
そう、そのあのだ。
気づけばゲームもあまりやってないし、クラフトショップの糸コーナーに妙に詳しくなっている自分がいる。いやはや、人生どこで何が趣味になるかわからない。
もちろん、最初は失敗もあった。特に、百円ショップで買った激安刺繍糸。あれで挑戦した初ミサンガは、あっけなく敗北を喫した。……うん、悪いのは俺じゃない。糸だ、糸。
そして、俺の手がミサンガで染まりつつある頃――新会社の正式名称が決まった。
その名も「株式会社ケイスタッフ」。
あれ？　ケイって何の略だっけ……？　そう思っていたら、真相は予想外のところにあった。
「ケイ」は――圭子さんの「圭」。
え、まじで……？　社名が私物化されてない？　と心の中でツッコミつつ、周囲を見ると誰も驚いていない。……あれ、俺だけ？
ちなみに、その社長は圭子さん。そう、あの切れ者美魔女。どうやら璃紗は最初から知っていたらしい。
驚きの連続はそれだけじゃなかった。
なんと、会社の設立日は去年の１０月になっていた。え？　４月創立じゃなかったの？　書類をちょいちょいっといじって、過去に遡ってるらしい。いやいや、そんなことできるの？
でも、それを実行できるのが璃紗だ。システムはマイナンバーカードを捏造できる。会社の設立日の偽装なんて、日常会話レベルなのかもしれない。
そのおかげで俺の仕事が増えるかと思いきや、そこはさすがの璃紗。すべてを水面下で処理してくれた。うん、やっぱり璃紗は有能すぎる。そして美しすぎる。
設立パーティーは、まあ、このご時世だから大々的には開けない。でも「飲み会大好き」の社長が黙ってるわけもなく。
３月１２日――本社の一角、元は会議室だったスペースに新会社の社員９人が集められ、ささやかな創立記念パーティーが開催された。
料理はスーパーで買った人数分の一人前の寿司と、璃紗が自宅で作ってくれたお惣菜を詰めた折り詰め弁当。ミニハンバーグに卵焼き、ちっこいエビフライに付け合わせのナポリタン――って、これ、どう見てもお子様ランチだ。
でも、体育会系課長も東野も、無邪気に「うまい、うまい！」と喜んで食べていた。……いや、マジで子どもかよ、お前ら。

新会社の社員がこんなんで大丈夫なのか、少し不安になりかけたけど……まあ、俺も同じようにうまいうまい言ってたから、他人のことは言えないか。

ところで、ここ最近の話題はもっぱら「新型肺炎」だ。

すでに全国の小中学校は休校になり、テレビでは「これを機に日本も9月始まりにすべきだ！」という謎の暴論まで飛び交っている。うん、それ、今言う話じゃないよね？

一方、ビジネス界隈では在宅テレワークが本格的に検討され始めていた。うちの現場でも、「お前らも在宅で」と言われた。社員だけじゃなく、俺たち外部の人間もだ。

もちろん、そこには契約関連の変更も絡む。だから、説明を聞いてほしいと、二次請けの営業さんに頼まれたわけだ。

で、説明当日――俺は見事に電車トラップに引っかかった。

朝のニュースをチェックしていたスマホが突然アラームを鳴らす。最寄り駅の路線、まさかの運転見合わせ。再開は1時間後。

「おいおい、嘘だろ……？」

俺が玄関で頭を抱えていると、璃紗が音もなく近づいてきた。

「先方の場所は、本社の近くだったと思います」

「ああ……うん、本社からならモノレールで1駅なんだけど……」

「モノレールは動いています。確認済みです。ですから、本社に向かえば、間に合います」

「いやいや、でも、今この状況じゃ――本社に行けない」

「……私を、抱きしめてください」

「……え？」

一瞬、時が止まった。

今このタイミングで、そのセリフ？　もちろん嬉しいよ？　すごく。でも、今それ言う？

困惑していると、璃紗の方から近づいてきて、俺をそっと抱きしめてきた。

「目を、閉じてください」

その声に導かれるまま、俺は瞼を閉じた――

――次に目を開けた時、そこはアパートではなかった。

見覚えのある、社内の会議室。

「……え？　えっ？？？」

俺は璃紗を抱きしめたまま、ただ唖然とする。

そして、そのままガチャリと開いたドアから、モップ片手の圭子さんが入ってくる。

「あら、守谷君。今日はずいぶん早いのね。でもね――会社でそういうのは、感心しないわよ」

……うん。言い訳、思いつかなかった。

その後、無事に説明会には間に合った。二次請けの営業さんは、時間ギリギリに走ってきた感じだったけど。

昼休み、本社に戻った俺は改めて璃紗に問いただした。

「なあ……さっきの、何だったんだ？」

「私はレベル8の時空魔法士です。12キロメートルまでなら、空間移動が可能です」

「……は？」

「ただし、現在は一度の使用でMPを約7割消費します。通勤の往復にはまだ難があり、長距離転移は身体にも負担が大きいのです。ごめんなさい、もっと修練を積んでおきます」

申し訳なさそうに頭を下げる璃紗。

……いや、待って。可愛すぎるって。今の謝り方、反則級だろ。

俺は気づけば彼女を抱きしめていた。

そして、その光景を――なぜかまたもや圭子さんに目撃される。

「まったく……あなたたちは。いい加減にしなさい」

と、またたしなめられたけど……しょうがないよな？　だって璃紗が、こんなにも綺麗で可愛いんだから。

◎引っ越し　２０２０年４月

４月１日。新年度の始まりと共に、馨が介護施設での勤務をスタートさせた。

璃紗が見つけてきた馨の就職先は、アパートから近い……わけではない。本社の近くにある、金持ち向けの高層マンション付属の施設だった。そのためか、職員への待遇もなかなか良いらしい。仕事にも環境にも、今のところ不満はなさそうだ。

それに、俺の通勤時間と馨のシフトが噛み合えば、同じ電車に乗ることもある。

璃紗の空間移動魔法？　うん、便利ではあるんだけど、あれは何というか……本人いわく「けっこう疲れる」らしくて、通勤に使うのは気が引ける。楽はしたいけど、妻に無理はさせたくない。

そんな中――ついに発令された、緊急事態宣言。

街からは人が消え、空気はまるでゾンビ映画のような静けさを纏い始める。これで通勤なんてしたら、俺がゾンビになるのも時間の問題だ。

俺の勤め先も現場仕事は正式に原則在宅に切り替わった。あの在宅嫌いの手塚課長すら、国の要請には逆らえず、あっさり白旗を上げたらしい。

それに追随するように、本社も新会社も在宅推奨に。よしよし、年末に環境を整えておいて本当に良かった。

璃紗も在宅勤務だ。ただし、介護施設勤務の馨は当然ながら現場通い。結果として、俺と璃紗は日中、狭いアパートの中で並んで仕事をすることになった。

――狭い。とにかく狭い。

元々このアパートは「寝るための場所」と割り切っていた。それが今では「仕事も生活も全部ここ」になってしまった。さらに一人暮らしから三人暮らしになったのだから、そりゃもう、きついのなんの。

しかも俺の勤務は、週１回は現場、週１回は新会社で本社勤務、残り３日が在宅という不規則ローテーション。今後どうなるかは、人類にこの試練を与えた神しか知らない。

「引っ越したいなあ……」と、ぼやいたのは、たぶん昼休みのことだった。

問題は金だ。今の給料じゃ、都心に近くて広い物件なんて夢のまた夢。郊外に出れば家賃は安いが、そのぶん通勤が長くなって、電車内感染のリスクも高くなる。

そんな俺の葛藤を見ていた璃紗が、翌日、メールで物件情報を送ってきた。

場所は……なんと本社まで徒歩１５分。最寄りの山手線駅まで徒歩１２分。現場には目の前のバス停からドア・ツー・ドアで３０分弱。

しかも、馨の職場とはわずか１００メートルの距離。

「……これ、タワーマンションの３ＬＤＫ＋Ｓだよな？」

ページを何度も見返したが、家賃は書かれていなかった。

「え、なにこれ……夢？　現実？」

俺の反応に、璃紗は平然とした声でこう言った。

「今のアパートと同じ額をご負担ください。残りは、私がどうにかいたします」

いや、どうにかできる額じゃないだろう。

もしかして璃紗、裏で圭子さんに特別ボーナスでも貰ってる？　それとも――

「あっ、まさか……事故物件か！？　これはラノベでよくある格安幽霊付き物件！」

そう。主人公が家を欲しがったタイミングで、やたら豪華な家を紹介される。住んでみたら幽霊が出て、退治してハッピーエンド――よくある展開だ。

俺はちょっと警戒したが、璃紗の猛プッシュに押し切られ、最終的には引っ越しを決めた。まあ、どうにかなる……だろう。
面倒な賃貸契約や転出届・転入届は全部、璃紗が処理してくれた。やっぱり優秀すぎる妻って最強。

そして引っ越し前日――新居の下見を兼ねて、朝イチで3人を召喚。土魔法士、槌士、そして璃紗の指定で雷魔法士。
前回と同じく水魔法士の予定だったのに、璃紗が「雷魔法士の方が水回りも電気回りも対応できて便利です」と真顔で言うので、そちらに決定。
雷魔法士のメダルは、実はレアで1枚しかなかったけど、彼の能力を信じて延長石もフル投入。半日で終わった旧アパートとは違い、今回は広さもある。作業時間も倍増だ。
希望の間取りや防音構造などを彼らに指示し、俺はそのまま現場へ出勤。休みを取った璃紗に家の仕切りを任せた。
仕事を終えて旧アパートへ帰る。荷物はすでにほとんど運び終えていて、残っているのはベッドと冷蔵庫ぐらい。それらも新居に備え付けがあるので、処分予定。
俺は残った小物を、小さなポシェット型マジックバッグに入れて、持っていくだけ。

そして、迎えた引っ越し当日。
朝早くに俺と璃紗、馨の3人でアパートを出た。
もう、ここに戻ってくることはない。古びて狭かったけれど、10年近くを過ごした空間だ。ちょっとだけ、胸にこみ上げるものがあった。
だが新居を目にした瞬間、その感慨はどこかへ吹き飛んだ。
「おいおい、これ……どこのセレブ御用達のペントハウスだよ……」
広いリビングに、完璧な防音。収納は図面を無視したような大容量。各部屋に余裕があり、俺・璃紗・馨それぞれに個室が与えられている。
俺の部屋は、防音性能をさらに強化してもらった。これで、思う存分キャラ召喚できる。周囲に気兼ねする必要は一切ない。
璃紗の部屋は完全なワークスペース仕様。俺の作業場所は、リビングの一角に設けられたカウンター席。某有名カフェチェーンをイメージしたらしく、おしゃれなノマド気分が味わえる。ついでに、俺の部屋にも小さな在宅ワーク用のカウンターを設けてもらったが、使う機会は少ないだろうな。

そして、一週間が経った。
幽霊は――出ない。
事故物件という予想は外れたようだ。ただの優良物件だったか、と思ったその時――ふと気づく。
……いや、待てよ？
馨は聖魔法士だ。もしや、俺が気づかぬうちに除霊してくれていたのでは……？
その可能性に感謝の気持ちが湧いてきた俺は、馨を自室に呼んで尋ねてみた。
「もしかして、霊的なやつ、祓ってくれたのか？」
「えっ？　なに言ってるんですか。僕、何もしてませんよ？」
顔を赤くする馨。……うん、これは確定だな。
そんな彼に「防音だし、大声出しても大丈夫だぞ」と囁いたら、満面の笑みで――
「ウォーーーーンッ！」
……と、まさかの遠吠え。
――いやいや、可愛すぎか、お前。
◎コビト19ウィルスの真実　2020年5月
新居は……やっぱり広い。
せっかくのこの広さ、活かさないのはもったいないと思った俺は、ついにあの『禁断のカプセル』を開けてしまった。
その名も――工房セット。

一畳分ほどのドア型オブジェにしか見えないそれを、納戸の奥に設置する。そしていざ開けてみれば……。

「広っ……！」

目の前に広がるのは、ちょっとしたファンタジー世界の鍛冶屋を思わせる空間だった。

溶鉱炉にキッチン、木工所まであるじゃないか。もはや「納戸に入ってる」って発想がおかしい。物理法則ガン無視だろ、これ。

でもまあ、考えるだけ時間の無駄だ。ラノベ世界に住んでる時点で、常識の方を疑った方が早い。

とはいえ、これがまた便利でさ……。

高級裁縫道具を使って、例の百円ショップで買った刺繍糸でミサンガを作ったら、一度も失敗しなかった。

「これぞ、文明の利器……いや、異世界の利器か」

などと悦に浸りながら、仕事終わりの時間を工房に捧げる日々である。

ちなみに璃紗もこの工房をフル活用していて、朝昼晩の食事はほぼここで作っている。

一方、馨はというと、たまに工房に現れては、真剣な顔で薬の調合に挑戦していた。

そして今、日本どころか世界を震撼させている——コビト19。

かつては毎日のように感染者数が更新されていたけど、最近はグッと数が減っている。

それでも、ゼロにはならないのが現実だ。

緊急事態宣言も今月で解除だし、このまま落ち着けばいいけど……不安は消えない。

ありがたいことに、俺も璃紗も馨も、いまのところ感染していない。

新会社では唯一、東野が感染したが……まあ、あいつはあの状況もで遊び歩いてたっぽいし、ある意味自業自得というか……。

ただ問題なのは——社内イントラネットの感染者情報だ。

「○月○日、××ビル、△階勤務。業務委託。最終出勤日○月○日。フロア、消毒済み。」

さすがに個人名こそ書かれていないが、フロアや契約形態まで開示されていたら、同じ場所で働いてる人間ならすぐ分かる。これじゃあ、おちおち感染できない。

「超一流企業なのに、プライバシーどこ行ったんだよ……」

そして緊急事態宣言の解除と同時に、俺の現場も在宅勤務が終了して出社再開。

でも出勤になったのは俺らのチームだけ。他の課のメンバーはそのまま在宅継続という謎采配。

どうやら在宅嫌いの手塚課長が暗躍した結果らしい。

不公平だ……なんて思いながらも、引っ越して通勤時間が短縮されたことを思えば、まだマシか。

そんなある日のこと、俺はふと疑問を馨にぶつけてみた。

「馨、あのさ……お前の施設、感染者ゼロって本当か？」

「ええ、感染『者』はいません。でも——感染『した』人なら、います」

「は？」

「発病前に、僕が治療してますから」

……えっ？

俺は一瞬、何を聞いたのか理解が追いつかなかった。

「治療って、お前が？」

「はい。コビト19は、元々ブラウニーやレプラコーンの種属病なんです。治療法は古くから確立されていて、今の僕のレベルでも対処できます」

「……まじで？」

「ちなみに人間種にも感染しますよ。でも、聖魔法を使えば簡単に治せます。エリアディスインフェクションでウイルスを無効化すれば、感染拡大は防げます」

うん、うん、待て。待ってくれ。落ち着け、俺。

今、馨は何て言った？

パンデミック、魔法で終わるって、そう聞こえたぞ？

「……それ、お前がやればパンデミック終わるの？」

「無理です。まだ僕、エリアディスインフェクションが使えないんです。あとレベル2つ上がらないと……それに、レベルマックスにしないと街規模では効果範囲が足りません。ごめんなさい、僕のレベルじゃ世界は救えません」
「いやいや、謝るな！　すでにお前、施設内は救ってるから！　すごいぞ、馨は救世主だよ！」
そう言って頭を撫でたら、馨はふわっと笑って、甘えるように俺の肩に寄りかかってきた。
……全く、可愛いヤツだ。
だがその瞬間、俺の頭の中に、最悪の可能性が閃いた。
「馨……まさか……この世界にコビト19が蔓延したのって……」
「この世界には今までなかった病気ですよね？　だったら、誰かが召喚した小人さんたちが、持ち込んだのかも」
思い出すのは、2月――俺が呼び出したブラウニーとレプラコーン。
……まさか。
「じゃあ、つまり……このパンデミックの『発端』は……」
……。
まじかよ。
ウイルスの耐性もない世界に、俺が『異種族を召喚』したことで、未知の病がばら撒かれた？
それで、この騒動が起きた？　俺が原因？
「なんてこった……」
誰にも言えない。絶対に言えない。
この世界にパンデミックをもたらしたのは、間違いなく――俺だ。

■璃紗3　2020年3月、2020年6月

時空魔法士としてのレベルが8になった。
その瞬間から、私は4ヶ月先の未来を、かすかに――おぼろげながら覗けるようになった。
だが、そこに見えたのは光ではなく影だった。
世界は重く沈み、人々は家から出ず、小さなことにも怯え、互いを疑う。
閉ざされた息苦しい現実が、まるで泥のように未来を覆っていた。
経済は、人の流れとともに息づく。
流れが早ければ活性化し、遅ければ停滞する。完全に止まれば、水が腐るように経済もまた腐り、朽ち果てる。
4ヶ月後の未来は、その「腐敗」の始まりだった。
――新会社を起こすには最悪の時期。
それでも、救いはあった。
この世界は政《まつりごと》がしっかりしている。
腕力や血筋だけで英雄を気取る者が国を治めることはない。
私の村のように、エルフの男ばかりが長《おさ》の座を独占することもない。
一定の年齢に達した者は種属や性別に関わらず参政権を持ち、その声が代表者を選ぶ。
――つまり、民の生活を守らねば代表は地位を失う。
だからこそ、経済が朽ち果てれば、彼らは必ず金をばらまく。
去年までの実績を基準に、その利益を保障する。
「去年の売上」がある会社は、その分を保証される。
ならば――。
新会社が「去年から存在していた」と示すことができれば、保障が受けられる。
システムはこの世界よりも上位にある存在。
日付の捏造など、容易い。
私は考えをまとめ、唇を噛みしめる。
4ヶ月先の未来に、より有利な位置を得るために。
――システムを利用しよう。
私はレベル8の時空魔法士。
12キロメートル先までの空間移動が可能だ。
主は、私が空間移動の力を持つことを知っている。
初めて会った時、エリクサーで少女を救った後、混乱する現場から主を連れて短距離の転移をした。

あのとき、私はまだレベル2だった。
距離は短かったけれど、間違いなく空間移動を見せた。
……けれど、主はそのことを覚えていなかった。
アパートメントから本社会議室へ移動した時、大層驚いていた。
私が空間移動できることを忘れてしまったのか、それとも――。
私はすべてを覚えている。
主と愛し合った夜も。
料理を作り、笑い合った日々も。
エリクサーで救った少女のことも。
運動会で走ったことも。
伊豆で魚を食べたことも。
お子様ランチを一緒に食べたことも。
神社で手を合わせ、夜明けを見たことも。
……すべてを、ひとつ残らず。
主にも覚えていてほしい。
贅沢な望みだと分かっている。
けれど、そう願わずにはいられない。
浅ましい自分が悲しい。
でも、同時に――その記憶のすべてが愛おしくてたまらない。
私は幸せだ。
この幸せが長く続きますように。
そう願う自分を、やはり浅ましいと思いながら。
主は広いアパートを望んだ。
その望みを叶えるのは、私の役目。
未来視で籤の数字を読み、私は高額当選を得た。
私の口座には、かなりの額の金が積み上がっている。
人狼も当選者ではあるけれど、額は私ほどではない。
名義貸しの対価を残し、彼から取り上げた分は、金の延べ棒に替えてインベントリに入れてある。
東京都心の広いマンション――。
私は購入した。
主には「賃貸だ」と思わせたまま。
古いアパートは解約せず、私の契約として残している。
あの部屋は、私と主が何度も愛し合った場所。
思い出を消してしまいたくなかった。
ときどき訪れては、かすかに残る主の匂いに胸を震わせる。
新居の費用として主からもらった金は、私はすべて食材に使った。
この世界の食材は多種多様で、優れたものは恒久的にステータスを上げる。
主は気づいていない。
けれど、1年前より確かに強くなっている。
「美味しい」と言ってくれる。
その一言のために、私は料理をする。
その笑顔を見るために、私は生きている。
主は今、パンデミックの原因を自分だと思い込んでいる。
ブラウニーを召喚したことが原因だと。
だが、それは間違いだ。
主がブラウニーを召喚したのは2月だ。
2月より前から、大陸ではすでに流行していた。
その事実に気づくのは、いつになるのだろう。
心を病みすぎるようなら、私が教えてあげよう。
でも――。
もし、罪悪感のおかげで女性召喚が減るのなら。
……浅ましい私は、それもまた良いと願ってしまう。
◎父の死　2021年2月
コビト19の影響は、まるで波のように感染者数を増やしたり減らしたりを繰り返しながら、まだ世界を覆っていた。
今も、再度発令された緊急事態宣言の真っ只中だ。
俺も、璃紗も、馨も――幸い、感染はしていない。
去年、一度だけ馨に「ちょっと怪しいので念のためディスインフェクションをかけます」と言われたことがあったが、それっきりだ。
馨は勤務先の施設でも、少しでも疑わしければ迷わずディスインフェクションを使う。そのおかげで、あの施設は今も感染者ゼロを更新中だ。

周囲からは「奇跡の施設」と呼ばれ始め、他の施設から視察まで来るようになったらしい。
だが、魔法で治しているなんて、誰も夢にも思わないだろう。見たところ設備も人員も他と変わらないのだから、彼らは首をかしげて帰っていく。
……俺がパンデミックの原因を作ってしまったと知ってから、召喚の回数は大きく減らしていた。
完全にゼロにはできない――それが、俺の甘さだ。
それでも月1回程度にとどめ、召喚直後には必ずキュアポーションを飲ませている。全く使い道のなかったポーション在庫が減っていくのは、皮肉にも在庫管理上は助かっている。
召喚は減ったが、ガチャ自体は続けていた。
しかし、手に入れた召喚メダルのほとんどはクローゼットの奥に積み上げられていく。パンデミックが終わり、平穏が戻れば……そのときは迷いなく使えるだろう。俺も、その日を待っている。
仕事も、この一年で大きく変わった。
俺は現場を離れ、新会社での事務専任――もっと正確に言えば、何でも屋になった。
肩書きは総務部総務課課長代理。名目上は「社長代理」からの降格になるが、手当は月5万円に増えている。肩書きには興味はない。数字が増えるのは素直にありがたい。
しばらくは璃紗とペアで動いていたが、最近は単独で動くことが多い。
何でも屋は意外と奥が深い。対応範囲は多岐にわたり、今まで知らなかったことだらけだ。新しい知識を吸収し、整理し、活用する――この繰り返しが妙に心地いい。
もしかすると、俺は技術職より事務職の方が向いているのかもしれない。
……そして、この一年で最大の出来事が訪れた。
父が――亡くなった。
一昨年から体調が良くないことは知っていた。
その後も良くなったり悪くなったりを繰り返し、今年の2月頭についに入院。
3日後、静かに息を引き取った。
病院はコビト19の影響で面会禁止だった。兄からは「すぐ退院できるだろうから、来なくていい」と言われ、俺はその言葉を信じてしまった。……それが、悔やまれてならない。
父は癌だった。一昨年の時点でステージ4。医師からは「早ければ3ヶ月、長くても一年」と宣告されていたという。
母も兄も姉も――もちろん父本人も知っていた。
知らなかったのは、俺だけだった。
理由は、父の言葉にあった。
「攻矢には親として何もしてやれなかった。あいつは今、東京で頑張ってんだから、余計な心配はかけんな」
母と姉は、その言葉に従ったのだという。
それを聞いた瞬間、俺は声を上げて泣いた。
何もしてもらわなかった？　そんなことはない。
成績の良くなかった俺を東京の大学まで行かせてくれた。東京での就職も許してくれた。
実家に戻ってくれれば畑や家の手伝いができたはずだ。それでも、父は俺が東京に残るとを認めてくれた。
それなのに俺は、仕送りもせず遊び歩いていた。旅行にも連れて行かず、小遣いを渡したこともない。
――とんだ親不孝者だ。
葬式は家族葬になった。
母は父の遺影に向かい「寂しいお葬式になっちゃったね」とつぶやいたが、姉が「うちの近所のおじさんはコビト19で葬式もできなかったんだよ。それに比べれば……」と慰めていた。
参列者は家族のほか、音羽や隣家、叔父叔母も来てくれて、思ったほど寂しくはならなかった。
璃紗は北欧風の容姿で甲斐甲斐しく動き、「次男の嫁」として親戚から絶賛された。
馨は母の手を握り、まるで影のように寄り添っていた。前に帰省した時も、同じように父のそばで手を握っていた。もしかすると治療してくれていたのかもしれない。医師の宣告より1年半も長く生きられたのは、きっと馨のおかげだ。
……父の死から、俺は仕事に没頭した。

30を過ぎ、結婚もしている。遊び回る理由も資格もない。
働いていれば気が紛れる。手を止めれば、後悔ばかりが胸を占めるからだ。
璃紗もあれから寂しげだ。

しかし、四十九日の一週間前――姉から届いたメールで、璃紗の落ち込みの理由を知った。
母と姉が何気なく「璃紗さんが産んだ攻矢の孫を見たい」と言ったとき、璃紗は悲しそうな顔をしたらしい。
……璃紗はハーフエルフだ。ハーフエルフは同族としか子を成せない。俺との間には、子供は生まれない。

俺は「遺伝的にできにくいだけだ」と軽く嘘をついた。だが翌日、璃紗と馨は揃って謝りに来た。
「魔法の力で体を改造すれば産めます」なんて物騒なことまで言われたが、俺は首を振った。
「ずっと今のままでいてくれ。俺は今の璃紗と馨が好きだし、3人で一緒に歳を取っていきたい」

――父が守ってくれた東京での生活。
その延長線上に、今の俺たちの家族がある。
この絆を、これからも守り続けようと、静かに誓った。

◎戦争　2022年2月
父の相続については、最初から放棄するつもりで兄に伝えていた。
両親の世話を何一つしてこなかった俺が、恩だけ受けて財産まで受け取るなんて、厚かましいにもほどがある――そう思っていたからだ。

だが、兄から電話があった。
「シネマ通り近くの土地、もらってくれ」
「……は？」
聞けば、遺品の中から「シネマ通りの土地は3人で共同所有せよ」と書かれた父の直筆メモが出てきたらしい。
「シネマ通りの土地って何だよ」
「俺も初耳だ。通りのはずれに4軒の貸家があるんだと。2軒は空き家だけどな」
「そんな話、聞いたことないぞ」
「だから俺もだって。姉貴も知らなかったってさ。で、だ。親父の遺言だから共同所有なわけだが……お前、管理会社作って社長やってくれ。経理やってるだろ？　簡単だろ？」
「簡単じゃないわ」
「璃紗さんに聞いたら『それほど難しくはない』って言ってたぞ」
……ああ、そういうことか。璃紗はシステムにアクセスできるから、そう言えるのだ。ならもう、全部丸投げでいいだろう。

こうして、伊東守谷財産管理株式会社が誕生した。
社長は俺ではなく璃紗。設立から運営まで全て丸投げだ。
株は兄、姉、俺で三等分。実務は璃紗と俺でこなすが、給料は取らない。賃料収入は全額を配当に回し、俺の取り分の半分は母への仕送り、残り半分は璃紗の労働分として渡している。俺自身の分は……まあ、ほとんどガチャに消えている。

兄はその他の土地と実家を継ぎ、姉は掛け軸10本と壺2つを持っていった（どうせ偽物なのに）。現金は母へ。
父に関する一連の事務は、こうして一区切りを迎えた。俺も前を向くしかない。

――半年後。
半田から結婚報告が届いた。嬉しいニュースだ。悲しいことばかりじゃない。
合コン仲間のグループチャットで報告されたあと、俺だけに送られてきた写真には、例の制服風衣装（茶）を着た茶髪ギャルが。俺があげたプレゼントをまだ着てくれているのが妙に嬉しい。
「パンデミックが落ち着いたら会おう」とのことだが、その機会はまだ来ていない。

――そして、2022年2月。
ロシアがウクライナに侵攻した。
近年の保護主義の流れから、世界情勢が不安定になる兆しは見えていた。だが俺は、事が起きるなら台湾有事だと踏んでいた。予想は見事に外れた。
パンデミックから2年が経ち、経済の動きはおぼろげに読めるようになっていたが、欧州での戦争は完全に想定外だ。経済がどう動くのか読めない。会社への影響も不明。だが影響をプラスに変えなければならない。

俺の給料は会社の業績に直結している。給料の余剰分は旅行資金として金積立にしているが、これも璃紗に「絶対金積立がいいです」と力説されて決めたものだ。

戦争が始まれば金の価格は上がる――璃紗の読み通りになるだろう。もしかするとシステムの入れ知恵かもしれない。

それにしても、ロシアの侵攻には利点が見えない。損しかないはずだ。

璃紗に解説を頼んだが、理解できなかった。

ニュースでは、建前として「ウクライナ東部のロシア系住民の保護」が語られている。国内向けのプロパガンダとしては成立するのだろう。

本音としては「ＮＡＴＯ軍の脅威」や「ソ連邦の復権」だと分析されている。賛同はできないが、理屈としては理解できる。

しかし、侵攻によって失う国際的信用や経済的損失を考えれば、利益などないように思える。

「この世界は時空魔法対策が甘いです。レベルマックスの時空魔法士が６人と、高位の攻撃魔法士２人がいれば、一都市程度なら１日で陥落可能です。１日で一国を手中にできれば利益が出ます」

璃紗は真顔でそう言った。……いや、この世界にはそんな魔法士はいないから。

結局、俺には利益のない戦争を起こす理由は分からなかった。理解できない人間の行動の結果予測など、俺にできるはずもない。

だがそれでも、情報を集め、予想し、対策を立てる。

会社のため、自分の生活のため、日本のため、そして――この世界のために。

◎レベルアップ　２０２２年９月

コビト１９の感染者数は、８月に一気に跳ね上がったかと思えば、９月に入ってやや落ち着いた。

……と言っても、この数字を「落ち着いた」と表現するのはどうかと思うレベルだ。

それでも俺の脳は「落ち着いてきた」と受け止めてしまう。危機的状況に慣れてしまった証拠だろう。

同じく異常に慣れたらしい半田から「そろそろ会おう」と連絡が来た。

お土産は璃紗の手作りクッキーとケーキ。アクセサリーを作る案もあったが、好みがあるだろうし、一度本人に聞いてからの方が良い。今回は無難に食べ物にした。

半田の妻・小春さんは、写真の印象そのままのギャルだった。俺たちより９歳下の２２歳。

ハイスペックな半田と、元気いっぱいのギャル――この組み合わせ、意外と似合っていた。

イチャつきが少々過剰だったが、新婚なら仕方がない。

出会いを聞けば、なんと半田が街中でナンパしたという。

「守谷が取り持ってくれたようなもんだよ」

「俺は何もしてないけど？」

「ほら、前に紹介してくれた『ココアちゃん』いるだろ。あの子だと思って声をかけたら、小春だったんだよ」

……ココアとは、半田の誕生日プレゼントとして召喚した猫人のギャルだ。確かに、小春さんと雰囲気は似ている。

ともあれ、友人が幸せそうなのは良いことだ。

さて、このところ姉からよく連絡が来る。

俺はその都度「ちょっと具合が悪い」とか「今週は調子がいい」とか、適当に返している。

今年のお盆は俺一人で帰省したが、その理由として「コビト１９があるし、璃紗は体調が良くないから用心で」とだけ伝えた。

おそらく母も姉も「妊娠したのかも」と思ったのだろう。……まあ、もうしばらくそう思わせておく。

そんな中、ガチャに新しい機能が実装された。

――召喚キャラのレベルアップ機能だ。

元々、璃紗や馨にもレベルはあり、修練によって上がっていった。

これまでは修練で経験値を積むしかなかったが、今回の実装で、同種の召喚メダルを使うことで直接レベルを上げられるようになったのだ。

召喚キャラのレベルには２種類ある。

一つが種属レベル、もう一つが職種レベル。

同一種属のメダルを使えば種属レベルが、同一職種のメダルを使えば職種レベルが上がる仕組みだ。

例えば馨は人狼。人狼には「ウェアウルフ」「ライカンスロープ」「狼男」など様々な表記があるが、全て人狼属として同一扱いだ。

レベル１から２に上げるには同種メダルが１枚、２から３は２枚、３から４は４枚……と、２の乗数で必要枚数が増える。

つまり、レベル１から５にするには、合計１５枚が必要になる。

この仕様のおかげで、今まで持て余していた男キャラのメダルにも価値が生まれた。

レベルアップすれば、ステータス上昇はもちろん、高位の種属スキルや職種魔法も習得できる。

試しに男の時空魔法士と聖魔法士のメダルを使って、璃紗と馨を強化しようとしたが――二人とも既に職種レベルはマックス。

璃紗は種属レベルもマックス、馨は9で、あと少しでマックスという状態だった。

……馨が日々、介護施設で聖魔法の修練をしているのは知っていたが、璃紗はいつ鍛えていたのだろう。

綺麗で、頭が良く、努力家――なんて優秀な妻なんだ。

試しに男人狼のメダルを使ったら、馨は12枚でマックスに到達。通常ならレベル9からマックスまでに256枚必要なはずだが、努力によって必要数が大幅に減っていた。

……馨もまた努力家だった。俺も見習わなくては。

余ったメダルが多かったので、後日、人間種の聖魔法士を召喚して実験することにした。

まず、呼び出して楽しむ。次に同種のメダルを使い、人間種レベル2、聖魔法士レベル2にしてからもう一度楽しむ。

結果――有意な違いは認められなかった。

……いや、これはあくまで実験だ。俺が楽しみたいからやったわけじゃない。

考察の結果、こう結論づけた。

召喚メダルはレベルアップに使うより、別キャラとして召喚した方が効率的。

もちろん、実験は一例だけでは不十分だ。統計的な裏付けを得るために、あと数回は試す必要がある。

次は……どのキャラで試そうか。

◎禁断のスライム召喚　2023年3月

コビト19の扱いがようやく5類へ引き下げられると決まった。感染者が消えるわけではないけれど、世の中が少しずつ前へ進むための大きな一歩だ。

一方で、戦争はまだ終わらない。4日で収まるなんて話はどこに行ったのか……現実は甘くない。

そんな空気の中、俺の家では別の緊張感が漂っていた。

――正月は帰省しなかった。その理由は、もう誤魔化しきれない。

2月の終わり、姉から届いた決定的なメッセージ。

「いつ生まれるの、そろそろじゃないの？」

……誤魔化す言葉を探してリビングで頭を抱えていたら、横から璃紗がすっと寄ってきた。

「3月半ばが予定日だと言ってください。性別は女です」

あまりにも当然のように言い切る璃紗に、俺は目を丸くした。

「ちょ、ちょっと待て。そんなこと言ったら、この先どうするんだ？」

「スライムを永年召喚してください。種属レベル5以上のスライムなら、大きさ変動と擬態が使えます。その都度、赤ん坊や子供に擬態させれば問題ありません」

……スライム。

あの、ヌルヌルしていて、ただのハズレメダルの代名詞で、挙句「人格崩壊兵器」のスライム。

「ス、スライムは危険すぎるだろ。気持ちよすぎて、人間やめちゃうってやつだぞ」

「それなら、私がスライムから攻矢さんを守ります」

真剣な表情でそう告げられて、俺は言葉を失った。璃紗がそこまで考えているなら、俺が迷っている場合じゃない。

……結局、頷くしかなかった。

「子供の名前はカリヤにしてください。漢字なら香璃矢です」

「カリヤ……強気な女性になりそうな響きだな。もっと優しい名前じゃダメか？　例えば真璃矢とか」

「香璃矢は馨の『香』と、私の『璃』、攻矢さんの『矢』から取っています」

璃紗の声音は珍しく硬い。強いこだわりを感じて、俺は引き下がるしかなかった。……そして思い出してしまった。マリア、あのトナカイ娘につけた名前。あれと被るのは、さすがに無理がある。

「わかった。カタカナでカリヤにする。……で、いつ召喚すればいい？」

「早ければ早いほど修練の時間を取れます」

「なら今日だ。……修練は璃紗に任せる。職業は？」

「スライムなら斥候系の『暗殺者』が良いでしょう」

そう言って俺を送り出す璃紗の横顔は、どこか母親のように頼もしかった。

自室に籠り、クローゼットを開く。

スライムのメダルは山ほどある。……55枚。ほとんど銅だが、中には銀や金まで混じっていた。銀は2枚。ひとつはポイズンスライムの「くノ一」、もうひとつはメタルスライムの鍛冶士。さらに、眩い金色の「セイクリッドスライム・聖女」まである。

聖女スライムなんて召喚したら、理性が一瞬で吹き飛ぶ自信がある。却下だ。

必然的に候補は「くノ一」。銀メダルでレア職、斥候系、暗殺者に近い。……これしかない。

俺は決意してメダルをトスした。

白い靄から姿を現したのは――

黒髪に深い紺の瞳、雪のように白い肌に真紅の唇。衣装は全身黒のゴシックロリータ。

「ゴ、ゴシックロリータ……！？」

くノ一と言えば忍者装束だろ！？　なんで吸血鬼みたいなゴスロリなんだ。

その場に一瞬で緊張と破壊力が走り、俺の理性がグラグラする。

「い、今すぐ人化を解け！　スライム体型に戻れ！」

慌てて命じると、彼女はドロリと溶けて、見慣れた巨大コーヒーゼリーに。……ふぅ、助かった。

永年召喚を告げると、スライムはしばらくプルプル震えた後、やけに時代がかった日本語で答えた。

「拙者、忍者の発祥地・日本に来られて感激至極也！」

……語尾がおかしいけど、まあいい。

「今日からお前は守谷カリヤ、俺の娘だ。俺はお前を娘として愛し、助ける。母は璃紗だ。璃紗を敬い、言うことを聞け」

「御意にござりまする！」

うむ。よし。これで俺を誘惑してくる心配は、きっとない……はず。

まずは、この時代錯誤な言葉遣いから直さなきゃいけないな。

カリヤを連れてリビングに戻ると、璃紗が鋭い目で観察していた。まるで値踏みするように、隅から隅まで。

その真剣な表情に、俺は「やっぱ璃紗は綺麗だな」と感心していたら――

「明日、圭子さんのところへ一緒に行ってください」

「なんでだ？」

「妊娠出産の報告と、育児休暇の申請をします」

璃紗はさらりと言った。俺は、ただ頷くしかなかった。

◎半田の家族介護　2023年5月

カリヤを召喚してから16日後――スライムにしては異例の速さで、彼女はレベル5に到達した。

……もっとも、最後の方はいつもプルプル震えていて、ちょっと可哀想だった。璃紗は「2週間で仕上げます」と意気込んでいたが、結果は2日オーバー。原因は俺だ。横から割り込んで「気分転換に日本語を教えよう」と何度も授業を中断させたせいである。

レベル5を達成した日、カリヤを赤ん坊に擬態させて記念撮影をした。髪の色と口元は俺似、顔立ちは璃紗似。結果、将来有望な美人赤ちゃんになった。

その写真を母や姉、圭子さんに送ると、即座にお祝いメッセージが返ってきた。

……メダルを使って強引にレベル上げすれば、あのプルプルはなかったんだろう。けれど璃紗は「初期に楽をすれば後が大変です」と譲らなかった。

俺はたまらず突っ込んだ。「レベル5はもう初期じゃなくて中期だよな」と。結果、璃紗の目が鋭く光ったが、そこは俺も負けじと理屈で押し切り、余っているメダルでカリヤの種族レベルと職業レベルを底上げした。

……カリヤは涙を流して喜んでいた。

ポイズンスライムの涙が毒じゃないことを祈りながら、俺はそっとハンカチを差し出したのだった。

カリヤは日ごとに「赤ん坊」と「スライム形態」を切り替えている。これは璃紗の配慮だ。俺が赤ん坊の生態を知らなければ、周囲と「育児の大変さ」を共有できない。話題作りのための工夫らしい。

確かに……実際に泣かれると体力を削られる。毎日は耐えられないけれど、一日おきならなんとかなる。璃紗はやっぱり賢い。

そんな折、コビト19が5類に移行した直後のことだ。

半田から一本の電話があった。

「相談に乗って欲しい」

「金の相談なら他を当たってくれ」

「金の話なら、初めから守谷にはしないって」

軽い調子で返す半田に、俺も少し肩の力を抜いた。深刻な内容ではなさそうだ。

そして週末、彼と小春さんが俺のマンションにやってきた。

「……広いな」

「すごい！　ホテルみたい！」

二人が驚くのも無理はない。前のアパートを知っている半田にとって、この変貌ぶりは衝撃だろう。正直、俺だって未だに信じられないくらいだ。

だが、それ以上に驚いたのは――璃紗の腕に抱かれたカリヤだった。

「いつ生まれたんだ？」

「3月17日」

「……そういうめでたいことは、もっと早く言えよ」

「話したつもりだったんだけどな。ごめん」

謝ると、半田は苦笑しながら「おめでとう」と言ってくれた。

小春さんも「マジ可愛い！　私もこんな娘ちゃん欲しい！」と目を輝かせている。……その場がいつの間にか半田夫妻の惚気合戦になったのはご愛嬌だ。

本題はそこからだった。

「俺さ、今、自分の提案したプロジェクトのリーダーやってるんだ。完成まであと3年はかかる。でも、どうしても成功させたい」

横で小春さんが補足する。

「カズっちのお母さんが要介護2で、歩行が難しいの。去年の骨折がきっかけでね。デイケアと訪問介護は使ってるけど、親戚もいないし……。私が岐阜に行こうかって言ったんだけど、カズっちが『離れたくない』って言っちゃってサ」

「……なるほどな」

――なるほど。問題は「親の介護」か。

半田は一人っ子。母親は一人暮らし。現状を聞けば聞くほど、サポート体制の薄さが浮き彫りになる。

介護制度は複雑で面倒だ。俺も音羽のおじいさんや馨の時に調べたからこそ思う。知っていれば得をするが、知らなければ損をする。岐阜の制度もきっと癖があるだろう。

「正直、月にいくらまでなら負担できる？」

「母の年金と俺から15万」

「無理してないか？」

「……正直、きつい」

小春さんがすかさずフォローする。

「大丈夫、私も働くヨ！」

「いや、小春は今のままでいい」

半田夫妻のやり取りに、俺は苦笑した。

だが心は決まった。半田は俺の親友だ。そして、優秀な彼のプロジェクトはきっと世界のためになる。3年――その時間を支えるため、俺も本気で協力しよう。

「じゃあ、補助金をフル活用して10万以内に収める方法を考える」

「……ありがとう」

頭を下げる半田夫妻に、俺は少しこそばゆさを感じた。昔から、こうして頼られる関係が心地いい。

帰り際、俺はアクセサリーの袋を取り出し、テーブルに広げた。

「せっかく来たんだから、好きなの持ってけよ」

小春さんは目を輝かせて物色し、半田と共にブレスレットとミサンガを選んだ。

ミサンガは、俺が密かに「最高傑作」と思っていた絹糸のミサンガだった。……やるな、この人。

２週間後。

俺は岐阜の半田の実家で、介護サービス会社の担当者を紹介していた。訪問介護を週６回、デイケアは今の施設を継続。将来的には一本化する予定。

半田の母の穏やかな笑顔を見て、胸を撫で下ろした。

これで半田は――あと３年、仕事に専念できる。

◎伊東守谷資産管理株式会社　２０２３年７月

７月１日――母の誕生日。

その日は、家族みんなで旅行すると前々から決めていた。俺が積み立ててきた旅行資金もようやく貯まった。金積立の価格も始めた頃の６０００円台から９０００円近くまで上昇。ちょっとした投資成功体験もあって、気分は上々だ。

宿は実家から車で２０分の高級旅館。代表者を母にすれば「県民旅行割」が使えるというのもポイントだ。

母、姉家族、兄家族、そして俺と璃紗とカリヤ――総勢１２人。

夜は誕生会を兼ねて大宴会。にぎやかで、笑い声に包まれた一夜となった。

ただ一つ、母がぽつりと「お父さんがいたらね」と呟いたのが胸に残った。

俺も同じことを考えていた。父がここにいたら、どれほど嬉しそうに笑っただろうかと。

翌日、みんなで父の墓参りをして解散。

残ったのは姉と兄、そして俺たち一家。

向かった先はシネマ通り――古くからの商店街だ。

その奥まった一角に、伊東守谷資産管理株式会社の事務所兼店舗がある。空き家だった貸店舗を改装し、今年の４月から営業している。璃紗が「新しい事業を起こして活用しましょう」と言い出したのだ。俺は株主としてＧＯサインを出し、従業員も一人雇った。

店の名は「夢幻庵」。

骨董屋である。

店内には刀剣や鎧、壺や掛け軸が整然と並ぶ。その中には、俺が璃紗に売ったアイテムも混じっていて、思わずニヤリとする。

出迎えたのは柴田という中年男性。実は――人間種の召喚キャラだ。

白い歯が映える、落ち着いた雰囲気のイケオジ鑑定士。説明も丁寧で、客あしらいも一流。……これ、絶対女性にモテるタイプだろ。

「古いお宅に伺い、不要なものを適正価格で買い取り、必要とされる方に適正価格で売る。それだけです」

――骨董屋の基本原則を優等生的に語る柴田に、俺の姉はすっかりメロメロ。

兄は「安く買って高く売るのが骨董屋じゃないのか」と疑問を口にしたが、柴田は涼しい顔で「長い目で見れば誠実さが利益につながります」と返した。

……優秀だ。優秀すぎる。インキュバス疑惑すら頭をよぎった。

話題は自然と、父の掛け軸に移った。

「狩野派のお軸でしたね。銘はありませんでしたが、本物の狩野派に間違いありません」

柴田の誠実な答えに、姉はさらにときめいている。

……いや、そこじゃないだろ。俺は内心ツッコミを入れながらも、姉兄の株主らしい関心にうなずいた。

やがて柴田は切り出した。

「お願いがあります。古美術品の鑑定をできる従業員を増やしていただけないでしょうか」

「経営的にはどうなんだ？」と兄。

そこで口を開いたのは璃紗だった。
「柴田一人で月に家賃一軒分の利益を出しています。二人にすれば経費は増えますが、それ今の2倍の利益を見込めます。株主配当はむしろ増加します」
「……2倍？」と姉が目を丸くする。
「はい」
「社長の璃紗ちゃんはお給料もらってないのよね」
「俺が払ってる」と俺が口を挟むと、姉は即座に指摘した。
「攻ちゃんの株配から出てるんでしょ。それは違うわ。璃紗ちゃんのお給料を含めて、利益は経費に回しなさい。株主配当は今の額で十分だから」
「そうだな。この街で金を回して、シャッター街を活性化してくれ」と兄も続ける。
姉兄の目は輝いていた。寂れゆく商店街を再び賑やかに――その夢を、彼らは本気で信じている。
璃紗も静かに頷いた。
「でしたら資金を投入し、新事業も展開してよろしいでしょうか。株主配当は死守いたします」
「璃紗ちゃんに任せるわ。攻ちゃんもちゃんと手伝うのよ」
――逃げ道はない。
姉と璃紗、二人の笑みが妙に怖い。カリヤが璃紗の胸で泣き出したのも、多分その気配を察したからだ。
旅行から戻った後、俺は二人の人間種を永年召喚した。賢者とクレリック。
賢者は夢幻庵で骨董の鑑定を。クレリックは新たに立ち上げる介護サービスを担当してもらう。
「なぜ介護？」と俺が尋ねたとき、璃紗は笑って答えた。
「攻矢さんが興味を持っていそうでしたから」
図星だった。音羽や馨、そして半田の件――介護は、俺の身近にある課題だ。
「明日から講習会を行います。攻矢さんとクレリック、そして希望者がいれば他の方も参加してかまいません」
……ちょっと怖いけれど、やっぱり俺は璃紗に惚れている。
「綺麗だな」と心の中で呟きながら、俺は新しい挑戦に胸を高鳴らせていた。

◎ソーシャルゲーム「夢幻の国」　2023年9月

カリヤが生まれて半年。赤ん坊の姿でいる時の彼女は寝ているか泣いているかの二択だ。
だが、スライム形態で過ごす日のカリヤはよくわからない。姿を見せないし、どこで何をしているのか謎だ。
さて。そんな日常の裏で、今回のイベントガチャが始まった。
タイトルは「夢幻の国の文化祭」――生産職祭りだ。
目玉はなんと最高級工房！　俺が普段使っている工房が「初級」扱いだったことに地味にショックを受けたが、その3段階上だという最高級品が手に入るなら、夢とロマンしかない。
そのほか鍛冶士や裁縫士、調合士、調理士といった生産職の召喚メダルに加え、それぞれに対応する金属・布・薬草・食材の高級素材が日替わりで排出される。
つまり――素材ガチャの解禁。
これまでガチャで素材が出たことはなく、工房で作る時はいつも現実世界の素材で代用してきた。
そのせいで「時空魔法モンスターの革」が必要なマジックバッグなんかは作れずにいたのだ。
だが、今回の排出リストにある「ミミックの外皮」「スパティアルウルフの革」……
あれはまさにその「時空魔法を使うモンスターの革」だ。
――つまり現実でもマジックバッグが作れるってことだ。
「やばい、課金一直線だ」
俺は柴田にオンライン鑑定を頼んで15万円分の装備を夢幻庵に売り払い、ガチャ資金を捻出した。
素材ガチャは日替わり。金属素材はミスリル銀やヒヒイロカネといったファンタジー金属が当たり。布系はハズレが糸、ノーマルが布、当た

りが革。薬草は当たりもハズレも結局は草。食材は肉と魚がアタリ枠だ。
しかもカプセルにはレシピ用紙が入っていて、主な作成アイテムと「詳しくはゲーム公式ＨＰへ」と書かれていた。
……ゲーム公式ＨＰ？　いやいや、ゲームってどういうことだ。
１０日後、思い立って検索してみた。「夢幻の国　公式　レシピ一覧」
――出てきた。
Ｒ１８指定のソーシャルブラウザゲーム「夢幻の国」
ゲームの内容は、召喚したキャラクターと冒険して、モンスターを倒したり……陵辱したり。
現在のイベントは「夢幻の国の文化祭」。魔法研究発表会やアイテム作成発表会、その中に「イベント素材レシピ一覧」も載っている。
「マジかよ……これがガチャシステムの正体？」
「もちろんそうです」
俺の独り言に璃紗が当然の顔で返してきた。サラッと言うなよ！
とりあえず登録画面にメールアドレスを入れる。
……「既に登録済みです」？
試しにいつものパスワードを打ち込むと、普通にログインできた。
キャラ名は――マモルヤセメルヤ。
……はい、俺がいつもゲームのキャラに付ける名前です。
装備はレベル２、木刀に布服という初心者丸出し。
インベントリには所持金４３０ＹＥＭと初級ポーション、肉、そして犬人や鼠人の召喚メダル数枚。
記憶には一切ない。ないが……これはどう見ても俺だ。
街の外に出て角兎に特攻してみたら秒殺。即・死に戻り。
だが召喚メダルを使い犬人を呼び出したら、そいつが兎を瞬殺してくれた。強い。
狩りを続けると肉や金、時には召喚メダルまで落ちる。１３匹目で兎人（女）の戦士メダルがドロップした。
試しにクリック――出てきたのはウサ耳の美少女。
選択肢は「冒険へ連れて行く」「陵辱する」「チュートリアルモード」。
……嫌な予感しかしないが、試しに「陵辱する」を選ぶと――
「おいおいおい！？」
画面いっぱいに現れるのは、ウサ耳美少女の裸のスチル画面。
次の選択肢で「共に楽しむ」を選んだら甘々エロ絵。「陵辱する」を選んだら無理やりエロ絵。
……うん、間違いなくＲ１８でした。
スチル画が終わると、時間切れで兎人は帰還。街の外に残された俺はまた角兎に突撃されて即死。
死に戻りしたマモルヤセメルヤは街で立ち尽くしていた。
「……なんだこれ、俺、昔こんなの登録して放置してたのか」
記憶はまるでないが、現実とリンクしてるのは確定。
ガチャで出る素材もメダルも、このゲームの延長線上にある。
頭を抱えた俺を、璃紗がじっと見ていた。
「攻矢さん。公式を知らなかったんですか？」
「……初耳だわ！」
現実とソシャゲが繋がる世界。俺はその正体を、ようやく垣間見たのだった。
◎リアルトレード　２０２３年１１月
ヨーロッパの戦争は、まだ泥沼の中にある。
何度も繰り返される「まもなく終わる」なんて甘い予想は、もう誰も信じていないだろう。
そんな世界情勢とは裏腹に、俺は今日もガチャシステムと向き合っていた。
ソーシャルゲーム「夢幻の国」――あの妙に現実とリンクしているゲームはもうプレイしていない。面白くないからだ。
だが、公式サイトだけは定期的に覗いている。ユーザー掲示板にはガチャシステムの裏を知るヒントが転がっている。

そこで目にした一つの投稿。
「リアルトレード希望。そちら、召喚メダル、種類不問。こちら、要望品応相談。現実世界での取引を希望。現実に存在する召喚メダルが対象です。連絡は以下のアドレスまで」
――現実の召喚メダルを欲しがっている。
これまで何度も削除されていた書き込みだが、その断片だけは常に残り、嘲笑と中傷のコメントがついていた。
「またかよ」
「通報しました」
「リアルとゲームを混同ってやべえ」
「前にメール送ったらマジだった」
「危険、近寄るな」
……だが俺は知っている。召喚メダルは確かにこの現実に存在している。
好奇心に勝てず、俺は海外サーバーを経由して偽装メールを送った。返答は掲示板の符号投稿で返ってくる。
「メダル交換希望。こちら、男2枚。そちら、女1枚で」
『現金での取引は不可ですか。種属を問わず1枚5万円で買い取ります』
「銅でも銀でも金でもか？」
『デイリーガチャでは銀までしか出ません。あなたは本当に現実の召喚メダルをお持ちなのですか』
――ああ、なるほど。こいつは「デイリーガチャ」しか回せないんだ。
「デイリーから一度、金が出た。鼠人だ。それなりに出るはずだろう」
『本当に？』
『現実で召喚メダルを持っている証拠を見せる。東京に来られるか』
『可能です』
日時と場所は、23日の午前10時、大崎を指定した。
「こちら、銅男7枚。銀猫1枚、金鼠1枚。銅男の取引として、そちら、女2枚と日本円15万。別に銀は10万、金は30万」
『銀も5万円になりませんか』
「保留だ」
確定だ。相手――太郎と名乗った男は、イベントガチャを回せない。デイリーだけの乏しい収穫で、メダルが枯渇している。
常設ガチャやイベントガチャが回せれば、5万円で召喚メダルがいくつも入手可能だ。
俺にとって価値ゼロの男メダルが、太郎にとっては5万円の価値を持つ。
……いや、2時間しか呼べないキャラに5万円だ。そこまでの価値を見出すなんて、どう考えてもまともじゃない。
だが、情報は欲しい。
太郎が何を考えているのか、この世界の「ガチャの裏」を知っているのか。
だからこそ、俺は指定した。
「取引場所は――大崎」
俺にとっては昔の通勤ルート。今は関係のない場所だ。何かあっても切り捨てられる、用心の選択だ。
……それでも胸の奥にざらついた不安が残っていた。
取引当日。
俺は念話が使えるカリヤを「借り受け」、さらに人間種の時空魔法士を一人召喚して一日延長石を使った。
備えすぎて困ることはない――相手がまともなら笑い話で済むし、そうでなければ命綱になる。
指定場所は大崎駅北口。
「製鉄会社のビル、川沿いの階段、下から3段目。植え込みの中にあるコーヒーショップの袋」
それが俺から太郎への最初の指示だった。
そこは目黒川沿いの広場階段。仕事勤めの人や観光客が腰かけるベンチが並ぶ。
俺自身は姿を見せない。時空魔法士にコーヒー店の袋を持たせ、そこにTシャツのカプセルと鳥人のメダル、そして次の指示を入れて植え込みに置かせた。

俺は五反田駅前で待機。スマホ越しに時空魔法士から逐一報告を受ける。

やがて現れた太郎は――30代前半、小柄でリュックを背負い、両手に紙袋。

彼は迷わず3段目のベンチに腰を下ろし、袋を手に取った。中身を確かめた瞬間、周囲をキョロキョロと見回す。

カプセルと召喚メダル――それを見れば一発で「本物」とわかるはずだ。

指示書には次の場所が書かれていた。

五反田駅前のカラオケボックス。

階段から徒歩10分弱。尾行するには十分な距離。

仲間がいるか、誰かに尾けられているか――それを洗い出す時間でもある。

……結果、太郎は一人だった。

カラオケ店前で落ち着かない様子の彼を、俺とカリヤは歩道橋の上から観察していた。

カリヤは20代前半の中性的な人物に擬態。さらに用心棒として、鼠人のモンクを召喚済みだ。

俺は安物のサングラスにマスク。頬に絆創膏を貼っている。

人間の視線は意外なほど単純で、目立つ一点に注意が向けば他は曖昧になる。

「よし、行くぞ」

俺たち3人は背後から近づき、声をかけ、そのままカラオケ店に入った。

尾行していた時空魔法士は、外で待機だ。

防音の個室に入ると、太郎を奥に座らせ、その横に俺。向かいにモンク、斜め前にカリヤ。

カリヤは平然とドリンクの注文をこなし、進行を引き受ける。

テーブルに並ぶ6枚の召喚メダル。

「こちらが提供分です」

「6枚だけ……？　ああ、1枚はすでに……なるほど」

太郎もリュックから財布を取り出し、メダル2枚と15万円を差し出す。

お互いの手前から相手の手前へ、すべるように交換される。

カリヤがすぐさまビニール袋に収め、俺の鞄に入れる。

「次は銀と金の件です。金は30万で譲れません。銀は値下げに応じますが、他のアイテムを追加してください」

「……なるほど。しかしこちらとしては、メダルの色は気にしていないのです。どれも一律5万で――」

「決裂ですね」

すっと立ち上がろうとするカリヤに、太郎が慌てて両手を上げた。

「ま、待ってください！　追加のアイテムがあります。ご査定を」

紙袋2つ。中にはデイリーガチャのカプセルが詰まっていた。

カリヤは無表情のまま一つ一つ検分し、ほとんどを弾く。残ったのは数個。

「……YEMがありませんね」

「こちらに」

リュックから太郎が布袋を出す。重い音がテーブルに響く。

「10万YEMほど」

「確認しても？」

「どうぞ」

カリヤが命じる。

「三郎、両替」

モンクが視線で俺に確認。俺は小さく頷いた。

布袋が一瞬揺らぎ、次の瞬間、ふくらみが減る。

広げられた中身は――10000YEM硬貨9枚、1000YEM硬貨3枚、100YEM硬貨1枚。

「……9310YEMしかありませんね」

太郎は驚愕し、口を開けたまま固まった。

――インベントリを使った両替を知らないのか。

「まぁいいでしょう。銀はこの９３１００ＹＥＭと現金５万、それと選んだカプセルで」
「はい、それで」
交渉はまとまり、銀の召喚メダルが太郎の前にすべらせられる。
……そのときだった。
「すみません、その方――もし召喚キャラなら譲っていただけませんか。４万円、いえ５万出します」
太郎の視線はモンクに注がれていた。
空気が変わる。俺もカリヤも動きを止め、モンクはただ鋭い眼光で睨み返す。
カリヤが念話で告げる。
『お父さん、どうする？』
『外に出て相談だ。３人で』
「検討させてください。少し外します」
そう言って立ち上がる。俺とカリヤとモンクは廊下へ出た。
……ここから先が、正念場だ。
◎太郎の正体　２０２３年１１月
打ち合わせを済ませ、カラオケ店の個室に戻ると、俺たちは再び席についた。
太郎は何事もなかったかのように笑みを浮かべ、しかしその目だけは妙にギラついていた。
テーブルにはすでに５万円が置かれている。
「では、三郎さんをお願いします」
「わかりました。残り時間はおよそ１時間１５分です」
カリヤはすぐに応じ、モンクに向かって命じる。
「三郎、これからは太郎さんの言葉に従って」
俺は念話で一言加える。
『ただし――俺たちに害を加える行為は禁止だ』
「……ただし僕らに危害を及ぼすのは禁じます」
カリヤが追従して口にする。
「ありがとうございます。では失礼します」
太郎はリュックと紙袋を手に立ち上がり、モンクを伴って個室を出て行った。
俺たちはただ静かに見送る。だが、その直前――カリヤが低く囁いた。
「太郎さん。ＹＥＭは召喚キャラのインベントリで両替可能です。１０万ＹＥＭ金貨は５グラムの金で、今の相場で５万円。ちなみに、金の召喚メダルには２０グラムの金が含まれています。……ご参考までに」
一瞬、太郎の顔が引きつった。そのままドアが閉まる。
俺はすぐにスマホを取り出し、外で待機していた時空魔法士に電話した。
「今、出た。モンクを連れている。尾行して行動を逐一報告してくれ。何があっても手は出すな」
「了解しました」
通話を切ると、カリヤが不安そうに俺を見つめる。
「お父さん、私も尾行に行こうか？」
「いや、駄目だ。姿を見られてる。それに危険すぎる」
「でも、虫になって飛んで行けば大丈夫。ほら、この姿なら」
言うや否や――カリヤの身体がプルンと震え、カナブンに変化した。
擬態能力の自由度はここまでか。
「やめろ！　店員に見られたらどうする！」
「はーい」
カナブンから中性的な若者へと戻り、頬をふくらませる。
俺はドリンクを取りに立ち上がりながら尋ねる。
「モンクとは念話で繋がってるか？」
「うん。太郎さんに連れられて歩いてる。……あ、ホテル街の方に行ってる」
胸の奥がざわついた。嫌な予感がする。
数分後、時空魔法士からの報告が届いた。
太郎とモンクはラブホテルに入った、と。

……5万円の価値。そういうことか、と一瞬思ったが――

「待って！」

カリヤが耳を押さえ、表情を歪める。

「三郎が……裸にされて、お風呂場に入れられてる。抵抗するなって命じられて……」

「それは――そういうことだよ」

「違う！　太郎さん……ナイフを持ってる！　刺されたっ！」

その瞬間。

脳天を殴られたような衝撃が脳内を駆け抜けた。

……知っている。この痛みは――召喚キャラの「死」を意味する。

トラックに轢かれそうな少女を犬人で助けようとした時。

あの時と同じ。

「三郎との念話が切れ申した……嗚呼……死に給うた」

俺はスマホを握りしめ、叫んだ。

「時空魔！　最大限の注意で尾行を継続！　絶対に手は出すな！　危険なら即時撤退だ！」

「了解です！」

通話を切ると同時に、俺は璃紗へ連絡した。

「緊急だ。俺たちを空間移動でピックアップしてくれ！　五反田駅前、カラオケ店だ！」

マンションに戻った後、外には一歩も出なかった。

翌朝、時空魔法士と共に状況を整理した。

結論は明白だった。

――太郎は殺人鬼だ。

彼にとって召喚キャラは人でも仲間でもない。ただの「獲物」。

だからこそ、メダルの種属やレア度にこだわりがなかったのだ。

尾行した時空魔法士の報告によれば、太郎は大宮の一軒家に両親と暮らしているという。

……仮面を被った日常。その裏に潜む、狂気。

俺は一日延長石を7つ使い、四郎と名付けた時空魔法士を一週間延長した。

さらに人間種の暗殺者を召喚。名を五郎とした。

モンクの三郎との接点は1時間ほど。

だが――助けられ、共にいた時間があれば十分だ。

これは「仲間の敵討ち」だ。

太郎の尻尾を掴み、この世界の理で報いを与える。

太郎から受け取った25万円のうち10万は四郎に渡し、五郎にも10万。残り5万はガチャに回す。

敵討ちに役立つアイテムを引くために――俺自身の楽しみのためではない。

そして最後に、俺はカリヤに釘を刺した。

「カリヤ、常に冷静になれ。テンパると口調が時代劇に戻るぞ。くノ一ならどんな時でも完璧に擬態しろ」

「……うん、ごめん」

プルプル震えるカリヤを見つめながら、俺は拳を握りしめた。

――必ず、三郎の無念を晴らす。

◎終了アナウンス　2024年2月

四郎と五郎――あの二人の働きで、例の太郎の正体が見えてきた。

本名は小宮大悟、36歳。さいたま市大宮に両親と暮らし、西新宿のデザイン会社に勤めるサラリーマンだ。

外での行動は至って普通。怪しい素振りひとつない。一般人として働き、一般人として暮らしている。

家の中で何をしているかは闇の中だが、外で尻尾を出さない限り、俺に手は出せない。

四郎は元の世界に帰った。一方、五郎は「この世界に残りたい」と言い、大手探偵事務所の大宮支店に就職した。ひとり暮らしをしながら、余暇に太郎を監視している。どうやら、それが彼なりの生きがいになっているらしい。

俺はときどきガチャアイテムや工房で作った品を差し入れる程度で、基本的に放任している。だが、心の奥底では思っている――「太郎には、必ず罰を受けさせる」と。

そんなある日。いつものように「夢幻の国」公式ＨＰでイベント情報を探していた俺は、衝撃のアナウンスを目にした。

◆◆◆◆◆

『夢幻の国』サービス終了のお知らせ

２０１６年のサービス開始以来、約８年間にわたりご愛顧いただきましたが、誠に残念ながら２０２４年３月３１日をもちましてサービスを終了いたします。

課金終了：２０２４年３月２６日午後２時

サービス提供終了：２０２４年３月３１日午後２時

これまで冒険を共にしてくださったプレイヤーの皆さまに、心より厚く御礼申し上げます。

――『夢幻の国』運営チーム

◆◆◆◆◆

画面を読み終えた瞬間、血の気が引いた。慌ててリビングのガチャマシンを確認すると、案内紙にも同じ文言が印刷されていた。

３月３１日でガチャは完全停止。カプセルも新たに手に入らなくなる。

……大問題だ。

俺にできることは限られている。運営に抗議しても意味はない。ならばやるべきはただ一つ――課金が可能なうちに、全力で回すことだ。

俺は迷わずクローゼットを開き、金の召喚メダルを２枚と、人間種の男のメダルを１枚取り出した。

人間種を召喚し、二時間延長石を使い、金のメダルを換金に走らせる。召喚キャラはマイナンバーカードを持っているから身分証の問題もない。

カリヤの言う通り、金の召喚メダルは２０グラムの金を含む。今の相場なら一枚２０万円。これだけで１ヶ月分の課金資金は確保できる。

それからの日々、俺は毎日１０回、ガチャを回した。

回すたびに過去の記憶がよみがえる。最初の召喚、工房での試行錯誤、チュートリアルフィールドの冒険……。すべてが一本の糸でつながっていた気がした。

そして、アナウンスから１週間後。ガチャに変化が訪れる。

イベントガチャが「楽しかった思い出」と題され、過去イベントが再現可能になっていた。

ガチャマシンにはラジオボタンとダイヤルが増設され、年やイベントを選べば、その時期の排出アイテムがリストアップされる仕組みだ。

常設ガチャも同様で、「召喚」「武具」「素材」の三種を選び、さらに細分化されたダイヤルでリストが切り替わる。

――つまり、狙ったアイテムを引きやすくなったということだ。

課金欲を煽る、運営の最後の悪あがき。それでも俺は心が躍るのを止められなかった。

さらに金メダル２枚を現金化して、一日の回数をさらに増やす。数日で８０万円が消えた。だが、後悔はしていない。

ガチャから出てきた金メダルをガチャに還元しているだけだ。

残回数は２５００を超えた。

ガチャを回し続ける俺の目に留まったのは武具・魔導書。

試しに１０回引いたところ、希望のものが一冊出た。それは電子パッド型魔導書「グリモワール１４」。

聖・闇・時空魔法効果＋１００％、水火土風魔法＋１０％、スロット無限、使用者制限可能。

魔法効果２倍――カタログを見た瞬間、背筋に震えが走った。

璃紗に渡したら、彼女は瞳を輝かせて喜んだ。

◎無限ガチャ作業　２０２４年３月

璃紗は一日で「グリモワール１４」を自分のものにしていた。

魔法書でありながら、まるで高性能タブレットのように使いこなしていて、仕事のスケジュールやメール管理まで全部それで済ませている。

……ただ、魔法を使っている姿は、残念ながらまだ一度も見ていない。

一方で、俺が異空間庫の開発を依頼していた高位裁縫士は、ついに完成にこぎつけていた。

しかもただの異空間庫じゃない。容量無制限――つまり「無限」の名を冠する代物だ。

さすがに一人では無理だったらしく、時空魔法士の助力を得たそうだが、それでも完成させた執念は尊敬に値する。

そんな折、３月２６日のメンテ明けに驚愕の仕様変更があった。

なんと、残りガチャ回数が――３倍になっていたのだ。

「終了記念で一回１００円にしました」と運営からの最後のプレゼント。

……もっと残しておけばよかった。

後悔先に立たずだが、それでも３２００回。回し切れるか心配になるほどの数字だ。

「まあ、木曜と金曜を有休にすれば４連休だ。回し切ってみせる」

年度末で忙しい会社は多いが、派遣のケイスタッフは比較的ゆるい。４月からの新人教育は体育会系課長に丸投げできるし、事務処理は璃紗が引き受けてくれている。俺は心置きなく「ガチャ職人」と化せるわけだ。

だが、カプセルを延々と開け続ける中で、ある疑問がふと頭をもたげた。

――１０万ＹＥＭ金貨は５グラムの金で５万円。金の召喚メダルは２０グラムで２０万円。

じゃあ今、目の前に転がってる金のインゴット１キログラムは……１０００万円！？

俺は思わず璃紗を呼んだ。

散らかり放題のリビングに足を踏み入れた璃紗は、ため息交じりに呆れ顔を見せた。そんな表情さえも美しいのだから困る。

「璃紗、チュートリアルモードで答えてくれ」

「はい、どうぞ」

「『夢幻の国』が３月でサービス終了するのは知ってるな。サーバーが止まったら、このガチャシステムはどうなる？　やっぱり動かなくなるのか」

「はい。メンテナンス状態と同じく、動作は停止します」

「じゃあ、未開封のカプセルもアウトか」

「その通りです」

「……じゃあ、実体化済みのアイテムは？　消えるのか？」

璃紗は言いかけて、言葉を飲み込んだ。大きな瞳だけが左右に揺れている。

そして、少し間を置いてから答えを修正した。

「サービス終了後も丸一日、サーバーは稼働します。その間にユーザー情報のバックアップが行われるので、状態はメンテナンス中と同じです。その後、完全にサーバーが廃止されると……ガチャマシンと未開封カプセルは消滅します」

「やっぱり……」

重くのしかかる現実に、思わず天井を仰ぐ。

「でも実体化したアイテムは？」

「それは……システムにも予測がつかないそうです」

いつもは歯切れのいい璃紗が、珍しく声を濁した。

つまり、残るのか消えるのか、誰にもわからないってことだ。

その夜。

璃紗が珍しく俺の部屋に来た。

「少し、お話ししたいのです」

ベッドの縁に腰かけた彼女と、これまでのガチャの思い出を語り合い、気づけば夜明けまで一緒に過ごしていた。

まるで「終わり」を予感しているかのように。

翌日、璃紗と馨は肩を並べるようにして出て行った。

マンションに残った俺は、黙々とガチャを回す。残り回数は３２００。最終日は１００回と決めているから、一日あたり１０００回ほど消化しなければならない。

――一人でやるには、さすがに骨が折れる作業だ。

だから俺は、二人が外に出る前に頼み込んだ。

「カリヤを３日間貸してくれ。赤ん坊形態はなしで、作業を手伝ってほしい」

かくして、俺とカリヤの二人三脚による「無限ガチャ作業」が始まった。

リビングの中央にガチャマシンを置き、俺はひたすら回してカプセルを開ける。

出てきたアイテムは、カリヤがすぐに種別ごとに分け、異空間庫に収納していく。

時間停止の関係でマジックバッグにしか入れられないポーション類は俺が担当。

延々と続く流れ作業で、俺の手首は腱鞘炎寸前だったが――そこは馨に治してもらった。

治療の時の馨のあどけない笑顔があまりに可愛くて、そのまま抱き寄せてしまったのは……まあ、内緒だ。

金曜日。

カプセルを開ける手を止め、テーブルに並んだ金のインゴットを見下ろす。

「……このインゴット、サービス終了と同時に消えるんじゃないか？」

あの時、璃紗が言っていた。

「未開封カプセルは消える。実体化済みアイテムがどうなるかは不明」と。

――つまり、この１０００万円級の塊も、あと２日で霧散してしまう可能性がある。

「カリヤ、作業は一旦ストップだ！」

俺は異空間庫に駆け込み、いくつかの召喚メダルと金のインゴットを選び出してリビングへ戻った。

並んだ金のインゴットは１３個。合計１億３０００万円。これが消えるなんて冗談じゃない。

召喚したのは、ノームと人間種二人。

三人をチュートリアルモードに切り替え、カリヤと並んで問いかける。

「システム終了時の運営手順を教えろ」

返ってきた答えは一致していた。

３月３１日１４時に外部接続を遮断 → ユーザー情報とアイテム情報の三重バックアップ → 翌４月１日に最終チェック → 問題なければサーバー停止、ディスク初期化。

「……じゃあ、その時、ガチャマシンや未開封カプセルはどうなる？」

「メンテナンス中と同じく使用不可」

「サーバー停止後は消滅」

三人は揃ってそう答えた。

だが意見が割れたのは「開封済みアイテム」の行方だ。

人間の槍士は「サーバー停止時に消える」と言い切る。

水魔法士とノーム――通称ノムさんは「消えるのはディスク初期化の時点」と譲らない。

さらにノムさんはこう付け加えた。

「夢幻の国固有の素材は消えるが、この世界に存在する物質なら残るはずじゃぞい」

「つまり、この金インゴットは？」

「残ると思うぞい」とノムさん。

「いや、消える」と槍士。

「やっぱり消える」と水魔法士。

三者三様の答えに、俺は頭を抱える。

「……１０分間、三人で話し合って共通見解を出してくれ」

そう指示して、俺とカリヤは自室に引っ込んだ。

「カリヤはどう思う？」

「うーん……私なら、『なくなると思って動く』かな。その方が損しない」

「やっぱりそうだよな」

つまり、金のインゴットはすぐにでも換金してしまった方がいい。

残るのならそれでいいが、消えたら１億円以上が無に帰す。笑えない。

さらにカリヤは悪戯っぽい笑みを浮かべて付け加える。

「金の召喚メダルも売れば？　あとは銀のインゴット、日本刀の『虎徹』と『村正』も高値だよ」

「……お前な、日本刀は許可証がいるんだぞ」

「はい、どうぞ」

あっさりと行政書類を生成して差し出してくるカリヤ。システムを使ったに違いない。

俺はこめかみを押さえ、ため息をついた。

――いや、これ以上ツッコむのはやめておこう。

三人がまとめた結論はこうだった。

「アイテムは残るが特別機能は失われる可能性が高い」

マジックバッグや異空間庫の機能は消え、中身が溢れ出す。

武具のステータス補正はなくなり、ポーションもただの液体になる。

「……なら今のうちに処分しよう。価値がある物から順番に売る」
俺は人間種二人に二時間延長石を三つずつ使い、金のインゴットや刀を託した。
交通費として１万円札も渡す。億単位が手に入るんだ、ケチる意味はない。
ノムさんには残ったアイテムの処理について知恵を借りることにする。
こうして、俺の「ガチャ資産整理」が始まった。

◎サービス終了日　２０２４年３月

異空間庫の対策として、俺は月島に貸し倉庫を借りた。
契約者の名義はノムさん。システムをうまく使ったのだろう。契約は２時間で完了し、使用可能になっていた。ノムさん自身はタイムアップで消えたが、契約そのものは有効のまま残っている。
売れるものはほとんど売り払った。衣服は古着屋、武具は都内の骨董屋へ。
夢幻庵を使わなかったのは、売ったものが「システム終了」と共に消える可能性を考えたからだ。
結果として、１億５０００万円。まさかの大儲けである。俺が大学時代に抱いていた「一生で１億貯められるかな」という淡い夢を、ガチャがいとも簡単に超えてしまった。
――そして迎えたサービス終了当日。
朝、俺は最後のデイリーガチャを回した。出てきたのは初級ＨＰポーション。なんとも締まらないラストだ。
その後、残していた有料ガチャをすべて消費する。最後の１０回は常設ガチャの魔導書。そして運命めいたことに、最後の１回で馨の分の「グリモワール１４」が出た。あの電子パッド型高性能魔導書だ。
遅めの朝食は全員で。璃紗が用意してくれたメニューは――お子様ランチ。
彼女らしい選択に思わず笑ってしまった。
普段は朝食を取らないカリヤも、今日はスライム形態のままテーブルの上にちょこんと乗っている。
俺は三人の前にフルＭＰポーションを並べ、自分の前には先ほど出た初級ＨＰポーションを置いた。
静かな食卓だった。ポーションを掲げ、無言で飲み干す。まるで別れの盃のように。
その後、璃紗と馨はすぐに外出した。気を遣ったのだろう。きっと、終わりの瞬間に一緒にいると感傷的になりすぎるから。
二人の背を見送りながら、俺は心の中で感謝した。
自室にこもり、余っていた召喚メダルを手にする。
「最後の贅沢だな」
そう呟いて、虎猫人と鬼人を召喚した。これが本当に最後になるかもしれない。だからこそ、二人を呼んで思い切り楽しんだ。
――そして午後２時。
サービス終了の瞬間はカリヤと二人で迎えた。璃紗と馨はまだ帰ってきていない。
１４時ちょうど、ガチャマシンの案内紙が「サービス終了」に切り替わる。投入金も回数もゼロ。未開封のカプセルも「サービス終了」の表示で、二度と開けられない。
メンテナンス時と同じ状態。だが、アイテムは――消えていなかった。
検証のため、ドワーフを召喚してチュートリアルフィールドを展開。中でヒヒイロカネの指輪作成を練習し、さらに工房でチャームリングと懐刀を実際に作ってみる。
チャームリングは【魅力値＋１００％／防御＋１０％】、懐刀は【攻撃＋８０％／防御＋１０％】。補正は健在だった。
少なくとも今の時点では召喚もできるし、工房も問題なく使える。
「問題は……明日の昼以降か」
呟いた声がリビングに虚しく響く。
夜、全員揃って夕食を囲んだ。メニューは特別なものではなかったが、味わいはどんな高級料理よりも温かかった。
食卓は思い出話のオンパレード。笑い声の合間に、こみ上げてくるものを隠すのに必死だった。
食後にはワインを開けて、俺と璃紗と馨で杯を交わした。
「ずるい！」とカリヤが文句を言ったが、赤ん坊に飲ませるわけにはいかない。

そして――世界の歯車は、音を立てずに新しい日へと動いていった。
そして4月1日。
今日は入社式がある。だから休むわけにはいかない。
朝食を終えると、璃紗はきっちりとした声で「準備があるので」と出勤した。
馨も「シフトの都合で」と言って、璃紗と一緒にマンションを出ていく。
二人の背中が扉の向こうに消えたあと、静けさが戻ったリビングに俺とカリヤだけが残った。
俺の出勤まではまだ1時間ちょっとある。
しかし召喚キャラを呼ぶには、その時間は少なすぎる。
「カリヤ、人化してくれないか？」
「……いいの？」
黒い瞳をきらりと輝かせて、カリヤが問い返してくる。
「カリヤの『本当の姿』を、ちゃんと見ておきたいと思ったんだ」
「でも、私の本当の姿はいつも見せてるスライム形態だよ？」
そう言いつつ、カリヤの身体がふわりと揺らぎ、次の瞬間――ゴシックロリータの黒髪美少女がそこに立っていた。
召喚直後以来、久々に見る人間形態のカリヤ。
いつもはぷよぷよしたスライムか、赤ん坊の擬態姿。
危険だからと避けてきたが――おそらく、これが最後になるだろう。
俺は胸が熱くなり、彼女を強く抱きしめた。
「カリヤ……ありがとう」
「お父さん、ちょっと苦しい……」
視界が涙で滲む。頬を伝う滴は俺のものだけじゃなかった。
カリヤも泣いていた。――ポイズンスライムの涙に毒なんてないよな、と場違いな思考が頭をよぎった。
召喚キャラは、夢幻の国の存在。
ノムさんの言葉を借りれば「特別な機能を失う」運命だ。
擬態も人化も、特別な能力の一つ。
スライムという存在そのものが、この世界では「特別」すぎる。
――そして璃紗も、馨も同じだ。
璃紗はハーフエルフ、馨は人狼。
人の世界では本来ありえない存在。
今日、早くに出て行ったのも、おそらく感傷的な別れを避けたかったからだろう。
俺が出社すると、璃紗は既に新入社員関連の手続きを済ませて外回りに出ていた。
親会社とケイスタッフの合同入社式、それに続くレクリエーションは昼まで。
その後は近くのホテルで新入社員歓迎会と称した飲み会だ。
歓迎会にも璃紗の姿はなかった。
圭子さんが延々と社会人としての常識を説き、田中社長が酒に任せてくだを巻き続ける。
気づけば時間は１６時近く。ゲームサーバーが停止される時刻をとうに過ぎていた。
耳に入る言葉は何一つ残らず、俺はただ表面だけの会話をし、笑顔を貼り付けていた。
――そして、そんな自分が情けなくて仕方なかった。
歓迎会が終わると、多くの社員が二次会へと流れていく。
俺は「事務作業があるので」と口実を作り、会社に戻った。
実際に残業の必要などない。ただ、誰もいないマンションに帰るのが怖かったのだ。
残業後も、１５分の道のりを３０分かけて歩いた。
玄関の扉を開け、リビングの扉に手をかけ――そこで俺は固まった。
「お父さん、遅いよ。お腹すいた」
黒髪の美少女が、ぱっと抱きついてくる。
ダイニングテーブルには璃紗が腰掛けていた。
「食事の用意をしますね」と、落ち着いた声で立ち上がり、キッチンに向かう。
その横では、馨が少し不安そうな目で俺を見ていた。
召喚キャラたちは――消えていなかった。
胸の奥が一気に緩み、気づけばまた涙が零れていた。

抱きついてきたカリヤが、びよーんと足を伸ばして俺の頭を撫でる。
ふと目の前に薄い胸が迫り、フリルのスカートが視界を揺らした。
「カ、カリヤっ！　人化を解け！」
――恐ろしい、無自覚なスライム。危うく、自分の娘に欲情するところだった。
リビングを見渡す。
ガチャマシンは、もうない。未開封カプセルも残っていない。
召喚メダルはただの金属片となり、投げても何も起こらない。
ポーションは飲める。だが効果があるかは分からない。
工房は――まだ使えた。
ただし作られた品に補正値はなく、おそらく今後は普通の道具になるだろう。

それでもいい。
璃紗も、馨も、カリヤも――ここにいる。
それが、何よりも嬉しい。

■璃紗4　2024年4月
「システムは終了します」――その告知は、まるで夜明け前に鳴る一本の銃声のように、静かに、しかし世界の在り方を一瞬で塗り替えた。

私はシステムによってこの世界に縫い留められている。
私はこの世界が好きだ。
そして、何よりも――主が好きだ。
推理を巡らせると、最もらしい結論が見える。
「この世界に完全互換性のあるもの以外は消える」
人狼も、スライムも、ハーフエルフの私も、この世界に互換性はない。きっと消える。
心の中でそれを否定するほど、現実は冷たかった。嫌だ。絶対に嫌だ。
だから私は考えた。答えは、案外単純だった。
システムを止めるものがいるなら、私がシステムを守ればいい。
引き継いでしまえば、消滅の刃はあたらないはずだ。
――寝ずに勉強した。
システムの設計書と運用手順を、断片も漏らさず頭に刻み込んだ。
眠りを必要としないこの身体は、神様からの贈り物みたいなものだ。
人狼は黙って、私のそばで徹夜を手伝ってくれた。ありがたかった。
全てが愛おしかった。
システムの場所への侵入は映画みたいな派手さはなく、淡々とした手際の良さだった。
空間移動の魔法の前では、どんな鉄格子も紙切れに等しい。
私たちは運営の奥底に忍び込み、システムの設定とデータを、一つ残らず複製した。
夢幻庵に一つ、古いアパートメントに一つ――これが私たちの新しい核だ。
停止の瞬間、私は夢幻庵で、人狼はアパートで待機した。
時計の秒針が吸い込まれるように進み、そして――権限が移った。
想像していた恐怖は、歓喜に変わった。私は、この世界に残っていた。

私たちが継いだ「新しい」システムは、いくらか冷たい改変が施されている。
ゲーム性は消し去り、課金機能は断った。常にメンテナンス状態を偽装し、チュートリアルフィールドなど使えないようにした。
主の持ち物や、主が召喚済みのキャラクターたちの機能は残した。けれど――主以外の者が保有していたものは消した。断固、容赦なく。
理由は単純だ。安全のためだ。
太郎と呼ばれる男や、パンデミックを撒いた遠い国の人物、そのほか数名。彼らの持つ力は――この世界にとって毒になりうる。
消せるなら消す。主の笑顔を守るためなら、私は冷徹になれる。
そして、もう一つ。私のわがまま。
主がこれ以上、別の「誰か」を召喚して心を近づけるのを望まなかった。
召喚の機能も停止した。
嫉妬だけではない。独占欲のような小さな恐れは、守るべきものを愛するからこそ生まれたのだ。
私は誓った。
このシステムを、主のために、そして私が主のそばにいるために、守り続けると。
主がこの世界からいなくなる日まで。私の命が燃え尽きるその時まで――。

◎シリアルキラー　２０２４年６月

ガチャマシンは、跡形もなく消えた。
毎日の生活に組み込まれていたものが、ある日突然なくなる――その喪失感は思っていた以上に大きかった。
気づけば、リビングの片隅を無意識に見ては「ああ、もうないんだ」と胸が詰まる。

インゴットを売って手に入れた1億５０００万円も、もう残っていない。
岐阜の介護会社に投資し、デイケア施設の開業資金に回したからだ。金の輝きは手元から消えたが、それが人の生活を支える土台になるなら本望だと思える。

異空間庫とマジックバッグは、今でも問題なく使えている。
そのおかげで、月島の貸し倉庫は不要になり、すぐに解約した。あのときノムさんが手を尽くして契約してくれた倉庫だ。もう必要がないと思うと少し寂しいが、それだけ日常が落ち着いた証拠でもある。

カリヤと暮らして、もう1年以上になる。
最初は「危険なスライム」と警戒していたのに、今ではすっかり家族同然だ。情が湧くのは当然で、俺のスマホのアルバムは赤ん坊のカリヤの写真でいっぱいだ。
璃紗の腕の中で眠るカリヤの写真を、東野や体育会系課長に見せては親バカを演じている。……あくまで演技のつもりなんだが、彼らには本気でそう見えているらしい。

ソーシャルゲーム「夢幻の国」の公式掲示板は、まだネットの片隅に残っている。
だが、今は書き込みもほとんどなく、あっという間に寂れてしまった。
残っているのは――太郎によるリアルトレードの依頼くらい。
あの男だけは、最後まで何かを引きずっている。

そんな中、現実世界で不穏な事件が起き始めた。
先月から今月にかけて、埼京線沿いで殺人事件が連続発生している。手口はすべて刃物による滅多刺し。現場は、ラブホテルばかりだ。
今月の現場は五反田――そこは俺がかつて牝ブタと使ったホテル。すなわち、太郎が三郎を殺したあの場所でもある。

嫌な予感が背筋を走った、その時。五郎から一本の電話が入った。
「最近、太郎の様子が怪しいです」
「……五反田の事件のことか」
「はい。それに先月の池袋と浦和も」
「なるほど。進展があったら知らせてくれ。正式な依頼金が必要なら――」
「いえ、太郎の調査は私のライフワークです。それより……少々危険で、手荒いことをする許可をください」
「何をするつもりだ？」
「囮になります。そして尻尾を出したら、反撃を」
「……怪我をするな。そして――殺すな」
「怪我は、少しだけ目をつぶってくれませんか」
「……明日の昼、浜松町で会おう。直接話そう」
「了解しました」

翌日、浜松町。少し豪華な個室割烹で、五郎と向き合った。
料理の値段は張ったが、話が話だけに、周囲に邪魔されない環境が必要だった。
五郎の作戦の詳細はあえて聞かなかった。知らなければ、何があっても俺は「知らない」と言えるからだ。
その代わりに言ったのはただひとつ――「死ぬな。殺すな」
俺は五郎に、防御値を上げるアクセサリーとフルＨＰポーションを渡した。
アクセサリーは俺が以前作ったもの。まだ補正値が残っているはずだ。ポーションは効果が未知数だが、ないよりは良い。
五郎は小さく頷き、それ以上は語らなかった。
料理は高かったが、それに見合うほど旨かった。
――ただ、その味さえ、俺の胸の中の重苦しさを拭うことはできなかった。

数日後。五郎から再び連絡が入る。
「ラブホテルで太郎に刺されました。ですが――録画しました」
冷静な声が、受話器越しに響く。
「反撃し、ナイフを奪いました。太腿を刺し、左手の中指を折りました」
さすが五郎は暗殺者だ。荒事もお手のものだ。
しかも、渡したフルＨＰポーションは効いたらしい。

「一瞬で治りました」
そう言われたとき、俺は安堵と同時に奇妙な興奮を覚えた。まだポーションは有効だ――有意義な情報だ。
２日後、また五郎から。
「太郎の自宅が騒がしくなり、通報しました。両親にナイフを振り回していました。その場で逮捕されました」
どさくさに紛れ、ラブホテルの録画データを机に置いてきたそうだ。
はっきりとは言わなかったが、自宅の騒動にも陰ながら一枚噛んでいたのだろう。――さすが、暗殺者だ。
翌日のニュース。
足を引きずりながら連行される太郎の姿が映る。
「警察は池袋や五反田の殺人事件も小宮容疑者が関与していると見て捜査しています」
アナウンサーが告げる声に、胸の奥が冷えた。
さらに、太郎はこう供述したらしい。
「自分は異世界から来た魔物を退治しただけで、人間を傷つけてはいない」
……支離滅裂だ。だが、その言葉に込められた狂気だけは伝わってきた。
俺はガチャで多くを得た。
時にはエルフのような厄介な相手もいたし、結果として犬人や三郎を殺めてしまったこともある。醜い牝ブタにした仕打ちは、今も心を締めつける。
それでも――召喚キャラたちは俺に笑顔と力をくれた。感謝しかない。
だが、太郎にとって召喚キャラは違った。
彼の「夢幻の国」は、俺のそれとはまったく異なる場所だったのだ。
最終的に、太郎は4件の殺人と両親への傷害で起訴された。
五郎への傷害は「被害者不明」とされ、含まれなかった。
裁判は第一審で死刑判決が下り、そのまま確定した。控訴すらしなかったのだ。
決め手となったのは五郎が録画した動画と、太郎が残したメール。
動画の中で、太郎は殺人の快楽を語っていた。メールでも同じ。
だが真実を知るのは、俺と五郎だけだ。動画の言葉は五郎の誘導で、メールの相手も五郎だった。
それでも――4件の殺人は紛れもない太郎の罪。
彼は、俺が渡した8枚のメダルのキャラもきっと殺したに違いない。
その責任を取るには、死刑こそが妥当だった。
五郎に問いかけたことがある。
「見知らぬ三郎のために、なぜそこまでやれる？」
だが彼は明確な答えをくれなかった。ただ一言――
「親しい者を殺した犯人がのうのうと暮らすのを見て、残された者がどう感じるか。それは……その立場に立てば判ります」
五郎は太郎の監視が終わった今も、探偵会社に勤め続けている。
俺から時折、時候の挨拶代わりにメールを送り、異空間庫からアイテムを送る。
新しいガチャアイテムはもう出ない。いつまで続けられるか分からない。
だが――お世話になった人への感謝だけは、決して忘れまいと思う。

◎人狼の寿命、スライムの寿命　２０４９年１１月

気がつけば、俺も６０歳。
かつて「まだまだ若い」なんて思っていたが、もう立派に初老だ。鏡に映る自分を見ても、否応なくその事実を受け入れざるを得ない。
この２５年――世界は何度も破滅の危機に直面した。そのたびに、世界はかろうじて回避してきた。だからこうして人類はまだ生きている。
生き延びたからこそ、俺もこうして歳を重ねられている。
生活も大きく変わった。
俺と璃紗はケイスタッフを辞めた。今は伊東守谷資産管理株式会社で働いている。
璃紗は社長。俺はパート事務員をしている。肩書きはただの事務員だが、正直なところ、株主配当だけで十分暮らしていける。けれど、それでも働いているのは――単純に、璃紗と一緒に働くのが楽しいからだ。
伊東守谷資産管理株式会社は、介護サービスを中心に事業を展開している。
廃業した温泉旅館を改装して作った「水明・夢幻の里」や、廃校になった小学校の跡地に建てた「西小・夢幻の里」

観光客向けの日帰り温泉施設や整備されたシネマ通り商店街も、今ではすっかり地元の顔になった。
シャッターばかりが目立っていた通りが、活気を取り戻した様子を見て、姉も兄も満足そうに笑っている。
母は3年前に96歳で亡くなった。肺炎だった。
父が74で逝ったのに比べれば、ずいぶん長生きしてくれた。2年に一度は旅行に連れて行き、最期も看取れた。少しは親孝行できたのだろうか。
母が残してくれた貯金を基に「守谷幾子育英基金」を設立し、若い芸術家や工芸家を支援している。これで母の名はこれからも残り続けるだろう。

……けれど、この歳になると別れは避けられない。

馨は医師になった。
システム終了前に「医学部卒業資格」を捏造してもらい、その後、国家試験を突破し、2年間研修医を務めて、西小・夢幻の里に併設する病院に勤めていた。
だが――去年、48で亡くなった。人狼としての実年齢は42。璃紗曰く、人狼の寿命は平均40にも満たないらしい。
だから馨は、天寿を全うしたと言えるのかもしれない。
それでも俺はしばらく立ち直れなかった。
召喚キャラが死ぬとき、召喚主の頭には衝撃が走る。馨のときは鈍い痛みが静かに押し寄せ、そして去っていった。その瞬間、馨の体は跡形もなく消えた。俺はただ、その最後の顔を見届けることしかできなかった。
消える直前の馨の顔――それは、今でも思い出すたびに胸が締め付けられるほど、可愛らしかった。

そして、もう一人。

スライム――カリヤ。
最弱のモンスターとして扱われることが多いスライムにも、寿命はある。銅メダル相当で12年、銀で24年、金で36年。
カリヤは銀相当の「ポイズンスライムのくノ一」だった。召喚してから25年、実年齢は29歳。寿命を超えてしまっていた。
そして――細胞溶解により、静かに死んでいった。

その瞬間、一枚のメタルが残された。

金色に輝く、ポイズンスライム・土遁上忍の召喚メダル。
「……カリヤが、金メダルに……？　20グラムの金……」
俺が呆然とつぶやくと、璃紗が厳しい視線を向けてきた。
「カリヤがドロップしたメダルは、カリヤそのものです。それを『金20グラム』なんて……まさか、売るつもりですか？」
「い、いや！　売るわけないだろ！」
「当然です」
璃紗は冷ややかに言い放つ。その瞳のあまりの美しさに、俺は一瞬、ゾクリと震えた。
……60歳を過ぎても、璃紗は相変わらず美しい。俺なんかより、ずっと若く見える。

そして――カリヤがいなくなった翌朝。
まだ立ち直れずにいた俺に、璃紗が言った。
「攻矢さん。……カリヤを召喚してください。できるかもしれません」
「……召喚？　でも、もうガチャは――」
「これは『システム終了後に発生したメダル』です。従来の制約を受けない可能性があるのです」
俺は震える手でメダルをトスした。

――ポンッ。

25年前、何度も見た光景。靄が立ち上り、そして――黒髪ゴシックロリータの美少女が姿を現した。
「カリヤ！」
俺は叫び、抱きしめた。
「如何され申した？　早速伽でも致す也？」
「おまえ……戻ってきたのか！」
涙があふれる。璃紗も隣でカリヤを抱き寄せ、囁いた。
「……おかえりなさい、カリヤ」
一瞬、古風な口調で戸惑っていたカリヤも、俺たちの顔を見つめ、目を潤ませる。
「お父さん……お母さん……！」
その声に、俺は再び強く抱きしめた。
――ポイズンスライムの涙が毒じゃなくて、本当に良かった。
「攻矢さん。……永年召喚延長石、使わないのですか？」

「……あっ！　忘れてた！」
慌ててクローゼットを探しに走る俺を、璃紗は呆れ顔で見つめていた。
……その冷めた表情ですら、この世のものとは思えないほど、美しかった。

カリヤはレベル1に戻っていた。修練を思い出してプルプル震える姿を見て、俺は即座に決断した。
今度はもう辛い修行なんてさせない。残っているメダルを総動員して、できるだけレベルを上げてやろう。

――また3人で暮らせる。
俺たち家族の新しい日々が、ここから始まる。

■璃紗5　2093年4月
風が古い屋根瓦を撫でるように、時間は静かに流れていった。
私は窓辺に座り、歳月の刻印を指先で辿る――あの日の声も、あの日の匂いも、すべてがまだ胸の中にある。

主は、103歳で静かに息を引き取った。
人間としては長寿の果てだった。けれど、その裏には、誰にも語れない仕掛けがあった。
人狼が最後の力を振り絞り、主の手を握って――細胞を若返らせるという聖魔法を施したのだ。
リジェネレーション。
その魔法は、最高位の聖魔法士でなければ扱えない大術だ。人狼は、その代償に命を落とした。けれど、その魔法は完成しなかった。人狼は途中で力尽きた。
もしあの夜、魔法が完成していたら、主はもう少しだけ長く、こちらで笑ってくれただろうか。
それでも、主が103年を生きたのは紛れもなく人狼の贈り物。私はその事実を静かに抱きしめる。

スライムは、主を見送るより先に、二度目の天寿を全うした。
召喚メダルは落ちなかった。
初回の別れのときも、既に召喚機能は停止していた――だが私は――あのときシステムを改変した。
ポイズンスライムが再び姿を見せたのは、私が一時的に召喚機能を許可したからだ。システム管理者となった私は、ルールを必要に応じて編み直せる立場にある。そう、私がこの世界を形づくっている側の一人なのだ。

私たちのシステムサーバーは二拠点にある。
古いアパートメントのサーバーは数十年前に移転している。
あの場所は今はもうない。再開発でビルの一部になっている。
今のサーバーの所在地は、メインは夢幻庵、バックアップは岐阜の揖斐川。
揖斐川には、主がかつて呼び寄せた者たちが暮らす、小さな集落が根を張っている。
彼らはこの地に馴染み、地域のために働き、やがて子を成した。召喚キャラクター同士、あるいはこの世界の人間種との混血が生まれた。
幾人かの命が失われ、子が子を産み、総勢は47名――その数が集落で暮らしている。

召喚キャラクター同士の子――純血種らは、不思議な宿命を帯びている。
彼らは主の「命令」に従う性質を残していた。
主は新たな子、孫の誕生ごとに揖斐川へと足を運び、手作りのミサンガを結びながら、同じ言葉を紡いだ。
「誕生おめでとう。健やかに育て。楽しい人生を。そして、可能ならばここで生きて、ここの人々を幸せにしてくれ」――
祝福のつもりだったが、受け取る側にはそれが命令のように響いた。
純血種は従い、そして尽くす。

幸いなことに、「この地」の解釈は人それぞれだった。
ある者は揖斐川町を「この地」と解し、そこで根を張り、町のために尽力した。
また別の者は「日本」や「世界」を解し、広く人々のために働いた。
結果として、主の遺志は多様な色を帯びて広がっていった。

バックアップサーバーの保管は、主の要請ではなく、私の依頼だった。
私は依頼の対価として、年に一度――4月1日だけ、システムにアクセスする権利を集落の者に残した。
その日だけは、私自身も過去の扉を開き、必要があればこの世界に小さな手を差し伸べる。公文書の修正も偽造も、必要ならば行う。
それは一種の責務であり、ある意味で、私の贖罪かもしれない。

夢幻庵にも、そしてその外にも、主の呼んだ者たちがいた。
平和均衡維持隊として仕えた9人。さすらいの聖女スライムと、従者のインモータルゾンビ。

主が直接召喚したもので、今、生き残っているのは私と、聖女とその従者だけだ。
私が4月1日にできることがあるなら、私はその一日を、主のために、そして彼らの子孫ために使うだろう。

この世界の人間種の寿命はおよそ85年。主はそれを20年も越えて生きた。
私はハーフエルフだ。寿命は150年。今の私の実年齢は110歳、あと40年は残っている。
長い時間があるなら、私は主の思い出を、丁寧に織り続けるつもりだ。誰も踏み込めない私だけの庭で、あの日々を花束にして大切に抱いていく。

これから先も、私はここの世界で暮らす。
主のために、そして主が願った「小さな世界」のために。
静かに、しかし確かに――私は守る。春の風がまた来るたびに、私は窓辺で微笑む。
それは、愛の形の一つ。誰にも見せない、私だけの誓い。

◎夢幻の国　2023年1月

――夢を見ていた。
とても長い夢だった。
ただの夢にしては、やけに鮮明で、あたたかい。
普通の暮らしをしている夢。
家族がいて、友人がいて、俺を助けてくれる人たちがいて――幸せに満ちた夢。

そこには、俺に関わった全ての人が登場していた。
二度と会えないと思っていた田中社長や体育会系課長、後輩の東野。
見舞いに一度だけ来てくれた友人の半田。
二軒先に住む音羽は、昔のような笑顔で微笑んでくれた。
掃除の圭子さんまでいて、なぜか田中社長の奥さんになっていた。……苗字が同じだからだろうか。

――馨、璃紗、カリヤ。
夢の中で彼らと一緒に過ごす日々は、ごく自然で、ごく当たり前で――それでいて、何よりも幸せだった。

……だが、それはただの夢ではなかったのかもしれない。

夢と現実と「夢幻の国」の出来事が混じり合い、溶け合っていた。
夢幻の国。
別の世界から召喚キャラを呼び、ともに冒険するゲーム。

夢の記憶は目覚めとともに薄れていく。
あれもただの夢だったのだと、自分に言い聞かせようとしても――心の奥で「違う」と囁く声がある。

俺は、3年前の正月に音羽の車に撥ねられてから、半身不随になっていた。
会社も辞めざるを得ず、今は特養老人ホームで暮らしている。
若者向けの介護施設がないからと回されたのだが、30代の若さで老人たちに囲まれての生活は正直、つらい。

けれど、俺はまだ生きている。
幸いにして上半身は動く。姉が持ってきてくれる刺繍糸でミサンガを作り、それを姪がネットで売ってくれる。
一部の人には好評で柄を指定した注文が入ることもある。
誰かに求められ、喜ばれる――それがあるだけで、生きている意味を感じられる。

そして、この施設には、俺を支えてくれる人たちがいる。
どこかミステリアスな刈谷さん。
いつも明るい馨君。
冷静で美しく、時にきつい目をする璃紗さん。
彼女たちがいるから、俺は毎日を過ごせている。

……だからこそ思う。
あの夢はただの夢じゃない。きっと「召喚」だったのだと。俺は夢幻の国に召喚されたのだと。

そう考えながら、俺は今日もスマホを手に取った。
注文が多かった週だから、ご褒美に一回だけ有料ガチャを回すことにする。

――出てきたカプセルの中には、ハーフエルフの時空魔法士の召喚メダル。

その瞬間、背筋に冷たいものが走った。
夢の中の璃紗は――時空魔法士だった。

もしあれが夢ではなく現実なら……誰かが俺を召喚し、事故にあう前の過去へ飛ばしたのではないか？
自由に動く体で一生を過ごす幸せを、俺に与えてくれたのではないか。

「……そう考えると……」
呟いたとき、背後から声がした。
「あら、ガチャからハーフエルフの時空魔法士が出たのですね」
璃紗さんが入ってきて、俺のスマホを覗き込み、少しきつい目で俺を見つめた。
そして――ふっと微笑んだ。
……俺は幸せだ。
この幸せが、どうかこれからも続いてくれますように。

「夢幻の国」　―ガチャを引ける能力―

うえはらじゅん

初版　２０２５年１０月５日